
ピウニー卿の冒険！

オオカミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピューニー卿の冒険！

【Zコード】

Z9584W

【作者名】

オオカミ

【あらすじ】

オリアーブ国の騎士ピューニー卿は、人々を苦しめていたグラネク山の魔竜を倒す。だが、魔竜が最後の力を振り絞つて吐き出した呪いを受け止めて、彼は果てた。竜殺しの騎士ピューニー卿の死が惜しまれて1年後、ある酒場から物語は始まる。

1人の騎士と1人の魔法使いが織り成す愛とネズミ（キンクマハムスター）と猫シンガブーラと、その他いろいろの物語。

001・旅は道連れ、世は情け（前書き）

以前にひらりで短編の同名小説として掲載していたものを序章とし、長編にしたものです。以前の短編は「ピウニー卿の冒険！」（序章あるいは別の物語）（<http://nicode.syssetu.com/n7199/>）といつタイトルで、現在は検索から外しております。001～004までは、これらの作品を改稿・設定変更したものとなつておつます。

001・旅は道連れ、世は情け

魔法と剣の国、オリアーブ。

この国は多くの立派な騎士と、賢い魔法使いで支えられた平和で豊かな国だ。

今でこそ平和を謳歌しているオリアーブだが、1年ほど前、この国は危機に陥った。

グラネク山の山頂に住まう魔竜。この魔竜が、ふもとの村々に姿を現しては、炎を吐き、人々の生活を苦しめていたのだ。オリアーブ国王は信頼のおける1人の騎士に、この竜の退治を命じる。騎士は仲間たちと共に果敢に戦い、この竜を倒した。…だが、魔竜は最後の力を振り絞つて、呪いの息を吐いたのだ。一人その気配に気付いた騎士は、魔竜の吐く呪いが麓に届くことを怖れ、その全てを受け止めた。その呪いを受けた騎士は、彼の相棒だった魔法剣と共に、塵となつて消えたという。

命燃やした騎士は竜殺しの騎士と讃えられ、その命が惜しまれた。

* * * *

その日、ピウニー卿は拠点にしている小さな村の小さな酒場で、チーズと果実酒を嗜んでいた。

小さな酒盃に入れた紫色の液体はふくよかな香りで、ピウニー卿は満足気だ。

また、少し青いカビの生えたチーズは、癖があるが果実酒と共に口に含めば、さらに芳醇な味わいだつた。

ピウニー卿は最後の一口を煽る。うむ。実に美味しい。

「おおおおおおおうー ちょっと、誰だ、このボトル開けたヤツー！これは、竜殺しの騎士様がキープしてた自慢の果実酒で…って、うおああああ！ 極上のアオカビチーズまで千切つて、ちくしょう！ 誰だ、泥棒か！ 意地汚い食べ方しやがって！」

なにやら、酒場の奥から店主の騒がしい声が聞こえてきた。まったく、興のない事だ。ピウニー卿は、やれやれと立ち上がる。不意に、ピウニー卿の身体が翳つた。

「おー。お前、その入れ物なんだ。」

店主の声が、えらく近くに聞こえた。どうやらピウニー卿に向かって怒っているようだ。

「まさか、お前が開けたんじゃないだろうな…。」

人聞きの悪い。

そもそも自分がキープしていた酒を開けて何が悪いといつのだ。ピウニー卿が、ふんと鼻を鳴らすと、店主が怒鳴るのは同時だった。

「このネズミ野郎が……………おいっ、タマーーーいつを食つちまえー！」

「二ちゃん。」

ほほう、猫の分際で私を食ひりつと？ 出来るなりば、やつてみよー！ とつ！

ピウニー卿は、隣の戸棚へと飛び移つた。

店主の皿には、ふもふもした薄い黄色がかつた丸いネズミが戸棚に

飛んだように見えた。

* * *

「……………」

猫がピウーー卿を追つて戸棚から戸棚へとジャシンプする。置いてある酒やら、スペイス瓶やら、漬け物瓶やらが落ちないかと、店主はハラハラなのだ。

「お、おこ、タマ、待てそつちは危ない、ちょ、わー————」

「……やがて」

ネズミ、じゃない、ピウニー卿はとーんとーんと、器用にきゅうりの酢漬けの入った瓶から、食用酒の入った瓶に飛び移つた。それを追いかける猫が1本目の瓶をするりとかわし、2本目の瓶の脇を通り。その瞬間、瓶の陰に隠れていたピウニー卿が、パブリカの暖簾をかきわけて猫の眼前に現れた。猫がぎょっとした顔で、ブレークをかける。

スキあり！

「...」がてら

ピウー卿が、（針のよつな）剣を抜いた。間一髪で顔を背けた猫！ だが、ピッ…と、セピア色の白慢の毛を掠めて、驚いた猫は足を踏み外しかける。

「ハヤヒー！」

しかし、からいひじで踏ん張つた！

「ふしゃ――――――！」

そして猫も負けてはいない。シャキーンと爪を出して、ピューー卿の身体を払う。おおつと！ ピューー卿は間一髪のところを一步下がつて直撃は免れたが、剣を下げていたベルトが運悪く猫の爪に引っかかつてしまつた。

「ぬつ！？」

「ハヤヒー？ ハヤヒー？ ハヤヒー？」

前足に何か氣味悪いものがひつかかつた感覚に、猫はパニッシュに陥り、きゅうりの酢漬けと食用酒、それにパプリカ、吊るしているためねぎ、各種調味料、食器、諸々巻き込んで、棚から足を踏み外した。

「うおおおおおおお――！ やめてえええええ、タマ――――――！」

店主の悲痛な声と、ガシャ――――ガラガラ、といづ（お約束の）食器やら、ガラスやらが粉碎される音が響く。

「ン。カラんカラん。

最後に金属で出来たボウルが落ちてきて、酒場は静寂を迎えた。

床には、酒と酢と調味料を頭から被つて悲惨な状況になつた猫と、その猫の前足に引っかかつてゐるネズミが居た。

六六六六

「まったく、役に立たない猫め！…せつかく綺麗な毛並みだから置いてやつていたものを、ネズミ一匹捕まえられないなんて…。もう一度とうちの敷居を跨ぐなよ。」

店の裏口から放り出された猫とネズミは、一瞬一瞬と裏路地を転がつてぐつたりした。

店主の言つた通り、元は綺麗だったのだろう、猫のセビア色の毛並みはどうどりで、しょんぼり耳が下がつて無残なものだつた。猫は、面白く無さそうに前足に引っかかつたネズミを払うと、妙に人間くさい、長いため息をついた。

「もつ、なんなのよ……。レディにネズミを捕まえようとするがつ
が間違ってるんだわ……。ああ。ほんとこ、どうつぐりじゃなこ。」

「いたた。おい、猫、投げるな、粗雑に扱うな、もつと一寧にん？」

三
一

猫の綺麗なグリーンの瞳が、ピウニー卿をしげしげと眺めた。ピウニー卿の艶々したこげ茶色の瞳も、同じよひに猫をしげしげと眺めている。

そして、同時にこうつ言った。

「うむ、近所迷惑だ――――――――――。」

酒場から、店主のイライラした怒鳴り声が聞こえた。

* * *

金色の毛並みのネズミが鬱をあらめりと揺りしてくる。
街道をセピア色の毛並みの猫が歩いていた。その背の上では、薄い

「いい天気だな。サテイ。」

「そうね、ほんつとーにいい天気ね。」

「機嫌が悪いな。
人参を食べたくらいで怒らなくてよからう。」

一別に怒ってないわよ

一
二
怒りである

「怒ってなし」

最後まで人参を残しておるから嫌いだと思つたのだ。

「もう、ピューーうるさい。怒つてないってば！ それより、騎士のくせにレティアの背中に乗つて移動するのは何事なのよ！」

「歩くのが遅いから乗れと言つたのは、サティだらう。」

ピウニー卿はすとんと降りて、サティの横を歩き始めた。背中から重みが無くなつたサティは、ピウニー卿の歩幅に合わせるようにつくりと歩く。

サティの機嫌が悪い原因は、昨日まで滞在していた村の宿屋の娘さんが出してくれた食事のことだ。人の気配のあるところに立ち寄つた時は、サティがかわいい猫のおねだりポーズを使って、人間の食べ物をもらつている。それをピウニーと半分にして食べるのが常だ。（騎士であるピウニー卿は、このような形で女性に借りを作りたくはない、大いに不本意だったのだが、今は非常時であり仕方がない……といふことで、サティと協力して、このよつつな体制になつているのである。）

昨日の食事には人参のグラッセが1つだけ入つていた。いつもなら、ピウニー卿に頼んで剣で割つて食べるところだつたが、「いらないのなら私が食べるぞ。」と言つて、ピウニー卿がひょいぱくと1人で食べてしまつたのである。人参のグラッセ、甘くて好きなのに！
騎士のくせに！

ピウニー卿いわく、「騎士たるもの、出された食事は全て食べなければならぬ。」というのが信条だそうだ。

それを聞いたサティは、好きなものを最後に残しておくたちだと、大層憤慨した。

酒場を追い出されてから1ヶ月。ネズミのピウニー卿と猫のサティは、こうして2匹で旅をしていた。あの日酒場の路地裏で、お互いまぐれを解し、話すことのできる猫、そしてネズミとして認識しあつた2匹は、互いの身の上を打ち明けたのである。
この2匹には、とある共通の事情があつたのだ。

それはこうこう話である。

あるところに魔法剣を使いこなす1人の騎士が居た。その騎士は、人々を苦しめているというグラネク山の魔竜を倒したという。そして魔竜が死の間際に、最後の力を振り絞つて吐き出した呪いをその身に全て受け止めて、騎士は塵となつて消え果てた。

「その話知ってる。竜殺しの騎士つて人でしょう。」

「ああ。だがな。」

その物語には続きがあつた。

実は、魔竜が最後に吐き出した呪いによつて、誰にも気付かれることがなく騎士はちいさなネズミへと姿を変えてしまつたのである。ちなみに、騎士が手にしていた剣は、律儀にも、主と同じネズミサイズになつたといつ。

「へー。で、それが貴方だと。」

「へーつて。おい、サティ。感想はそれだけか。」

「うーん。あのね…。」

そして、もう一つはこうだ。

あるところに古代魔法にも造詣の深い女魔法使いが居た。世俗とあまり関わりたがらない師匠に代わつて、オリアーブの魔法師団や魔法研究所からの依頼を引き受けていたという。

あるとき、研究に身を捧げる余り暴走した魔法使いが、死靈術に手

を出した。突如暴れ狂つたその死靈使いを、女魔法使いは力の限りの魔法で応戦した。だが、死靈使いが最後に放つた呪いを全てその身に受け止めて、女魔法使いは塵となつて消え果てた。

「ほほひ…。王都には確かに魔法師団と魔法の研究所があるが、そのような出来事があつたとは。」

「魔法研究所は有名だけど、事件があつたのは奥の方だし、あまり騒ぎにならなかつたのかもね…。それで。」

その物語には続きがあつた。

実は、死靈使いの呪いによつて、誰にも気付かれることなく女魔法使いは小さな猫へと姿を変えてしまつたのである。
ちなみに、戦いの最中で杖は失くし、杖無しの猫の魔力ではあまり強い魔法は使えない。

「あー。それがお前さん、と。」

「あー、って。ピューー。感想はそれだけ?」

「うむ。…なんというか、その、似たような話だな。」

「んー…まあ…、そうね。」

そういうわけで、2匹は同じ境遇として意氣投合し、この魔法を解くことの出来そうな人物、サティの師匠であるといつ理の賢者の元へと共に旅をすることになつたのである。

旅は道連れ、世は情け。

001・旅は道連れ、世は情け（後書き）

ピュー卿はキンクマハムスター、サティはシンガプーラをモデルにしておつます。

002・尻尾の動きがゆっくつになる

「サティ、機嫌は直ったか。」

「だから、怒ってないつてば。」

「うむ。」

「何よ。」

「サティは機嫌が直ると、尻尾の動きがゆっくつになるな。」

「わづほんとに、ピカッハルカ。」

「名前を略すな。」

「騎士様なら、もうちょっと厳肅に出来ないの？」

「別に誰も聞いてないのに、構わんじゃないか。」

「分かつた分かつた、ちょっと髭！ 髭揺らさないで、むずがゆい。」

「む。勝手に揺れるんだ、仕方なかろう。」

夜。街道から少しはなれた森の、木の下で2匹は休んでいた。周囲の様子が分かるほど、月の大きな晩だ。サティは丸くなつて、その喉の毛皮にピューー卿が埋まっている。大体、こういう感じで2匹、ではない、2人身を寄せ合つて眠るのが常だった。

サティの毛皮は艶やかで絹のような触り心地だ。いつも河原を見ても水浴びをしているし、猫になつても使うことが出来たという、淨化の魔法で汚れひとつ無い綺麗な毛皮を保っている。ピウニー卿の毛皮もふわふわと柔らかで温かい。サティと比べると身体が小さいから、相手の毛皮を思い切り堪能出来るのは大体ピウニー卿で、それがサティには不満だった。

「おい、サティ、締めすぎだ。ちょっと緩め…。」

「んー、いいじゃないちょっとくらいくかふかしても…。」

「…しつ…サティ、静かに…。」

常とは違うトーンになつたピウニー卿の声に、サティも声を抑える。前足を少し緩めて、ピウニー卿を解放した。ピウニー卿は腰の剣を抜くと、前方に睨みをきかせる。とても凜々しい姿だが、ネズミである。サティは身体を起こして、自分の身の魔力を集中させた。杖が無ければ使うことの出来る魔法は限られるうえに、猫のサティの魔力はとても低く、初歩の初歩程度の魔法しか使うことは出来ない。だが、無いよりはマシだろう。

グルルル…。

茂みの向こうから聞こえる唸り声。

恐らく、野生の狼か。

「下がつている。」

「え。」

「安心しろ。」

ピウーニー卿がサティを庇つよつて一步前に出て振り向いた。ゆっくりと、頷く。

「サティは、私が守る。」

ピウーニー卿のYの字の口元がちまちま動き、その可愛らしさに動きに反して重々しい口調で言った。：それは、眼前の敵から必ず守るという、騎士の固い決意だった。小さな丸い耳がひこび」と忙しなく動いている。サティのグリーンの瞳が驚愕に広がって、何かを言いかけたその瞬間、茂みの奥から狼が飛び出した。

「ピウーニー…！」

とつー

ピウーニー卿が大きく跳躍した…！

キヤイン…！

狼の吼え声が響く。ピウーニー卿の剣が、狼の前足を薙いだのだ。体格差もあってピウーニー卿の身体は狼の下を潜り抜ける。…だが、

低！

攻撃の位置低！

とつー…つじかつこよく跳躍したのに、最下段攻撃！

狼の横を前転してしゅたつと剣を構えたピウーニー卿の身体を、サテ

イは脛えて横に飛んだ。もちろん、剣が刺さらないよう~~て~~氣を使うのも忘れない。サティは駆けた勢いを殺してターンすると、すぐに止まつて眼前の狼を睨みつける。

ぽとりとピウニー卿の身体を落とすと、尻尾を大きく膨らませた。

「…くつ、不覚…つ…」

「ピウ、私も一応魔法使いの端くれなんだから、バカにしないで。」

「バカになどしておらん。」

「だつたら一人で突っ込みますに、多少は頼りなさいよ。」

「……。」

前足を傷つけられて、気が昂ぶったのだらう。狼は鼻に皺を寄せ、さらに大きな唸り声でこちらを睨みつけている。ピウニー卿は、むうと唸つて髪を撫でた。サティが猫でありながら魔法を使うことができるのももちろん知っている。軽んじたわけではない。だが、ピウニー卿は騎士なのだ。自分以外の者を守る、それがピウニー卿の騎士としての矜持だった。サティにそんな風に言われるとは、思つてもみなかつたのだ。

「…ああ、すまなかつた。」

「分かればいいのよ。」

「サティ、魔法で氣を引けるか。」

「乗つて。」

サティが頭を下ろすと、心得たピウニー卿がそろりと登る。

「限界まで近くに行つて、魔法で私が気を引く。」

「その隙に私が狼の身体に飛び移つて、魔剣の魔力を狼に送り込む。氣絶くらいはさせられるはずだ。」

「了解。しつかり掴まつて。」

サティが、たつ…と地面を蹴つたのと、狼が再び跳躍したのは同時だ。

〈ニーダ・ヴィ・ラーマーク！〉

（雷撃の鞭！）

狼の牙がサティに届く前に、サティはもつとも小さな雷撃の呪文を唱えた。バチイ…！と小さな雷の音が狼の足元で響き、その衝撃に、狼がキヤイン…！と鳴いて、後ろに飛んで頭を低くする。さらにそれを追撃するようにサティが距離を詰めると、狼が顔を上げる瞬間にピウニー卿がその頭上に飛び移つた。

喰らえ！

ピウニー卿が思い切り狼の眉間に剣を刺し、カツ…！とそこが光る。その瞬間、魔力が膨らむのを感じた。…これが、ピウニーの魔法剣…！？と、サティがハッとした瞬間。

キヤウウウウウン…！

狼が思いつきり頭を振つて、ピウーー卿を放り投げた。綺麗な放物線を描いて、ピウーー卿は木に激突し、ずるずると地面に落ちる。その末路を狼は確認しないまま、キヤインキヤイン…！と鳴きながら、いや、泣きながら、森の奥へと帰つていつてしまつた。

去つた狼にほつとしたサティは、すぐにピウーー卿へと意識を戻す。

「ピウーー…！」

激しく木に叩きつけられたピウーー卿は、地面の上でぐつたりとしていた。目を閉じ、かくりと落とされた前足は、剣を握つてはいなかつた。サティの小さな胸に嫌な予感がよぎる。

「え…やだ…ピウ…ピウーー…死んじゃつたの？…お願い、目を開けて。」

悲痛なサティの声にも、ピウーー卿は答えなかつた。

サティの前に、小さな金色の毛皮のネズミが倒れている。
あんなに元気に動いていた耳も今は萎れ、髭も揺れていない。

ピウーネ

綺麗な薄い金色の毛並み、黒に近い濃い茶色の瞳、まるくて小さな耳、ぴくぴくといつも楽しげに揺れている髪、Yの字の口元、小さな前足、短い後ろ足、ほとんど無い尻尾、ぴくぴくといつも揺れていの髪（二回目）、Yの字の口元（二回目）。…もう動かないの？

サティの耳がしょんぼりと寝てしまつた。大きなグリーンの瞳から
ポロリと涙が零れ落ちる。

すんすんど、サティが鼻を鳴らして、ピカ一郎の小さな身体にそ
つと顔を寄せた。

「だからお願ひ。……もう一度私のことをサテイって呼んで。」

ピューー卿の口元にサティの口元が触れ、ぺろりと舐めた。

「腹が太ましいとはどういうことだ、サティ。」

* * *

「え、ピカーカー…？…生きてるの…？」

「私がアレくらいで死ぬものか。」

「…ああ…ピウ、よかつた…貴方が死んだら、私はじつしようかと…！」

サティは、両手でピカーカー卿の首に抱きついた。大きく息を付いて、ペロンとその首筋を舐める。

ショット^ム

ん？

両手で？
首筋を？
舐める？
ショット^ム？

妙な違和感に、サティが眉を潜める。…眉を、潜めるって。猫に眉あつたつけ？

「お、お…サティ、待て、離れる…サ。」

「え？」

気がつくと、サティの下には鍛え抜かれた男の身体があった。全裸

で。

抱きついているのは、男のものとしか言ことづのないしつかりとした作りの首で、確かにサテイがそこを舐めたはずだ。いや、はずだ、ではなくて確實に舐めた。だつてしまつぱかつたし。そして眼前には薄い金色の髪と、それより少し濃い色合の無精髭を生やした精悍な男の顔。凜々しいじげ茶色の瞳は、今は落ち着かなさげに泳いでいる。

「え、待つて、ちよつと、なにこの、」

「サテイ、頼むから、動くな。」

ピカーネ卿は、一言一言凶かるよひに、やつべつと言つた。

ピカーネ卿の上には、華奢だが細すきるところわざでもない、まろやかな女の身体があつた。全裸で。

抱きついているのは、女のもとしか言ことづのないあまつ筋肉のついていない腕で、自分の鍛えた胸の上には当然のように柔らかな双丘が当たっている。視線を落せば見えるはずだ。いや、はずだ、ではなくて、今ちらつと見えた。見てはない。見えた。

そして顔を少しずらすと、こちらを見ている大きなグリーンの瞳と目が合つた。わらわらと自分の身体の上に零れ落ちるセピア色の髪が、肌を撫せてくすぐったい。

「見えたと、今何見」

「こやこやこやこや、サテイ、…だから、今、身体を離すな、見え
るー。」

「見えるって、見ないでよ変態ー！」

「見えただけだ、不可抗力だらう。人聞きの悪いことを言つた、密着するな！」

「離れるのかくつづくのかどひかよー。」

「いやすまん、ちょっとところごう事情があつて、くつづいても離れても男の事情がだな。…とにかく、今は、離れるな。」

「…あ、やだ、ちょ、と、腕、回れないで。」

「支えないと落ちるだらつー。」

「誰がよー。」

「サティが、だ！ 落ちたら地面だぞ、お前の身体が泥で汚れる。」

「なつ…」

2人の間に沈黙が下りた。思いがけないピューー卿の言葉に、サティの顔が熱くなる。

「地面には石も転がつてゐるし何があるか分からん。お前の肌が傷つく。だから…」

「ピューー…。」

「だから、少し落ち着け…サティ。」

そう言いながら、ピューー卿の逞しい腕にさりに力が籠もった。腕

に絡みつくように落ちるセピア色の長い髪は絹のよつた手触りで、猫の時のサティの毛並みを思い出させた。男の腕が女の背を撫で、長い髪をゆつくりと梳いていく。それはサティの心を落ち着かせていくよいで、落ち着かせて…

「つて、この状況で落ち着くかっ！」

「ここは落ち着くところだわつー！」

「大体、なんで裸にベルトなのよー。」

ピューー卿は全裸に帯剣用のベルトのみ着用という姿だった。ベルトも剣に合わせてきちんと大きさが変わっているのがいじらしい。まあ、逞しい身体のいい歳の男が全裸にベルトに帯剣しているのだから、なんとも言いようのない空気であることは否めない。ネズミのときも言つてみれば全裸でベルトしていたから、当然といえば当然だが。

「知らん…私が聞きた…」

「だつて、だ…、」

2人の言い合ひが同時に止んだ。

サティの形のよい眉が歪む。それに気が付いたピューー卿は何故か目を逸らした。

「ピューー。」

「気にするな。」

「気になる。変なところに何か触ってる。」

「分かってない。とりあえず下手に動くな。生理現象だから気にするな。」

生理現象、といふ言葉に、サティはなぜか力チンと来た。

「ふーん。生理現象なんだ。」

「なぜセレジ機嫌が悪くなる。」

「別に。」

「おい、サテイ。何に怒つてる。」

ピカーネ卿の腕から逃れようと、サティがガサゴソと動き始めた。

「お。おい、動くな。」

「離してよ。」

「待て。話を聞け。足を動かすな…っ、ビ、ビ…」

「どにも触つてないわよ。なにこれもうこやぢみつとまたナニかしつからじしつきたし…。もひひひひひ…」

「ナニかと落ち着きなさいよ…」

「ぐつ、私は何もしていない、サティが動くからであるつー…そもそも、魔法使いなら、服とか出せんのかー！」

「召喚魔法は杖が無いと無理…。」

サティの動きがぴたりと止まつた。待てよ。杖無しで出来る、召喚魔法が一つあつたはずだ。

「ああ…。」

今、気付いた…という風に、サティががばっと身体を起こした。起こした途端、髪と身体がふるんと揺れる。ああ…、実にいい眺めだ、大きすぎず小さすぎず適度な大きさで形が。つて、おい！

「サティ、身体を起!」

「うわあああああ、見るなああああああ。」

「見せるな!」

「見せてない!」

「見えるんだ!」

「もう分かったからちよつと黙つてよ、田え閉じてよーー。」

「ああ、そうか!」

その手があつたか。

「杖の召喚は杖無しで出来るから、杖さえあればどこでもできるはずよー。」

サティは、身体を起こしたままぐつと拳を作った。ピウニー卿の目には滑らかな曲線美が写る。長い髪の毛がいい具合に胸の膨らみを隠しており、段差の部分だけがちらりと見える。そんなチラ見えもまた一興。よしきた。

「よしきた、サティ、それでいいづ。」

「だから、ピウニー田え閉じてばー。」

「あ、ああ、すまん。」

チラ見えから我に返ったピウニー卿が田を開じたのを確認すると、サティは呪文を唱えた。

↙イノトウーモ・サティ・オ・イエートー↖
(サティの杖よ来い!)

⋮沈黙。

「ピウニー。」

「どうだ。」

「残念なお知らせがあります。」

「…。」

杖召喚の魔法は、残念ながら反応しなかつた。召喚用の魔法は作動したが、なぜか自分の元に対象物がやってこない。他の呪文も唱えてみるが、結果は同じだ。

「よく試したのか。」

「試したわよ。杖以外にも、念のため服も本も道具もいろいろ！全部！でもダメだつた。…ねえ、私達このまま歩く羞恥プレイのまま過（）さないといけないの！？せつかく戻れたのに全裸だなんて…同じ全裸ならまだ猫とネズミの方がマシよ…。」

「おいサティ…おい、泣くな。」

元来、男という生き物は女に泣かれるのが苦手だ。ピウニー卿も例外ではない。いつも元気に尻尾をゆらゆらさせていたるサティが、今、自分の身体の上で泣いている。困り果てたピウニー卿は、がばーっと自分の胸板に突っ伏したサティの髪を恐る恐る撫で、その柔らかな身体が落ちないように気を使いながら自分の半身を起こした。裸の身体を抱き寄せながら、出来る限り優しく囁く。

「お師匠の賢者殿に連絡は出来ないのか。」

「ああ…」

ふたたび、サティががばつと顔を上げた。ゴンツ！

「いだつ！ 急に顔を上げるんじゃない！」

抱き寄せられていたため、顔を上げた途端、ピウニー卿の顎にサティの額がクリーンヒットした。サティもそこそこダメージを食いつ。顎がどんな位置にあつたら、額と顎がぶつかるんだ。サティが額をさすりながら顔を上げると、そこには顎をしょりしょりとさすつているピウニー卿の精悍な顔があった。ちつかー ものすゞく近！

しかも、しょりしょりつて何！ あんなにかわいかつたぴくぴく動く髪が、今はむさくるしい無精髪になつてゐるなんて……あー、うん？ 割と嫌いじゃない。いや違う、そうじゃない。

しかも今気付いたのだが、何気にお膝の上にお姫様抱っこ状態になつてゐる。全裸で。

「もう…なんで…なんでこんな状況なのよ…」

「それは……って、動くな。まで、

一だ二て、見えるし見ないで！」

「見てないとどうのに！」

露になつたあらゆるところをせめて隠そつと、サテイは思わずピウ一一卿の方に身体を反転させた。落ちないように慌ててピウ一一卿はその身体を支えて、視線をサテイから思いつきり逸らす。

改めて考えると、何なんのこの状況。助けて師匠！
それにまた、何か変な物体があたつてゐる！

「 もり、ピウーーまた目え開けてるしー。話進まないしー。あたつてる
しー。師匠ー。しふゅー——————ー。」

『はいはい。久しぶりじやのう、サティや。死靈使いとの戦いぶりじゃないかのう。』

サティの声に応じたのか、2人の眼前に、デザートを食べている白い長い髪をたたえた優しげな瞳の老人の姿が、ぼんやりと浮かび上

がつた。

『かわいい弟子の呼び出しに応じるのはやぶさかではないんじゃが、食後のデザートの時間は避けて欲しかったのう。それに、時と場所を考えねばならんぞ、サティや。わしじやからまだしも、杖の賢者や剣の賢者あたりが呼び出されたら、大騒ぎじやうつて。ふおふおふお…。』

第三者から見れば、2人は、全裸の男の上に全裸の女がお姫様抱っこ状態にしか見えない。

師匠である理の賢者から微妙な指摘をされたサティは、身体が見えないようになってしまった。ウーネ卿に抱きついた。

「」の格好には突っ込まないでください。」

『サテイよ、まずその格好に突っ込まずして、何に突っ込むのじや。』

「お二、ちよつとカティ、それ以上へつくなー。」

「だつて、いつしたこと呪えるし。ピカが変な格好をせるからでしょつー。」

「馬乗りの方が問題あるだろ？」「…くつ、だから動くな、それ以上…」

「やだー、ナーナーがあたつてるってば—————。」

『ふおふおふお…馬乗つとはまた盛んじやのう。わしもあと200年ばかり若かったら…』

「いやいや、これは、違います賢者殿！」

『かまわんかまわん。多少おなごが積極的なほうが。』

「だから違うんだって、師匠聞いて！」

夜もすつかり更けていた。

サティイとピュニー卿は、理の賢者が手配してくれた服を身に着けて、やつと落ち着くことができた。サティイの呼びかけがあつた箇所に座標を設定し、理の賢者が2人分の服を転送してくれたのである。改めて、自分達のこれまでの状況を説明し終わつてみると、人間に戻つてから随分と時間が経つていた。

『ほう。貴殿があの竜殺しの騎士ピュニー卿とはなあ。で、どうやらサティイが口元を舐めたら元の姿に戻つた…と。』

「はあ。恐れ入ります。」

「それで…ひとまず杖を召喚しようと思つたんですけど、魔法が効かなくて。」

『そりゃあそりゃうつなあ。』

お髭の賢者は、ふむふむと髭を撫でた。説明のためにしゃべり続けた2人の喉はからからだ。それを気遣つてか、賢者が送つてくれた冷たい水で喉を潤すと、2人は首を捻る。

「どうこいつですか？」

『だつて、サティイの杖折れどるもん。』

「え。」

『先の、死靈使いとの戦いで折れたじゃん。』

「あ、忘れてた。」

サティイがぽんと手を打った。確かに、そういう覚えがあった。死靈使いの魔法を全て封じ込めたほどの魔法は、サティイの限界以上の魔力を使った。杖はサティイの魔力に耐え切れずに折れたのだ。その後、サティイは杖無しで死靈使いの反撃を受けたため、呪いに抵抗出来なかつた。

「忘れるな！」

「だつて。」

簡単な魔法ならば杖が無くても使うことができるが、魔法陣を伴う魔法や、自分で組んだある種の魔法は、杖で魔力のバランスを安全に取らなければ発動しない。持ち物召喚や転移の魔法は、かなり上級な魔法にあたる。あらかじめ杖に封じた魔方陣や術式が無ければ、簡単には作動させることが出来ないのだ。

「どうすれば……。」

『ふむ。…サティイや、とりあえずわしのところに一度帰りなさい。その呪い、詳しく見てみなければ分からんからう。杖も作り直さんとな。』

「…待ってください賢者殿。…サティイと私の呪いは、解けたわけではないのですか？」

『ピウニー卿は分からんが、サティイは完全には解けてはおらんみたいじゃよ？ サティイの魔力は、今までの…そういうの、3分の1

ほどしか戻つておらぬ。残りは別の魔力に封じられておるよつじや。まあ、状況からいうてピウニー殿の呪いも解けてはおらんじやうつ。

』

サティの呼びかけに呼応出来たのは、3分の1とはい、なんとかサティの魔力が残つていたからじや、と賢者は付け加えた。座標を設定した際に改めてサティの身体に干渉してみると、その魔力はいつものサティの3分の1。残りは別の魔力によつて押さえ込まれているといつ。

ピウニー卿が顎に手を充てて、眉をひそめた。

自分自身も、先ほど狼に魔法剣の魔力を放つたときは、ほとんど力が発揮できなかつたのだ。かつては魔竜の鱗を傷つけたほどの魔法剣の技だが、いくら自分の身体がネズミだとしても、狼を倒すどころか、泣いて退かせる程度にしかならなかつた。

「そういうれば、私の魔法剣もほとんど役に立ちませんでした。その影響でしちゃうか。」

『竜の呪いとやらがどうこいつものかは調べてみなければ分からんが、恐らく、そうじやうのう。』

「猫の姿だったときは、浄化の魔法や雷撃の魔法は使えましたけど、…魔力が封じ込められているのに、どうして使えたのでしょうか。」

『わしらの場合は、魔力超過したときは体力を使うからね。自分が組んだ呪文も魔力の消費が少ないものであれば、多少の無理は効くじやうつ。』

「ああ。確かに若干……。」

疲れたかもな……と、サティイが考え込んでいると、猛烈な怒りのオーラを隣から感じた。

…ピウニー卿が、猫一匹程度なら視線で殺しそうなほど、睨んでいる。サティイが思わずたじろいだ。どうやらその怒りのオーラは、自分に向けられているらしい。

「サティイ……。」

「な、なに、なに怒つてんのピウニー。」

「魔力超過したときは体力使うところのはどうこうことだ。」

「…どうこうことだも何も、その通りで……。」

「サティイ！ 魔力が無いなら魔法を使つな！」

「なんで、そんなに怒つてるのよ。」

「怒つてはいない！」

「いや、明らかにお！」

「サティイ！」

ピウニー卿はきわめて不機嫌だ。旅をしていたときは、サティイはしきつちゅう浄化の魔法を使って自分たちの毛皮を綺麗に保っていたが、それだけのためにサティイの体力を消費していたかもしれないを考えると、ピウニー卿はなぜか苛々した。

さらに何か言い募らうとしたピュニー卿を遮つて、サティは理の賢者へと視線を移す。

「師匠。それならば、私達はなぜ元の姿に戻つたのでしょうか。」

『恐らく、3分の1は魔力が戻つたからじゃの。』

「残り3分の2は?」

『戻つておらんのう。』

まだ何か言いたげだつたピュニー卿も、2人の会話をおとなしく聞いている。

「師匠。…それならば、呪いの魔力の3分の1が取り戻されたのは何故でしょうか。」

弟子の質問を受けて、理の賢者は再びふむりと鬚を撫でる。

『古来より、真に元に戻つて欲しいという願いと愛と真心のこもつた恋人のチス（注：キス）？それを聞いた、サティとピュニー卿の表情が微妙なものになつた。ピュニー卿が、若干気まずげに咳払いをする。

「はい?」

「……。」

真に元に戻つて欲しいという願いと愛と真心のこもつた恋人のチス（注：キス）？それを聞いた、サティとピュニー卿の表情が微妙なものになつた。ピュニー卿が、若干気まずげに咳払いをする。

「えー。理の賢者殿、それは。」

「つまつ……。」

『元に戻るにはまよひと中途半端なチッスじやつたところじじや
の。』

「中途半端……。」

ピウニー卿がなぜか反芻し、サティはなぜかいだまれない気分になつた。えー……つと、呪いが完全に解けなかつたのは自分のせいだらうか。でも急にそんな愛とか真心とか言われても……。

「ちよつと待つてください。図書室。」

『なんじや の。』

「その場合、どうひがどうひ……？」

サティの質問を受けて、理の賢者は、長い髪を撫で下りじて楽しげにふおふおふおと笑つた。

『わざあ、お互ひの呪いが解けたといつては、どうしからもアレじやねつアレ。若いもんはええのうー。』

「どうひも……ですか?」

ピウニー卿がハツとした顔になつた。真面目な表情を浮かべ、顎に手を宛てて何かを考え込んでいる。

一方、サティはブツブツと何事かを呟いている。

そもそも、逆説的に言えば、あのときの2人のあの口元ペロリ。キスというよりも、舐めたという表現の方が当てはまる気がするが…。そのときの自分の気持ちに、真に元に戻つて欲しいという願いと、愛と、真心と、恋人、この中の、何らかの要素があつた…ということになる：のだろうか。え？ いやいや。何それ。どうやら中途半端なキスをしてしまつたらしい当のサティは、どうこう反応をすればいいのかまったくもつて分からぬ。

「それはつまり…。もう一度真に元に戻つて欲しいという願いと愛と真心の籠もつた恋人同士のキスをすれば呪いが解けるということでしょうか。」

ピウニー卿がやや真剣な顔つきで、賢者に問つた。

その間も、やはりサティは悶々と考え込んでいた。いやいや、でもちょっと待て。確かにあの時は自分の方から積極的に口元ペロりだつた。それは認めよう。主体と対象を見据えれば、サティからピウニー卿への愛だか真心だかのどちらかのベクトルがアレしていると判断できるが、サティの呪いも中途半端に解けている事態から見れば、ピウニー卿からサティへの愛だかなんだかのどちらかのベクトルがあれー？

つていうか、ピウニー卿。なにどむくさにまぎれて、その質問。どういう意味？ ワンモアチャンス的な？ 現実に戻つてきたサティがうさんくさそうな表情でピウニー卿を見たが、あつさりと、賢者は首を振つた。

『いやいや、もう無理じや。変化のきつかけにはなるがのう。』

「え。」

「え。」

『え。知らんの?』

3人が3人それぞれ、きょとんとした表情になつた。賢者が「く当然のことのようにきつぱつと言つ。

『だつて、チップによる呪い解除のお約束は1回じゃもん。』

「なぜですか!」

『当たり前じやよ。あれは世界の願望と夢と希望で出来た例外処理じやし。そんな例外が何回もまかりとつとつたら、わしらみたいな魔法使いいらんじやろ。それに呪い解くのに何回もちゅつちゅちゅつちゅしてるとこかを見たことあるかの?…普通はそんなに何回もからんじやろ?。1回じゃ1回。それに愛は育むもので、チャンスは1回と相場が決められておるのじやー』

「相場だと…。1回きつだと…。貴重なチャンスを…。くつ…ひ、それが世界の答えか!」

何故か、ピウニー卿が頭を抱えた。

『まあ、一度わしのところに来るがよい。詳しく見てみんことにほん分からんからの!…。』

がっくりと2人は氣落ちする。つて、がっくりじゃないし…。サテイは我に返つた。元々そのつもりだったし、愛と真心と恋人がどう

のこのうのとう例外処理がもう通用しないからって、そこにがつく
りしてビーする！

『まあ、新婚旅行じゃと思って、やつくなつたのとこがこ来るといか
る。サテイや。』

「はい？ つて新婚旅行！？」

『自力でおいで。』

「<?...じつせいで?」

『お前さんの座標分かるから迎えに行けるんじやけど、ついでに杖の賢者のところで修理中のわしの杖回収して、お前さんの杖作つてもらってからおいで。』

「ええええー! ?」

『愛に障害を持つもののがかりのつーふおふおふおふおふおふおふおー』

「ちよ、師匠ー。しょーーーー。愛つて、愛つてなんですか！」

『愛。愛とは試練じやよ。修行じやよ。ふおーふおふおふおふお。』

それ以上の説明が面倒になつたのか、賢者は消えた。

何事かを真剣に考へてゐるピウ一一卿。

やがて、ピウニー卿がぽつりと言つた。

「愛、か…。」

「何よピューイー。」

「サテイ。」

隣に座っていたピューイー卿の低い渋みのある声が、すぐ耳元で聞こえた。ピューイー卿は若干引き気味のサテイの腕をむんずと掴むと、すいぶん熱の籠もった瞳で見つめてくる。もつ片方の手で腰を抱き寄せ距離を詰めた。腕をつかんでいた手を離して背に這わせ、サテイのセピア色の髪を梳くように頭を抱きかかる。

「あのときのサテイの口付けは…、元に戻って欲しいという願いと、愛と、真心と、恋人と、どれにあたるんだ…？」

「…は？ やよつヒュウイーさん？ 急にどうしました？」

「サテイ、私は…。」

ピューイー卿の甘い吐息がサテイに降りてきた。色めいたそれはサテイにも抗い難く、2人の顔が自然と近づく。

「サテイ…。」

「ピューイー…。」

「さうからともなく互いの名前を囁くよつい呼んで、2人の唇が触れ合

「つかやー。」

「ねつづー！」

2人の唇が触れ合う瞬間。

ピューー卿の身体は縄のようなさりげないのさわり心地の毛皮に沈み込み、サティの身体に小さなネズミの重みがかかった。今まで着ていた服が、中身を失ってしょんぼりと地面に崩れ落ちていく。

「え。」

「え。」

『あ、言ひ忘れたんじやけどもね。』

再び賢者が現れた。

『その洋服とシーツもろもろ、そこに落ひとるネックレスに入れて持つとけるよこしこいたから。』

2人は。……いや、2匹は顔を見合せた。

「つづ、師匠。しそよ—————！」

『ふおふおふおふお……。愛じやのう、青春じやのう。』

「いや、青春つてこいつ年齢じやなこですよこの人どう見ても———！」

「おこ、サティ、それほどじつ意味だ。私とてまだまだ、

猫とネズミを残して、今度こそ賢者は消えた。

005・起き抜けなんだから仕方が無い

「う、ん…。ピウ…ひーげ、ひげくすぐったい。」

「サティ、身体を、腕を離せ…。」

「だつて、ピウの毛皮がもふもふでー…。」

いや、違う。

全然もふもふしていない。

サティのグリーンの瞳が眠たげに開く。眼前にあるのは少し硬めの色の薄い金髪で、鎖骨辺りに触れているのはしょりしょりした肌触り。そしてサティはふかふかの纖細な毛皮ではなく、妙にがっしりした硬い肩を抱え込んでいた。ちょっと待て。なんで私はこんなもの腕に抱え込んでいるんだっけ。そもそも何このしょりしょり。

我に返つた。

「ピウーーーな、なんで、にんげ、にに、人間に」

「いい加減、落ち着けサティ、ちょっと離れ…」

言われてサティは身体を離す。離れるときの身体の曲線がピウ一一卿の視界に入った。視界に入れたのではない。入ったのである。

「いや違う、今は離すな、見える。」

「見ないでつてばー」

「見てはいない!」

「もう、ちよつと朝っぱらから何か、あた、あたつてるからー。ピウの変態———！」

「おいちょつと待て、そんな格好で人を抱き寄せておいて変態は無

…」

「別に抱き寄せてないし！」

「いや完全に抱き寄せていただろー。それに今は朝で、男なんだから仕方が…」

「やつちの言い訳はいいからまず最初に目え閉じて————！」

「ああああ、そうだつたすまん。」

騎士の名に誓つて見たのではない。あくまでも、見えたのだ。そもそも人の気配に目が覚めたら、こういう状態だつた。それにアレとかソレとかは不可抗力。起き抜けなんだから仕方が無い。これ以上のいわれのない疑惑を防ぐために、ピウニー卿はおとなしく目を閉じた。

* * * *

「いい天氣だな、サティ。」

「そうね、ほんつとーにいい天氣ね。」

街道をセピア色の毛並みの猫が歩いていた。首には綺麗なグリーンの石が付いた首輪をしている。その背の上には、薄い金色の毛並みのネズミが乗っていて、小さなベルトに剣を挿していた。ピウニー卿の口元が、不満げにぴくぴくと動く。

「まだ機嫌が悪いな…。寝てる途中で元に戻つたくらいでそんなに怒らなくてもよからう。」

「怒るわよ。1回呪いが解けたらしばらく戻れないし、戻つてもすぐには人間になれないんだから。もつと計画的に利用しないと困るでしょ！ それに、起きたらはだ…はだ…。」

「はだ…、なんだ。」

「なんでもない…。ピウニー、それ以上言いつと落すわよ。」

「落すわよ」というサティの声に、ピウニー卿が先制を切つてすとんと降りた。髪をゆらゆらと揺らしながらサティの横を歩き始める。背中から重みが無くなつたサティは、ピウニー卿の歩幅に合わせるようにゆっくりと歩いた。怒っているならさつさと先に行けばいいのに、ピウニー卿が降りて歩いているときは、必ずサティは歩幅を合わせてゆっくり歩くのだ。その様子を見ると、ピウニー卿はとても機嫌な気持ちになるのだが、言葉にするとサティが怒るので、ただ髪を揺らすだけに留める。

2人が賢者と別れて1週間。こんなやり取りも、もう3回目だ。早い話が、2日に1度、こんなことをやつている。せっかく呪いが解けたと思つたとたん、再び猫とネズミに戻つてしまつた2人は、こうして変身を繰り返す度に徐々にその法則性が分かつてきた。

1・人間に戻るのは、2人の口元ペロリ…もとい、キスがきっかけ。
2・一度戻ると、1日のうち3分の1（8時間）だけ人間で居ることができる。

3・8時間経過で突然猫とネズミに戻る。

4・猫とネズミに戻ったあと、1日のうち3分の2（16時間）は人間に戻れない。

補足・1日の3分の1しか人間でいられないのは、自分達の体内に魔力が3分の1しか残っていないからだと推測。

自分達の状況を確認していたサティはしょんぼりと耳を寝かせた。調子に乗つて人間になれば8時間経過で、どんな状況かなど関係なく猫とネズミに戻つてしまふし、16時間経つてうつかり口元ペロリしてしまふと人間に戻つてしまふ。当然のことながら、全裸で、だ。

「大体、あれは私のせいではないだろう。朝、寝ぼけてサティが私の顔を舐めたから…」

「ああもう、ピューーしつこい。」

「本当のことではないか。」

「そつちだつてこの間私の口元に頭突きしてきたじゃない。」

「あ…あれは、寝返りをうつただけだ。それに頭突いてはないから頭突きではない。」

「頭突きじゃなかつたら何なのよ。」

「たまたま口元が当たつただけだ。」

ピューー卿の髭がぴーんと張つて、そのあと上下にさわさわ動く。サティはふーんと半眼になつた。ピューー卿は勝手に動いてしまう髭を前足で撫でる。本当は、サティからだけではなく、自分から口元ペロリとしてみても人間に戻れるのかどうかを試したのだが、そんなことサティに言えるわけがない。ちなみに、結果は正、だつた。

「む。なんだ。」

「別に。」

サティは前足で自分の顔を洗つた。

2人ともこうして出会いまで、たつた1人の放浪の旅だつた。ピューー卿は身体が小さいためにそれほどの距離を稼ぐことができず、グラネク山を降りるのすら、かなりの時間が掛かつた。サティは王都の地下水路に逃げ込み、激しく道に迷つた挙句に王都外れの森に出て街道を歩いていたところを人間に拾われた。だが、話すことができる…というのがバレて、海の向こうの商人に売られそうになつて逃げ出して以来、ずっと普通の猫のフリをしてきたのである。様々な人に拾われては逃げ出し、逃げ出しては拾われて、を繰り返していた。

つまりお互いこの姿になつてから2人旅というのは初めてなのだ。理の賢者に会う…という、はつきりとした目標と、互いの身の上を理解し合う道連れが出来たのはありがたかった。眠るときだつて、相手の毛皮があるから寒くない。起き抜けに全裸になるのは困つたものだが。

あれから、2人はひとまず王都を目指して歩いていた。理の賢者の住まいへ向かうのが最終目標だ。だが、途中、杖の賢者の住まいにも寄らなければならず、そもそも猫とネズミのまま歩いていてはいつまで経っても着きそうにない。そこで、馬か何かの手配をするために王都へ入り、事情を話せそうな人物に会うことになった。

だが、ピウニー卿は既に故人になってしまっているし、姿を現せたとしても1日8時間まで。あまり軽々しく生きている…と知られるわけにもいかない。さて…一体誰に相談するか。そこは、ピウニー卿に心当たりがあった。さすがオリアーブ国で王の信頼も厚い騎士をやっていただけある。

それはピウニー卿の弟妹だ。ピウニー卿…本名はピウニーア・アルザス…という。由緒正しい武家、アルザス家の長子だつた彼は魔竜退治に出かける前に、覚悟の意味で相続権を放棄した。それに合わせて両親は隠遁し、ピウニー卿の弟、パヴェニーア・アルザスが家督を継いでいる。さらに、ペルセニーアという末の妹も居る。彼女もまた、王宮に勤める騎士だ。アルザス家に戻つて彼らに接触すれば、話を聞いてくれるだろうということだった。

「弟さんと妹さんか。どんな人なの？」

「弟は恐れ多くも白翼の騎士団長を務めていて、既に結婚している。私が家を出たとき、妹はまだ結婚しておらんかつたな。」

「えつ、騎士団長っ！？ すぐくない？」

「恐れ多くも…と言つただろ？…そつはいつても、弟は兄の私から見ても、実力は確かだ。それに白翼は若い人間が集まっているからな。騎士団長も若い人間が選ばれたのだ。」

「そんなに若いの？」

「私より2つほど下だ。」

「…そんなに若いの？」

2回聞いた。

「どうこう意味だ。」

別にどうこう意味でもないです。

それにしても…とサティは視線を逸らす。視線を逸らすと同時に、耳も逸れた。ネズミと猫の気安さですっかり忘れていたが、ピューニー卿はサティですらその物語を知っている程の偉い騎士様だ。その弟が白翼の騎士団長をやつっていても、別におかしくはない。よく考えるとサティにはなじみの無い人種である。こうしたことでもなければ関わることもなかつた人なのか…などと思うと、なんとなく面白くなかった。普段は憎まれ口を叩いているが、そういう態度を取つたら本当は失礼にあたる人なのかもしれない。でも今更態度を改めるのも違う気がして、サティは「ふーん。」とだけ言つておいた。

ピューニー卿はサティのそんな思いには特に気付かず、全く別のことを行なった。

「そうだ、サティ。弟のパグニーアには、気をつけろ。」

「気をつけるって何?。」

「今では落着てることはないが……。」

「だか、何が？」

「むつ……あ、会えば分かる。」

ペニー卿が珍しく言葉を濁し、髪がなんとなく警戒するみたいに手元から跳ねていった。

とある宿場町。その町一番の高級宿の下つ端料理人は、裏口を出て賄いを食べているときに、セピア色の綺麗な小柄な猫を見つけた。短い毛並みは艶やかで、大きな瞳は宝石のようなグリーンだ。首には、瞳と同じグリーンの石が付いた細い鎖の首輪を付けている。

「ニヤーッ。」

「どうしたの。迷子かい?」

「ニヤーッ…。」

料理人の問いに、猫は耳をしょぼんと落とした。

「そりゃ…僕は住み込みだから、飼う」とは出来ないんだけど…。
あ！ そうだ、お腹空いてない？」

「ニヤーッ…」

猫はまるで人間の言葉を解したように、尻尾と耳をぴんと立てた。動物好きの人間というのは、大概動物に話しかける。そして、自分の話している言葉が動物達に通じている様子を見ると嬉しく思うものだ。料理人は顔を綻ばせ、「よかつたら、これをお食べ。」と言つて、自分の食べていた賄の皿の上から、パンに肉の切れ端を挟んだ残りをくれた。

「ニヤーン…。」

猫は、料理人の足元にすり…と顔を摺り寄せた。愛らしい顔で料理人を見上げると、「にやう?」と小さく鳴いて、首を傾げてみせる。「もらつてもいいの?」と言わんばかりの猫の表情を見て、料理人は思わずへら…と微笑み、「よしよし…」と言いながら、大きな手で頭を一撫として、首をこじょこじょしてやつた。

「うなーん。」

猫は瞳を細目でグルグルと喉を鳴らすと、もらつたパンをかぶりと咥えて路地裏へと消えていった。

「子供でもいるのかなー。可愛い猫だつたな。でも、首輪をつけていたから…だれか飼い主が探しているかもしねれないな。」

猫が去つていった方を見ながら、料理人は伸びをした。これから夕食時だ。もう一仕事、残っている。

* * * *

「せめてご飯食べるときくらいは人間でいたいわよね…。」

「むう…。確かに。だが、先立つものが無くてはな。」

「ああ…そこが問題だわ。」

サティとピウニー卿は、サンドイッチの端っこを囲んでため息をついた。猫とネズミの身体であれば、確かに食べ物は少なくて済んでいる。優しそうな人を見つけてサティがおねだりすれば、大抵の人は人間が食べるものと同じものをくれるし、それをピウニー卿と分けて食べても充分な程度に食いつなげているのだ。だが、やはり元

は人間。特にピュニー卿は騎士なのだ。きちんとした食事をきちんとした代価で食べたかった。

だが、今の2人には金がない。たかだか8時間ほど人間に戻つたところでの、それは同じだ。今でこそ、服とシーツをしまつておける旅人必携の4次元ネックレス（理の賢者作成）があるが、それを売り払うわけには当然いかず、そもそも猫とネズミでは稼ぐ手立てがない。王都に出向けばピュニー卿自身の財産があるから、早いところ旅路を進まなければならんなあと、ピュニー卿はパンと肉を小さくちぎつてもぐもぐと頬張つた。

「といふで、サティ。」

「ん？」

「え？」

「せつとき、あの男に喉を撫でられて妙に機嫌よく鳴いていたな。」

ふん…とピュニー卿は不機嫌そうに、ほほ袋を押さえた。食べ物を租借してごると、どうしてもそこに溜めてしまつらしい。

「なによそれ…。だつて、噛み付くわけにはいかないでしょ。」

「噛み付けとは言つてない。あまり機嫌よく喉を鳴らすな、と言つている。」

「別に機嫌よく鳴らしてなんかないわよ。」

む…とした口調でサティが耳をひるんと揺らす。

猫のサティが女性に懐いているのを見ると微笑ましく思うのに、それが男になるとピューー卿は何故だかイラつとするのだ。しかも機嫌よく喉を鳴らすなど、なんともけしからん。それが猫の処世術だとは分かっていても、ピューー卿はなんとなく気に食わない。

「とにかくだな…淑女たるうもの…」

「ピューー…もう、馬車とか商隊とかの話はどうなったの？ 何か分かった？」

「む、サティ、聞いてるのか？」

「聞いてません。」

「聞け。」

「ピューー…。」

サティは毛を膨らませると、声を低くして顔をピューー卿に近づけた。一瞬たじろいだピューー卿は、こほんと咳払いして前足を組む。サティが食料を（もらえそうな人を）物色している間、ピューー卿は高級宿の厩や食堂などに入り込み、聞き耳を立てて情報収集をしていたのだ。

「明朝、王都を目指す商隊があるそうだ。1隊はヴィルレー公爵領から出ている。それに乗れば安心だろう。」

「公爵家？ そんなえらい人の商隊に乗つていいの？」

「よくはないが、仕方あるまい。荷も大きいだろうから、我ら2人

程度、奥深くに潜れば分かるまいよ。」

それに公爵家直属ともなれば、それなりにしっかりとした警備体制のはずだ。食べ物だけはこつそりと盗まなければならないのが気が引けるが、ここから王都まで馬車で行けば3日もあれば着く。その間、猫とネズミの分の食べ物くらい、拝借しても罰は当たらない：と思いたい。

「公爵様つて、ピウも知っている人？」

「いや。知り合いというわけではない。見かけたことがあるくらいだな。私は王宮にはほとんど居なかつたし…。野心の無い穏やかな人物だとは聞いている。まだ若いが、まつりじと宫廷の政からは一歩退いて、今は王太子の教育係だとか、そういう職についていたはずだ。」

サティ自身はオリアーブの魔法研究所によく出向いていたので、王都に行つたことがないわけではない。もつとも、魔法師団に所属しているのではなく、あくまでも理の賢者の使いとして協力していただけだ。世間話や噂程度なら知っているが、宫廷や騎士団に関わったことがあるはずがなく、ありていに言えば興味が無かつたため、さほど宫廷事情に詳しいわけではなかった。

公爵の名前は、ヴィルレー公爵という。サティも、名前程度なら聞いたことがあった。

オリアーブ国は現在、国王のジェレシス・オリアーブによつて統治されている。白翼・黒翼という2翼からなる屈強な騎士団と魔法師団で構成された平和な国だ。三方が山、一方が海という立地に恵まれ、他国から侵略の危機に晒されることもあまり無い。もつとも、近年増加した凶悪な魔物の存在によつて戦争どころではない…とい

う一面もある。国同士の小競り合ひは無いが、騎士団は魔物の討伐に派遣され、魔法師団は有効な魔法剣や術式を開発するために忙しかつた。

国内で魔物が出現してもよく統治された騎士団がすぐに駆けつけ、魔法師団の協力によつて効果的に魔物を討伐している。先王から仕えている宰相の手腕により、それまで付かず離れずだった騎士団と魔法師団の協力体制が敷かれ、互いに交流しその技術を役立てるようになつた。

それに1年前、ピウニー卿の退治した魔竜がグラネク山の麓の村や町を襲つた記憶はまだ新しい。あの事件により一層騎士団と魔法師団の結束は固くなり、各地の守りは強固なものになつていてる。

そのオリアーブ国の現国王の従兄弟に当たるのが、ヴィルレー公爵だ。彼は非常に穏健な人物で国王からの信頼も厚い。歳の頃は40にも満たず、宮廷に入つてもこれからという若さだったが、妻を亡くしてからというもの、政は宰相に任せて、再婚もせずに静かな生活を送つていた。それでも、国王に請われて領地には戻らず王都に邸宅を構え、国王の息子…ジョシュ・オリアーブの教育指南役という地位に着き、王子付きの教師団を取り仕切つている。王族といえど学校に通い、同じ年頃の子らと共に勉学に勤しむのが本来なのだが、現在国王の息子は病がちで王宮に臥せつてているという。このため、ヴィルレー公爵が各方面の信頼の置ける教師を手配し、王子の教育を行つてているのだ。

「その馬車に乗つていけば、恐らく王都の公爵宅まで行けるはずだ。王宮にも近いだろう。」

「王宮に近くていいいの？ ピウの家は？」

「私の家も遠くはない。武家といえど、一応伯爵の地位をいただいているからな。」

「え。」

「なんだ。」

「世が世なら、ピウニー卿は伯爵様だったの…？」

サティの頭の毛が逆立ち、耳が警戒するように後ろを向いた。

「それがなんだ。」

確かに、竜の討伐がなければ、ピウニー卿が家督を継ぎ、アルザス伯爵となっていたに違いない。だが、ピウニー卿は竜の討伐が決まってから、弟に家督の相続権を譲つているし、自分が伯爵の地位に就いたことはない。身分的には一介の騎士に過ぎない。今更サティに貴族様扱いされて、2人の距離が開くのも気に食わない。ピウニー卿の耳も後ろにぺたりと寝てしまった。だが、サティは何故かフ…と鼻で笑つてぼそりと呟いた。

「裸で抱きついてくるくせに貴族様とか…。」

「ピューーんと2人の耳が同時に前を向いた。

「…だーかーらっ、それは今は関係なかろう…ともかく、家督はパヴェニーアが継いでいて、私は伯爵なんぞではないのだ。」

ピウニー卿はサティの眼前で短い前足を組んだ。

「そもそも人間になつたときに裸なのはお互い様だろ。第一いつも抱きつこられておるのせ、サティではないか。」

その言葉に、サティはつーんと顔を逸らす。長い尻尾がきょとねりると動いて地面を叩いた。

「別に抱きつこてないもん。」

「抱きつこておる。」

「抱きつこつませご。」

「ほほほ。まあここ。じゃあ、わざわざへこむことやね。」

「なによやね。」

「別になんでもないが?」

何故か「満悦のピウニー卿に、サティはなんだか敗北したよつた気分を味わつた。誤魔化すよつて頭をふるふると振り、座つていた身体を起こして伸びをす。

「もう、じきなことぬつてゐる場合ぢやなこでしょ。早く馬車のといひに行へわよ。あの馬車だいじ。」

ピウニー卿はサティとの変わらぬやり取り、満足げに鬚を揺らしていたが、やつと歩き始めたサティを追いかけるとその歩幅が緩まつた。相変わらず、自分の歩幅に合わせて歩くサティを見るのは、何故か心が浮き足立つピウニー卿だった。

「おー…。また変な声が聞こえなかつたか？」

「氣のせいだらひ。これは由緒正しいヴィルレー公爵の商隊だぞ？幽靈なんぞ憑いているわけが…。」

野営をしていた、ヴィルレー公爵付きの商隊の見張りの兵士は、この2日ほど、夜中になると商隊の荷から女の声が聞こえてくるという噂にびくびくしていた。この兵士は、お化けとか幽霊とかそういう話が苦手なのである。今日は最後の夜。幸いなことに、まだに噂の女の声は聞いていない。それなのに、さつきから相方の兵士が聞こえただのなんだのと、恐怖心を煽るようなことばっかり言つてゐるのだ。あーあーあーあーあ。あれば、ただの噂。さつと氣のせい。前立ち寄った町までは、そんな噂は出でこなかつたし。

だが。

「ほり、また…おー、ヤバいんじゃねーのか…。」

相方の兵士が、隣で緊張する氣配が分かる。

「だから、氣のせいだつて、俺には聞こえな…

『…うう、ん…。』

兵士の耳にも今度は確かに聞こえた。微かだが、若い女のため息のよつな切なげな声だ。相方が、びくっと肩を震わせ後ずさりする。

「お、おこ、お前ちよつと見て」こよ。』

「…は？ なんで俺が？」

「いいから見て来いつて…。」

「嫌だよー、お前行けよ。」

「…くつも、じゃあ一緒に…。」

相方は嫌がる兵士を引っ張つて、高級な荷物が置いてある幌の帳をそつと開く。

『…ピュー…』

何、今の一

ピューってどういう意味！？ 擬音？ 鳴き声？

果たして言葉なんだかよく分からぬ声が聞こえ、2人は顔を見合わせた。

『…わたしはへんたいではない…。』

今度ははつきりとした言葉だ。だが、先ほどの女の声とは違い、低く渋い声だった。重低音の響きは只者の声とは到底思えない。兵士は思わず「はいー！ 変態ではありません！ 変態ではないですから許してください！」…と平伏しそうになるのを堪え、2人抱き合つてがたがた震えていると、

「ン。

小さな小さな音が響いた。その後、パタンパタンと何かが倒れる音が近づいてくる。公爵の荷馬車といつてもそれほど大きいものではない。その音はすぐに2人の側まで来た。その眼前に、ざわりと小さな塊が倒れこむ。

「テターヤギ」

2人の目の前にかくんと現れたのは、どうやら綺麗な人形だつた。平常時なら愛くるしいその姿。だが今はスカートが荷に引っかかるて逆さ吊りで、寝かせれば眼が閉じるという（余計な）仕掛けが施されているせいか、逆さまの状態では何故か白目を剥いていた。

大大大

3日ほど馬車に揺られると、ピュー卿とサティは無事に王都に到着した。

その間、2人は実におとなしくしていた。隊員の食料を置いている幌に潜めば食べ物にも事欠かず、寝るときは運んでいる荷物の中でも一番高級な荷に移ると、ほとんど手も出されない。身分の高い家の商隊だけあって、安全な場所も通り護衛もばっちり。休憩も十分に取り、強行軍ということもなかつた。寝ぼけて口元ペロリが無いように、お互い離れて眠つていたことも功を奏して、思いがけない場所で人間に戻つてしまつ……といふこともなかつた。途中、見張りが何か恐ろしいものを見たらしく、出たとか出ないとかいう叫び声で眼が覚めたことがあつたが、見張りの人の見間違いということでお處理されたようだ。

「何か怖いものでも見たのかしら…」とサティが首を捻つてると、「つづむ。私はそういうものは見ない性質だから分からんな…」とピュニー卿は髪を撫でた。

＊＊＊＊

「荷物が届いたのね！：人形も届けたって。どんな人形かしら。」

「一応、悪戯をしてはいけないよ、セラフィーナ。」

「もちろん分かっているわ、お父様！」

ヴィルレー公爵の邸宅に商隊の馬車が着いたのはその日の午後だ。領地からの交易用の荷はそれなりの場所に送られたが、1台だけ公爵の個人的な荷などが載せられた馬車があり、それは直接公爵の王都邸宅の敷地に乗り入れられた。ピュニー卿とサティは、その馬車に乗っていたのだ。一番高価な荷物が入っているから、恐らくこれで間違いないだろうといつピュニー卿の判断による。

息を潜めて外をうががつていると、小さな女の子の声と爽やかな男性の声が聞こえた。恐らく、ヴィルレー公爵とその令嬢だろう。幌の布に頭を突っ込み、隙間からそっと外を覗いてみると、そこには薄い赤金色の髪にグレーの瞳を輝かせた少女と、端正な顔に優しい微笑を浮かべた男が荷物を迎えていた。男の方がヴィルレー公爵だろう。彼は、女の子…セラフィーナと呼ばれていた…に目を配りつつ、商隊長からの簡単な報告を受けている。

「幽靈…？」

「ええ。昨日の晩になりますが、女の声と男の声が聞こえたとかで……。」

「「」の荷から？」

「はい。」

ヴィルレー公爵は、怪訝そうに馬車の幌に目を向けた。ピウニー卿達の視界からセラフィーナが消える。

「「」ひ、フィーナ！ 幌に入つてはダメだ、何があるか分からぬから……！」

ピウニー卿とサティは思わず顔を見合わせた。それとほぼ同時に、不規則な小さな足音が聞こえてくる。

「まずい、サティ……隠れ」

ピウニー卿は、身体の大きさを上手く生かして荷物の隙間に忍び込んだ。サティも荷物の影に隠れようと頭を下げる。そのときだ。「きやあ！」という可愛らしい声が聞こえて、サティの身体がふわりと浮いた。

「フィーナ！」

すぐさま、大きな足音が続く。サティを抱き上げたのは公爵令嬢だつたらしい。セラフィーナの横に身を低くしたヴィルレー公爵がやってきて、少女の肩を抱き寄せた。サティは、荷物の隙間からこちらを伺うピウニー卿にふるふると首を振る。こんな小さな女の子に、爪だの牙だの立てられるはずがない。

「サティ、私がそちらに行く。」

「いやう。いや——う。」

ピウニー卿の声が周囲に聞こえないように、サティは鳴き声を上げた。それを聞いてピウニー卿は額を返し、荷の隙間に戻つていく。

一方、ヴィルレー公爵は腕の中の娘を確認した。自分の方を振り向いた娘の顔は期待に満ちて輝いている。その小さな腕の中では、セピア色の綺麗な小柄な猫が毛を逆立てて、緊張したように四肢を突つ張つていた。

「ねえ、お父様！　この子、飼つてもいいでしょう？」

「いや……こんな綺麗な猫……しかも、首輪をしているし……。」

セラフィーナとヴィルレー公爵は既に幌から降りている。セラフィーナの腕の中で、猫は相変わらず四肢をピンと伸ばしたままだ。大きなグリーンの瞳はまん丸で、瞳孔は開きっぱなし。相当緊張しているのだろう。だが、暴れてはいない。ヴィルレー公爵は恐る恐る手を伸ばしてみる。「旦那様！」執事が咎める声が聞こえたが、猫一匹のことだ、大人一人が引っ搔かれたとてそれほどのものではないだろう。ヴィルレー公爵が手に取ったのは、猫の首にかかった金色の鎖だ。首輪のようにかかっているそれには、見たことも無い綺麗な、猫の瞳によく似たグリーンの石がぶらさがっていた。毛並みも美しいし、到底野良猫ではないだろう。だが、野良猫ではないとしたら、誰かの飼い猫ということになる。しかも、一般庶民では

ない、恐らく富裕層が飼っている猫なのではないかと思われた。

「猫?... どこから入り込んだんでしょう?」

いつの間にか商隊長が近くまで来て、首をかしげている。ヴィルレー公爵、執事、商隊長。大人3人が猫を見て頭を悩ませている様子に、セラフィーナは猫の脇腹を持つて手を伸ばした。

「とつてもいい子よ、この子! 大人しいもの。」

確かに猫は大人しかった。それでも、いつ爪や牙が娘に引っ掛かるかもしれない。ヴィルレー公爵は猫を捕らえようと手を伸ばした。途端に猫の毛がぶわわと逆立ち、それを見たセラフィーナが、ぷいと他所を向く。

「ダメー!」の子、お父様のこと怖がってるわ。」

「フイーナ、待ちなさい。その子は他所の家の猫かもしれない。きっと飼い主が探している。」

ヴィルレー公爵が言つた途端、セラフィーナが迷つたように父親を見上げた。

「その子も飼い主のことを探しているかも知れないだろ?。返さない」と。

「だったら…だったら、見つかるまでフイーナがこの子のママになつてあげるわ!」

「ママになる」という言葉に、ヴィルレー公爵の手が躊躇つた。そ

の隙に、セラフィーナがたたかと駆けていく。ヴィルレー公爵は執事へと頷く。執事も心得たように頷いて、セラフィーナの後を追つた。

「かまいませんので？」

「あれほどの猫だ。…別の飼い主が探しているというのは間違いないだろう。」

「そのことですが…。」

商隊長が少し考え込んだように言葉を続ける。荷の確認は常に行っているが、荷を全て一度降ろした確認は3日前に立ち寄った大きな宿場町のことだ。そのときには、猫の姿はどこにもなかつた。あのような猫が街道の途中で迷い込むということはないだろうし、恐らくその宿場町で迷い込んだのではないだろうか、と。

話を聞いたヴィルレー公爵は、ふむ…と考え込んだ。

「なるほどな…。仕方が無い。その宿場町に連絡をして、こういった猫を探している飼い主はいないかと聞いてみてくれないか？もし飼い主が見つかれば、今度の商隊が出かけるときに連れて行ってくれ。もしいなれば、…セラフィーナが気に入っているようだし、うちで世話をして構わないだろう。」

「…わかりました。」

指示を出したヴィルレー公爵は苦笑して、セラフィーナが走つていった方に目を向けた。

「それにしても、…ママになる…か。」

ヴィルレー公爵が妻を亡くして6年になる。セラフィーナはほとんど母親の姿を覚えていない。公爵家といつ恵まれた環境で、良き家人に囲まれてもいる。我僕に育つてもおかしくはなかつたが、ああ見えて聰い。何故自分に母はないのかという子供ながらの素朴な疑問も、空氣を読んで言わないようになつてしまつた。その娘が「ママになる」と言つた言葉は、何故かヴィルレー公爵の胸に深く残つた。

こつして、ヴィルレー公爵家に商隊の馬車が到着したのだが、小さな金色の毛並みのネズミがセラフィーナを追つて家中に入つたのを、見咎めるものは誰も居なかつた。

* * * *

「ねえ、君はなんていう名前なの？」

「いや…いやーん…。」

サティはセラフィーナという公爵令嬢の部屋で、毛並みを撫でられていた。爪を立てればあの場は逃れられたのだろうが、この小さな少女にそんな粗相はできなかつた。思わず大人しく連れてこられてしまつたが、…ピウニー卿は大丈夫だろうか。隙を見て探しに行かなければ。そう思つただが、セラフィーナはぎゅっと自分を抱きしめたまま、なかなか離してくれない。

毛皮を撫でられていたサティは、セラフィーナに顔をむけ…と両手で挟まれた。セラフィーナはサティのグリーンの綺麗な瞳を覗き込み、うつとりと微笑む。

「綺麗なグリーンの瞳！ 貴方のことばグレンって呼ぶわ。」

「ここも…ここも…。」

「グレン？ 喉が渴いた？ お腹すいた？ 何か持ってきてあげるわ、いい子で待っていて！」

セラファイーナはサティをソファに置くと立ち上がり、執事の名前を呼びながら部屋を出て行った。サティはほっと一息つく。だが、すぐさまソファから立ち上がり、床に降り立つた。そつと扉に駆け寄り、ぐいと扉を押してみる。幸いなことに、きちんと閉ざされていなかつた扉は開いた。柔らかな肢体を隙間にくぐらせ、サティはゆっくりと廊下を見回した。

さすがに公爵家の邸宅となれば広い。ピュニー卿は、「私がそちらに行く」と言っていた。サティは頭をきょろきょろさせた後、身を低くした。ピュニー卿の姿を探す。いつもは憎まれ口を叩いているが、旅路の間ずっと一緒に居た。その小さな身体が見えなくなるのは、妙に不安だった。

「…サティ…こっちだ。」

サティの耳が声の方向に揺れた。

廊下には誰も居なかつたが、掠れたような男の声が聞こえる。サティは廊下の片方に視線を向けた。そこには布を張ったベンチが置かれていて、その足元にちらりと薄い金色の毛並みが見える。サティは迷わず駆け寄つた。

腰に佩いた剣が間違いない、ピウニー卿だ。

ピウニー卿は、サティがセラフィーナに連れて行かれたと同時に幌を出て、茂みから茂み、物陰から物陰へと伝い渡り、セラフィーナの後を追いかけたのだ。扉を閉められたのには焦つたが、窓の隙間から身体を潜らせるとなんとか邸内へと忍び込むことができた。後は執事や侍女達の動きを追つて、セラフィーナが入つていった部屋を突き止めたのである。皆、セラフィーナとサティに気を取られ、ネズミ一匹の侵入には気付いていないようだった。

「……ピウニー……！」

サティは思わず顔を寄せた。ピウニー卿もその鼻に駆け寄ろうとして、ハツと気がつき思わず避ける。

「ま、待て、ここで変身するのは不味い。」

その声にサティの動きも止まり、仕方なく頭を低くしてじっと頭突きをした。ピウニー卿のふくよかな体がごろんと後ろに転がる。

「よかつた。無事で。……ピウニー……。」

「ああ、サティ…。む、…待て。」

サティの声に思わずピウニー卿の声が熱くなる。だが、すぐさまトーンを落とした。廊下の角からヴィルレー公爵の手を引いたセラフィーナが現れたのだ。後ろには、両手に何かを持った執事がついて来ている。ベンチの足元に顔を突っ込んだサティを見つけたのだろう。セラフィーナが駆け寄ってきた。その距離が詰まる前に、ピウニー卿はサティの口元を前足で撫でて、行け、と押し出す。

「サティが出てきた部屋。あそこには面倒。」

サティの瞳が何か言いたそうに揺れたが、小さく頷くと顔をベンチから離した。

「なあに、グレン、何か見つけたの？」

「「いやーん…。」

サティは、セラファイーナがベンチの側に来る前にその足元に駆け寄つて、すりすりと頭を擦り寄せた。初めて見せる猫の懐いた姿に、一気にセラファイーナの顔が綻ぶ。それ以上ベンチの下を覗き込むこともせず、セラファイーナはサティを抱き上げた。

「ふふ。お腹すいたでしょ？」「飯にしましょ？」

「「いや…。」

セラファイーナの腕の中で、少しだけ切なげにサティは鳴いた。そのままにくすくすと笑いながらセラファイーナは部屋に入り、娘の様子に瞳を細めたヴィルレー公爵と執事が後に続く。

既にベンチの足元に、ピュー卿の姿は無かった。

夜。どうしても一緒に寝たいといつセラファイーナを侍女たちが嗜め、枕元に猫用ベッドをしつらえてくれた。ようやく大人しく眠ったセラファイーナを見て、サティはほつと一息つく。すとんと床に降り立ち周囲をきょろきょろ見渡すと、「…サティ…」トーンの低い、落ち着いた男の声がベッド下から聞こえてきた。サティは振り向き、そちらへと頭を寄せた。

「ピューーーー！」

「よつやく落ち着いたようだな…。」

「うん。ごめん、なかなかあの子、離してくれなくて。」

「ああ。」

「お腹空いてない？」
「うち来て。」

サティが頭を下げるとき、ピューー卿がそれに乗った。ベッド脇に置かれたサティの餌箱のところに来て、ピューー卿を下ろす。サティに与えられた餌は、人間の食べるものとほとんど変わりが無い。さすが公爵家といえるが、味付けは薄かつた。サティは自分が食事をするのも気が引けて、食べ物をほとんど口にしていない。セラファイーナは心配していたが、猫はこういうのですよ…と執事のフオローで無理やり食べさせられるのだけは避けられた。ピューー卿は両前足で野菜を持つて、もぐもぐしゃくしゃくと食べている。サティはすぐに食べ終わると、ピューー卿の側で身体を丸くした。食事を終えたピューー卿は、こさか元気の無いサティの喉元の毛皮

に背中を預ける。その様子に尻尾を振りながら、サティはため息をついた。

「…明日にでも脱出できるかしら。」

「…うだな…。昼間は人の出入りが多いから、明日の晚まではここに居たほうがいいだろ。」

「経路は？」

「私の通れるところは確認できた。ここまで入ってきたところを辿ればサティでも戻れるだろ。」

「分かった。明日ね。」

「ああ。」

「ううん…。」

不意に、小さな子供がむずがるような声が聞こえた。セラフィーナが寝ぼけているのだろう。サティとピウニー卿の耳が、ぴくりと動いた。サティが顔を起こして、ベッドの方を見る。

「セラフィーナ、寂しがるかな。」

「……そうだな。」

セラフィーナはあれからずっとサティにかまいつぱなしだった。どう扱っていいのか分からないらしく、そつと撫でたり瞳を覗き込んだりするだけだったが、サティが思わず頬をすりと摺り寄せると、

それは嬉しそうに微笑む。それを見ている執事や侍女達の瞳も温かく、何よりそんなセラフィーナの頭を撫でるヴィルレー公爵の瞳はとても優しげだった。サティには、それが眩しい。

サティには血の繋がつた家族というものが居ない。田舎の小さな教会で、孤児として育てられていた。一番古い記憶が、師匠である理の賢者が自分を迎えて来た時のことだ。あの頃から、理の賢者は優しい髭のおじいさんで、師匠の家には門外不出の不思議な奥方と、生まれたばかりの娘さんが居た。サティはそこで育つたのだ。サティにとって家族というのは、その3人だった。いわゆる絵に描いたような普通の家族がよかつたなどと思ったことはないが、どういうものだらうといふ気持ちもなかつたとは言えない。だが、そんな風に思うことは、幸福に育ててくれた師匠に失礼なような気がして、普段は決して表情に出すことは無かつた。ヴィルレー公爵とセラフィーナを見ていると、そういう微妙な心の琴線に、触れる。

「サティ？」

しょんぼりと耳を寝かせてセラフィーナを見ていたサティに、ピウ二一卿が声を掛けた。

「うん？」

「どうした。ぼーっとして。」

「ん、なんでもない。」

情でも移つたか、と言い掛けた、ピウ二一卿は止めた。代わりに別の言葉を紡ぐ。

「完全に人間に戻れたら、」

「ん？」

「訪ねてみるとくらいは許されるだろ？。」

ピューイー卿の家も伯爵家だ。公爵家とは格も位も違うが、ご機嫌伺いくらいできるだろう。そしてそれくらいのさやかな、貴族の特権行使する程度ならば、家名を継がないピューイー卿にも許されるはずだ。人間に戻った暁に、死んだはずのピューイー卿の立ち位置はどうなるのかは分からぬが、一晩の宿と食事を貰つた恩もある。弟のパヴェニアもそれくらいの世渡りならばできるはずだ。

「早く、パヴェニア達と合流しよう。」

「そうだね。」

ピューイー卿は、サティがセラフィーナを可愛く思つてゐることに気付き、どうやら氣を回してゐるらしい。サティは小さく喉を鳴らして、頭をピューイー卿にそつと摺り寄せた。人間の時には絶対にやらぬいくせに、サティは猫になつたときだけ、このように妙に人懐っこい。

「サティ。私は、あの棚の下辺りに隠れておく。」

「うん。私もできるだけこの部屋から出ないよにするね。」

「無茶はするな。」

「分かつてゐる、ピウも。」

サティはピュニー卿に頷くと身を翻す。とん…と床を駆けてセラフィーナの枕元に戻った。起きていなかな?とサティはセラフィーナの顔を覗き込む。

「…ん、…グレン…遊ぶ?」

セラフィーナはうふふ…と笑って、寝返りを打つた。サティは肩まで落ちたシーツを咥えてセラフィーナの首元までそっと引き上げ、前足でしてしと軽く叩いて調えた。それから用意された猫ベッドで丸くなると、すぐに眠りに落ちていった。

* * * *

「セラフィーナ、準備は出来たかい?」

「うん。この格好、おかしくない?」

「とってもかわいいよ。」

くるりと一回転してみせるセラフィーナは、小花柄の刺繡を施したアイボリーのジャンパースカートに、生成りのブラウスを合わせている。ブラウスの首周りには、ふんわりと大きなリボンタイが結ばれていて、リボンの端にはチュールレースがあしらわれていた。髪は半分だけ結い上げて、ブラウスのリボンタイと同じ造りのリボンを大きく飾っている。どこから誰が見ても愛らしい公爵令嬢だ。

翌日、朝からサティと遊んでいたセラフィーナだったが、昼が近くなってくると急に身辺があわただしくなり、着替えやらお風呂やらで侍女達に囲まっていた。どうやら、ヴィルレー公爵が王宮へ上が

るらしく、王太子のご機嫌伺いにセラフィーナを連れて行くらしい。サティはヴィルレー公爵と共に、セラフィーナの様子を見ながら、尻尾をぱたんと揺らす。

セラフィーナはサティを連れて行きたがつたが、それはさすがにヴィルレー公爵に奢められた。

「フィーナ、今田はジョシュ殿下のお見舞いなんだよ。」

「分かってるわ。ジョシュもきっとグレンを見たら元気になると思うの。」

「…フィーナ、確かにグレンは可愛いからジョシュ殿下もお喜びになるかもしれないね。でも、病気の方のところに動物を持つしていくのはよくないな。」

「グレンはとても綺麗なのに？」

「うん。お城にはたくさんの人人がいるだろう？ 猫が嫌いな人もいるかもしれない。そういう人にグレンが捕まってしまったらかわいそうだ。」

「そうね…。」

セラフィーナはしょんぼりと肩を落とし、ソファでくつろぐサティを振り向いた。その額をくすぐり、寂しげな顔をしている。

「グレン、お留守番しておいて？」

「いいや。」

サティは返事をしてみせた。その声に、パツとセラフィーナの顔が明るくなる。

「お父様！ グレンは私の言つことが分かっているのかしら。返事をしたわ！」

「そうだね。とても賢い猫かもしれない。」

返事をした…というのは、もちろんヴィルレー公爵には信じられないが、それでも愛娘の嬉しそうな顔に思わずつられて微笑んだ。ヴィルレー公爵は、サティの頭を撫でる。

「グレン、大人しくしておくんだよ。」

「いやーん。」

ヴィルレー公爵の手にサティは再び答えて見せた。その様子を見たヴィルレー公爵は首を傾げている。なるほど、確かに返事をしたように聞こえた。昨日、少し遊んだだけだったが、グレンはセラフィーナにどんなに触られても爪も牙も出さなかつたし、本当に賢い猫なのかもしれない。ヴィルレー公爵は立ち上がり、セラフィーナに鞄を渡した。とても大きな鞄で、昨日届いた歴史の本を入れている。王太子に見せると約束をしているそうだ。セラフィーナはいつもこの鞄を誰にも持たせず自分で持っていた。

「さあ、行こう。」

「はい。グレン、また後でね。」

「にゃん。」

サティはほつとした。ソファに立ち上がって、再び尻尾を振る。ヴィルレー公爵に手を引かれたセラフィーナ、そして侍女達も外に出たのを見計らって、サティはすとんと床に下りた。

「ピウーーー。」

「サティ、大丈夫か。」

「ピウーーーー。」

「私は、じつと待機しているだけだからな。」

「私も別段フイーナに構われているだけだから。」

：とはい、ずっと猫のフリをしていてサティは若干ぐつたりしていた。酒場でネズミ捕りの番をしているときは、特に酒場の主にかまわれるということもなかつたので、ここで始終セラフィーナの相手をしているのとは格段に違う。ピウーー卿が潜んでいる棚の足の側で身体を丸めると、尻尾をぱたりと動かした。ピウーー卿もそれに答えるように、サティの丸まつた喉元に身体を埋め、そこを撫でてやる。

商隊にくつづいて移動しているときと昨晩と離れて眠つていたので、久々に感じるサティの毛皮と喉元の温かさが心地よい。サティもピウーー卿の毛皮のふわふわに思わず瞳を閉じる。だが、次の瞬間2人の身体がぴくりと動き、立ち上がった。

「グレン！」

セラファイーナが戻ってきたのだ。

セラファイーナは棚の足元で丸まっているサティを見つけると駆け寄つてきた。しゃがみこむと、鞄を開け唇に人差し指をあてる。

「静かに。グレン、入つて！」

サティの毛皮がぶわわと逆立つた。鞄に入るよう促され、足を突つ張つて踏ん張る。だが、セラファイーナはサティの身体を抱き寄せるように鞄へと招き入れた。セラファイーナが外を窺っている隙を狙つて、とっさにピウニー卿が鞄の中に入る。前足を上げて、躊躇うサティへ合図を送つた。「ピウ！ 本気！？」かるうじて声には出さなかつたが、グリーンの瞳で怪訝そうにピウニー卿を見る。ピウニー卿はその瞳を見て、しつかりと頷いた。サティは観念したように鞄に顔を突つ込む。

「フィーナ、忘れ物はあつたのかい？」

「はーい、今行きます！ グレン、大人しくしておいてね？」

恐らく、ひっくり返らないように大事そうに抱えているのだらう。それほど無茶な体勢にならなかつたのが幸いした。ピウニー卿とサティを入れた鞄を持つて、セラファイーナはヴィルレー公爵の元へ急いだ。

009・クマみたいな人が追いかけてきてる

オリアーブ王宮の王太子の宮で、ジョシュはソファでセラフィーナと並んで座っていた。ヴィルレー公爵は国王と会見するために席を外している。今は侍女も下がらせていた。

「よく来たね、セラフィーナ。」

「ジョシュ、お加減はどう?」

「うん。今日はだいぶ調子がいいんだよ。フィーナ、今日は……」

「あのね、ジョシュ。ジョシュに見せたい子がいるの。」

「見せたい子?」

ジョシュは、自分の学術指南役であるヴィルレー公爵の一人娘、セラフィーナのことをとても可愛がっている。

ジョシュは12歳。オリアーブの王太子である。そういう身分でありながら、ジョシュは身体が弱い。少し無理をするとすぐ熱を出してしまってし、激しい運動をすると眩暈を覚えた。特に、怒りや不安といった情緒が体調に影響を与えるため、常に気持ちを静めて生活しなければならない。周囲は何も言わないが、恐らく将来は危ふまれているだろう。……にも関わらず、オリアーブ国王にはジョシュ以外の子が居らず、世継ぎとしての責任は今のところ彼1人にかかるつていてる。

ジョシュは利発で才氣溢れる王太子ではあったが、机上の勉学以外

で、剣術や馬術、魔法など、王として必要な訓練を受けることがほとんど出来ていらない。まだ子供であると甘えられる年齢も、ギリギリで、そろそろ王太子として国王の執務を手伝い、周囲に認められなければならぬ時期だ。だからこそ、周囲の人間は必要以上に厳しかつたり、必要以上に腫れ物に触るかのような扱いをしてくる。国王ですから、ジョシュのことをどう扱つていいのか図りかねているようだった。

加えて、現在国王の妃は…ジョシュを生んで以来待望といつてもいいだろう…懷妊していた。王妃に男子が生まれ、そして自分の身体が強くならなければ、恐らく自分は王太子ではなくなる。ジョシュは、もし弟ができれば王太子の身分は譲つて自分は補佐として立つてもいいと思っているが、周囲はどう思つてのことか。身体の弱い自分を傀儡にしたがる貴族は多いだろうし、王太子としては役に立たぬと排斥したがる貴族もまた、いるはずだ。王太子としては纖細すぎ、普通の子供としては高貴すぎるのだ。

気の休まらない毎日の中で、ヴィルレー公爵と過ごす勉強の時間と、時々自分を見舞いに来てくれるセラフィーナとの時間が、ジョシュはとても好きだった。

「グレン、出ておいで。」

セラフィーナがいつも大きな鞄を開けると、そこから辺りを伺うように、セピア色の小柄な猫が顔を出した。予想外の小さな客人に、ジョシュは思わずセラフィーナと猫の顔を交互に見る。

「猫？」

「グレン」というの。」

「フィーナ、ヴィルレー公爵のお許しは貰つたのかい？」

セラフィーナはジョシュの言葉に少しだけ気まずそうに、ふるふると頭を振つた。その様子を見て、ジョシュは驚く。

セラフィーナは7歳で天真爛漫にも見えるが実はしっかりした性格だ。自分が教える勉強のこともよく覚えているし、順序よく物事を考えて答えを出すことも知つていて。だから、まさかヴィルレー公爵に黙つて、自分のところに猫を連れてくるといつ無茶をするとは思わなかつた。

「ジョシュ、ずっと前に小さな動物を飼つてみたって言つてたでしょ？」

「覚えていたの？」

セラフィーナは頷いた。確かにジョシュは、乗馬などの訓練がありできず動物に触れる機会がない。雑談交じりに、小さな動物だったら自分にも飼えるだろうかとちらりと言つたことがあるのだ。本当にちらりと言つただけなのに、セラフィーナは覚えていたようだ。ジョシュは苦笑して、猫に手を伸ばした。そつと触れてみると、猫の毛皮は思ったよりもすべらかで心地よい。耳の後ろを撫でてやると、「うーん」と喉を鳴らした。それにしても…、勝手に動物を王子の部屋に持ち込むとは、全く褒められたことではない。

しかも今日は…。

「グレン…、しばらくこの部屋で大人しくできるかい？」

「ジョシュ?」

「フィーナ、忘れたの?…今日僕の調子がよかつたら、」

「」

ノックの音が、聞こえた。ジョシュは、思わず猫を抱いと自分の背に隠す。セラフィーナの体がびくりと緊張したのが分かつた。今日は、ジョシュの調子がよかつたら、白翼騎士団の鍛錬場を見に行こうという約束をしていたのだ。女の子のセラフィーナでも楽しめるように、剣と剣の打ち合わせではなく、型通りに剣を振る鍛錬をみせてくれるはずだつた。その迎えが来たらしい。

「ジョシュ殿下。鍛錬場の準備が整いましたが。」

「ペルセ、ちょっと待つて。フィーナ…?」

「私、忘れてた。…ビリショウ、ジョシュ…。」

扉の向こうから聞こえてきた女性の声は、ジョシュの護衛騎士の声だ。ジョシュは、少し考えて…セラフィーナの頭を撫でた。けほんと咳払いをひとつする。

「ペルセ、『めん。少し休んでから行つても大丈夫かな。』

「ジョシュ殿下?…またお加減が!…失礼します。」

扉の向こうから慌てた声が聞こえ、すぐさまバタンと扉が開いて慌てたように女性の騎士が駆け込んできた。ジョシュはこの騎士が過保護なのを忘れていた。すぐに自分の作戦が失敗したこと気に付く。

「ペルセニーアちょっと待つて、大丈夫だから…。」

「しかし、殿下…っ…！」

ジョシュが慌てて席を立つ。その途端、ぐらりと眩暈がして額を押さえた。

「殿下…！」

「ペルセ、静かに。」

「ジョシュ…！」

ジョシュの体を女性騎士が支え、心配そうにセラフィーナがジョシュの手を押さえる。

「兄上！」

ペルセニーアと呼ばれた女性騎士が、扉の向こうに声を掛ける。

「ペルセニーア！ ジョシュ殿下は大丈夫か…失礼いたします。」

茶色が交じつた濃い金髪、武張った顔に大柄な身体つきをした、気が立つたクマのような風貌の男が扉で一礼をした。その姿を見て、ジョシュが一喝する。

「ペルセ！ 僕は大丈夫だ。パヴェニーア団長、扉を閉め…」

そのときだ。

鞆から、猫がトーンと飛び出して、扉田猛烈に駆け出した。

「…グレンー」

「…猫ー!？」

「むー?」

セラファイーナとペルセニーアと、…そして、クマのようないい男、パヴェニアが声を上げたのは同時だ。

「猫、一体どこから?」

「つ、捕まえて!」

ジョシュの声にパヴェニアが反応する。だが、猫は既にパヴェニアの足元をするじと抜けていた。

「兄上ー!」

「任せろ。」

パヴェニアが猫を追いかけて、大きな体躯を翻した。

「殿下、どうこうことですか?…セラファイーナ嬢…?」

「ペルセ。」

ジョシュはセラファイーナを背に庇つた。眩暈はもう治まっている。何か言いかけたセラファイーナより先に、ジョシュは真っ直ぐにペル

セニーアを見上げて言った。

「あれは僕の猫だ。傷つけないよつこ。」

「殿下。」

「我僕を言つてすまないが、保護して欲しい。」

ペルセニーアはジョシュとセラフィーナを交互に眺めて、観念した
ように、敬礼を施す。

それにしても、氣のせいだらうか。

猫の上に、金色の固まりが乗っていたよつな氣がした。

* * *

「サティ…、声を出せないよつて聞いてくれ。」

ノックの音が聞こえ、慌てたよつなやり取りが聞こえる中、再び鞆
の中に閉じ込められたサティの耳元でピウニー卿が囁いた。鞆の中
で様子は分からなかつたが、ペルセニーアという名前が出てきた瞬
間、ピウニー卿の髪が緊張したよつにピンと張つたのだ。ペルセニ
ーア・アルザス。間違いない。ピウニー卿の妹だ。王太子に近しい
騎士として活躍していたとは思わなかつた。

「合図をしたら、私を乗せて飛び出してくれ。外を飛び出したら女
の騎士が居るはずだ。氣を引いて、追いかけさせる。あれは私の妹
だ。」

サティはこくりと頷いた。ピウニー卿はサティの背によじ登りしが

みつべ。

「しつかり掘まつて」

「ああ。」

ピューー卿に囁くと、サティは身をゆづくつとよじりて頭を鞄の蓋の方に向けた。蓋が閉められていない鞄は、一気に飛び出せば簡単に外に出られるはずだ。そのとき、パヴニー・ア团长と呼ばれた男が入り口に控えた声が聞こえた。

「サティ、行け！」

サティは、トン！…と鞄を飛び出した。

* * *

「ちょっとーーー、なんかクマみたいな人が追いかけてきてるんですけどーー？」

「計画にて、変更無し、だ。あれは、私の、弟だ。」

駆けているサティの頭の上で、ピューー卿の声がかくんかくんと揺れる。

「全然似てない！ クマみたい！」

「そうか？…じゃあ、私は、何に似てる？」

「え、何その質問。ネズミじゃなくて？」

「おい、追いつか、れるぞ！」

サティは、わざとスピードを緩めると、数本立っている柱をくぐりと回つてみせた。追いかけてくるクマのような男はその動きに翻弄され、「うおう」とか何とか言いながらバランスを崩す。だが、そこはさすがに騎士なのだろう、体勢を整えつつサティを捕らえんと手を伸ばしてきた。サティはパヴェニアの手を誘うように、すぐ側の、えらく高そうな壺の置かれた机に飛び乗つて、その後ろを通り抜ける。これにはさすがにクマの身体が躊躇い、動きが止まつた。その隙を見計らつて再び廊下へ降り立ち駆けていく。

「妹さん、ちらつと見えたけど、すつごい美人だつた――！」

「…そうか？…私は、その、サティの、方が、美…」

「あの角曲がるから掘まつて！」

「…待て、そつちは…！」

サティは下働きの人の多い一角に入りこんだ。今は昼過ぎの中途半端な時間といふこともあり、人はまばらだ。だが、不味いことに廊下は行き止まりだつた。

「行き止まりつ！？…ピウニー…。」

「…大丈夫だ、サティ。」

サティが、きゅつ…と身体を反転させて振り向くと、角を曲がるクマの身体が見えた。

「あの部屋へ！」

サティは返事をする前に、すぐ近くの開いていた扉にするつと身体を滑り込ませた。

＊＊＊＊

2人が飛び込んだのはどうやら物置の類のようだ。磨かれる前の鎧や盾などが置かれてあり、猫の姿のままそこに飛び乗るのは、不安定そうで気が引けた。安定しそうなところを探し、サティはとんとんと、上手く部屋の棚の一番上に登る。一番上に到着したとき、扉が勢いよく開いてパヴェニーアが入ってきた。

「確かここに……。猫、おい猫！」

顔も厳ついが、声も厳つい。そういうえば、ピウニー卿の声も低くて渋みがあつてよく通る。アルザス家の殿方は皆声がいいのだろうか。棚の上で身を低くして構えていると、サティの耳元で、聞き慣れた低い声が響く。これはピウニー卿の声だ。

「『おい猫』とはまた、随分偉くなつたものだな、パヴェニーア。」

パヴェニーアの動きが止まつた。狭い物置にはもちろん誰も居ない。パヴェニーア一人だ。それなのに、パヴェニーアの周辺が緊張したような雰囲気になるのがサティにも分かつた。

「……その声、あ……」

「私が分からんのか、パヴェニーア。」

「…あ、あに…。」

「ルーチだといつのに、パヴェニーア・アルザス！」

「はっ！ 兄上！」

それからと、パヴェニーアが直立不動の姿勢を取った。

「ルーチだ。上だ。」

「…は？」

パヴェニーアは、鎧下などが置かれた棚の、さらに上を見上げた。
パヴェニーア自身背が高いほうだが、物置の棚はそれよりもさらに
背が高い。見上げたそこには、棚の端から顔を覗かせて自分を見下
ろすセピア色の小柄な猫がいる。その猫の足元から、金色の毛皮の
ネズミがゆつくりと姿を現した。

猫の前足の間からゅりくりと登場した金色のネズミ。その姿に、パヴュニーアは目を奪られた。しばしの間、言葉を失う。状況から言うと、この猫かネズミが兄の声で自分を呼んだとしか思えない。

「猫…と、ネズミ? 面妖な…。」

「兄に向かつて面妖とは失礼だな。」

…ネズミの口元が、ふくふくと小刻みに動いている。…ということは、今声を出しているのはネズミということになるだらう。そんな愛くるしい口元から出てきているとは思えない渋い声だつた。聞き覚えのあるその声に、パヴュニーアは驚愕の表情を浮かべたまま、恐る恐る問い合わせる。

「…兄上…?」

「やうだ。とりあえず扉を閉めろ。」

パヴュニーアが扉を閉めたのを確認すると、ピウニー卿は再びもぞもぞとサティの頭の上に乗つた。サティはネズミを落さないようには、さらに、鎧や兜に触れないように気をつけながら、そろそろと近くの小さなテーブルまで降りる。テーブルにトン…と着地すると、ピウニー卿がサティの頭から降りて、その傍らでふんぞり返つた。パヴュニーアの瞳には、どう見ても綺麗なネズミにしか見えない。薄い色合いの金色の毛皮、濃いこげ茶色の愛くるしい瞳。Yの字の口元、自慢げに揺れる髭、丸い耳、太ましいお腹、短い手足。腰にはベルトらしきものを身に着けていたようだ。

「う…う…こんな可愛らしきネズミが…そんなまさかっ。」

「え。」

サティイがよく見るとパヴェニーアの瞳が妙に熱っぽかった。息が上がり、頬が赤い。餌の足りないクマのような怖い顔から飛び出した「可愛らしい」という言葉に、ピウニー卿の髪が不機嫌そうにピクリと揺れた。

そんなピウニー卿の髪の揺れには全く気が付かず、パヴェニーアはさらに小柄な猫に視線を移す。さわり心地のよさそうな綺麗なセピア色の毛皮、グリーンの瞳、たおやかな尻尾、しなやかな四肢。

「しかも、う、こんなに可愛らしい猫を従えて…？…ああー。」

パヴェニーアがサティイの脇腹をむんずと掴んで持ち上げた。

「つきやあああああ…！」

「なんて可愛らしき！」

「…なつ、パヴェニーア！」

サティイの毛が逆立ち、尻尾の先まで膨らんだ。

しかし、サティイの切なる悲鳴も、ピウニー卿の制止も耳に入っていないようで、パヴェニーアは抱き上げた腕を引き寄せて、そのセピア色の毛皮に思わず頬を摺り寄…

てし。

近づいてきたパヴェニーアの顔を拒否するように、サティの四肢が突っ張った。

両の前足がパヴェニーアの頬を押さえつけている。サティはそのままジタバタと暴れた。

てしてしてしてしてし。

だが、このささやかなサティの抵抗がパヴェニーアの心に火を付けた。

パヴェニーアの頬にヒットするのは、ふにふにとした感触。猫が軽く暴れた程度、白翼騎士団の団長たるパヴェニーアには何のダメージも無い。いや、むしろ回復する。癒される。ああ…。

「ああっ、この感触はっ…！」

ピューー卿が両前足を万歳の格好にして伸び上がっている。片方の前足には抜き身の剣を持ち、必死にそれを振っていた。

「パヴェニーア！ 止めろ、止めんか！」

「しかし、肉球が！ …あああっ！」

「にひ、にひくきゅ…つ、なつ…、なんだとう…私ですら触れたことがないといつのこ…くわうつ、許せん！」

チクンッ！

「いだだつ」

ピュニー卿はテーブルの端に寄つて、ちょうど眼前にあつたパヴェニーアの腿を剣で刺した。さらにサティが追撃する。

ガリツ！

「あいだつ！」

サティのじり皿の肉球から爪が出て、パヴェニーアの小さな悲鳴が響く。

ガリガリツ

猫パンチ。

猫パンチ。

猫パンチ。

猫パンチ。

猫パンチ。

「す、すみません、すみませ、ちょ、いだつ、すみ、す、ま、」

パヴェニーアは腕を伸ばしてサティを自分の顔から引き離した。頬には鮮やかに数本の筋が描かれている。

「パヴェニーア！ 気をつけッ！」

パヴェニーアがサティを持ったまま、ざわり…と姿勢を正す。その号令に我に返つて兄の声に視線を落とすと、金色の毛皮のふわふわしたネズミのピウニー卿が、剣をパヴェニーアに向いている。

「パヴェニーア！ 注目！」

言われなくともパヴェニーアは、サティを持ったまま真剣な様子でピウニー卿を見下ろしていた。：こんなに小さいのに帶剣している…ということか…！？ しかもあんな丸い瞳を凛々しく釣り上げて、どうやら自分を睨んでいる。なんと…なんと…いつすさまじい愛くるしさ…これが、あの竜殺しの騎士ピウニー・アルザス兄上なのか、こんな可愛い兄上が存在してもいいのか？ いいのか――！？

いや…、いい。實にいい。

目の前のネズミが本物の兄なのがどうなのか、どう判別すればよいのか分からぬ。いや、もう兄でかまわない。むしろ兄であつてください。

「いい加減サティを下ろせ、それから気安くサティに触れるな！
…聞いておるのかパヴェニーア！」

「はつ、はい、申し訳ありません兄上…」

ピウニー卿の一喝に、つい「兄上」と返事をして、慌ててサティをテーブルに下ろす。サティはずたれ…とピウニー卿の背後に回り、小さな背中の毛皮に自分の顔を押し付けた。ネズミの背に猫なので、サティの身体はまったく隠れていない。

「…あ、兄上、まことに貴方は兄上なのですか…？」

「信じられないのは無理もないが、私はまさしくピュニーア・アルザスだ。そしてこっちが、魔法使いのサティ。」

「しかし…。」

剣を鞘に収めながら言つたピュニーアの言葉に、パヴェニーアの視線が改めてサティに移る。紹介されたらしい猫は、いまだに警戒しているようだ。頭を低くして、頭の毛を逆立てている。ピュニーア卿の背中から、むらつむらつ…と顔を覗かせつつ、渋々応答した。

「…サ、サティ、です…。」

猫から紡がれた綺麗な声に、再びパヴェニーアの瞳が見開かれる。

「しゃべつている…と、いふことは…意思疎通が？…」このような愛くるしい猫と意思疎通が…？」

パヴェニーアの瞳が熱っぽく潤み、大きな手が再びサティに伸ばされた。

「おいら… サティに触れるな！」

「しかし兄上… 今度は乱暴はいたしません… ちょっと撫でさせていただぐだけで…」

既に、ネズミのことは「兄上」確定のようだ。それは武家に育てられたパヴェニーアに刷り込まれた「兄」という存在に対する条件反

射なのか、はたまた、こんな可愛いネズミが「兄」だつたらそりやあもう楽しいだろうなあという願望なのか。

「撫でる…？ サティを撫でるだと…？ パヴェーーア、それは聞き捨てならん。どついつ意味だ！」

「じゃあせめて肉球だけでも…」

「もつとダメだ！」

「じゃあ撫で」

「だからダメだといつのに…」

2人とも毛を膨らませて威嚇している。ピュニー卿などは再び剣に前足を掛けていた。しかし、ああっ…！ なんということだ、それすらも愛くるしい…。パヴェーーアは久々に興奮を覚える。そもそも小さな金色の太ましいふわふわしたネズミが、針のような剣を今にも抜かんとする構えを施し、美しい小柄な猫を守る姿など、愛くるしくないわけがないではないか！ ふわふわした愛らしさを目の前にそれを堪能できないなど、なんという拷問か！

…パヴェーーア・アルザスは厳つい外見に似合わず、愛らしいものが大好きな男であった。

ピュニー卿が「気をつけろ」…と言っていたことを、サティは今更ながら思い出した。

* * * *

「ともかくパヴェニーア、少し落ち着け。」

「しかし、兄上、これが落ち着いていられますか！？」

「何がだ？」

「兄上がこんなに愛くるしい猫を連れ、こんなに愛くるしい姿をしていろとこうのにつ！」

再び身の危険を感じたサティはそつと退いて、パヴェニーアから少し離れたところへ移動した。ピウニー卿がそんなサティを庇うように右前足を出す。もう、どんな動作をしても可愛く見えるパヴェニアは、再び頬が染まる。そんな弟を見ながらピウニー卿はため息をついた。

「相変わらずだな、パヴェニーア……。」

「何が、ですか？」

「ふん…と鬚を撫でると、ピウニー卿は口元をぴくぴくと動かした。

「パヴェニーアが小さい頃、ペルセニーアの持つているぬいぐるみがあまりにも可愛くて自分も欲しい」と「ね…」

「兄上…」

サティがクフフと噴出した。厳つい顔のパヴェニーアが顔を真っ赤にして拳を握りしめている。

「そもそも小さい頃はぬいぐるみがないと寝れな

「あああああ兄上…！」

いよいよパヴューニーの拳がふるふると震えてくる。やはりこのネズミは兄なのだ。ああ…なりませ、わざやかなこの弟の願いを聞き届けてほしい。

「兄上！…しかし、しかしどすね、それならばせめて、兄上の腹の毛皮だけでも撫でさせては…」

「…ダメだ！ 何が悲しくて弟に腹を撫でられなければならんのだ。」

もつともだ。

「しかしつ」

諦めきれないのか、熱い視線でパヴューニーが2人の乗っているテープルへと一步近づく。気圧されるようにサティイが一步退くと、後ろ足が空を切った。

「おひ…」

するん…とサティイの身体が傾き、机から落ちる。振り向いたピュー卿がぎょっとして、思わず助けようと飛び降りる。それが間違いだった。

「サティイ…！」

ピュー卿の小さな身体がサティイの顔の上に落ち、2人の口元が触

れ合つた。

* * * *

「つかひー..」

「わや、…嘘つー..」

「.....!」

パヴェニーアの視界で突如、ふわりと空気が揺らいだ瞬間、

「パヴェニーア!、回れ右つー..」

「はつー!」

これまでにない条件反射でピウニー卿の声がパヴェニーアに回れ右を指示し、脊髄反射でパヴェニーアはその指示に従つた。パヴェニアが変身の瞬間および変身直後の2人を見なかつたのは、アルザス家秘伝の修行の成果といえるだらう。

パヴェニーアの背後から何かを打ち付ける音がして、続けざまに男と女の声が聞こえた。やがて、ガタンとかバタンとかいろいろな音が聞こえてくる。

「なんで、何でこんなとこりで変身…」

「お、落ち着けサティ、とにかく今は服を…」

「分かつて、服着るから、ちよつとどいて…あ、ダメ…どいたら

全身見え…つて、前から隠してよピューーー。」

「見るな！」

「見せないで！」

「見せてはいない！」

↙エティオティード・エテビューシュ・イハシュ・オ・ト・グレン↖
(全ての持ち物を縁石より出力せよ。)

サティの首輪が魔法の力を帯び、ふわりとシーツが2人に降りる。さらに2人分の下着、服などがばらばらと落ちてきた。突如聞こえてきた呪文に、パヴェニーアが振り向く。

「む、今の呪文は…うをおおおおおつー?」

振り向いたところに見えたのは、裸の女を裸の男が組み敷いている(ように見える)様子だった。シーツが2人の身体を隠してはいるが、男の逞しい肩と肩甲骨は隠しきれておらず、セピア色の綺麗な髪が、男の身体の下からさらさらと流れ広がっている。あたりには脱ぎ散らかされたような男女の下着や、服が散らばっていた。恐らく男は女に体重を掛けないように四つんばいになっているのだろう。

男と女の視線が、固まつたパヴェニーアに向けられたのは同時だ。

「…」

「パヴェニーア、回れ右と言つておるー。」

「はつ、はいいいい！」

パヴェーネアは再び回れ右をした。

011・猫アレルギー

パヴェニーアの背後で、男女の声が響いている。要約すると、「動くから少しずれる」「早く動いてよ」「これ…か?」「ちょっと下着! それ私の!」「た、たまたま手に触ったんだ!」「分かったから返して!」とかそういう類の言葉である。ダメだ。深く考えていけない。何が行われているか…など、深く考えてはいけないのだ。

…パヴェニーアは邪念を振り払うように、脳裏に焼きついた映像を反芻してみた。とても美しい…いや可愛い…いや愛くるしい…、猫とネズミと会話したのはつい先ほど。ネズミは信じられないことに兄だという。あんなに腹がふわふわした兄がいてもいいのだろうかと思つたが、居てもいいのだという結論に達した。ともかく、兄が居て…そして兄が必死で守る猫が居たのだ。

お分かりになるだろうか。可愛いものが好きな人間の目の前に、意思疎通のできる可愛いもふもふした生き物がいたとしよう。そのときの、その悦びたるや! ああ、あんなに可愛くて小柄で綺麗な猫…そしてネズミ、思い出しだけで…。

邪念を振り払うためだったのに、さらに邪念が。

忘れそうになつた。猫もネズミも、先ほどの一瞬で目の前から消えたのだ。そして、男と女が2人そこに居た。…男のほうは、確かに兄だつた。1年前に魔竜と共に果てたという兄…その兄が戻つてきて、共に在る女性。パヴェニーアとて妻帯者である。ピウニー卿の口調や必死さで、あのサティという猫…女性…が兄にとつてどのような存在なのかは分かるつもりだ。…わかる、つもり、えっと、兄

の、大切な、女性？ 大事なことを、ひとつ、忘れているような

「パヴェニーア。もう大丈夫だ。」

「はつ。」

パヴェニーアが忘れかけている大事なこと…それを思い出す前に、

兄の声が自分を呼ぶ。

振り返り、2人を認識する…その瞬間、

コンコン

ノックの音が、響いた。

* * *

「パヴェニーア殿はここへ？」

白翼騎士団所属の騎士、ヴェルレーン・サテュルニアは、さらりと前髪を払った。

彼はジョシュ王子を迎えて行つたまま戻つてこない団長を探していたのだ。団長の妹君、王太子の護衛騎士を勤めているペルセニーアに聞いてみると、なんでも王太子の飼っている猫…？が逃げ出したとかで、その保護に走つたとのことだ。訓練の見学は副団長が滞りなく続行しているから問題ないが、猫1匹を捕まえるのにこれほど時間がかかるのはおかしい。ヴェルレーン・サテュルニアという男は猫が苦手だったが、職務に忠実な男なのである。各地に残されたパヴェニーアと猫の足跡を人づてに辿りながら、最終的に王子宮か

ら少し離れた物置部屋に案内された。

「ありがとうございます。君はもう行つてかまいませんよ。」

ヴェルレーンは僅かに田じりの下がつた甘い瞳に爽やかな笑みを湛えて、案内してくれた侍女の髪に遠慮がちに触れた。触れられた侍女は、頬を染めて俯く。「いえ、そんな」とかなんとか言いながら、首を振つて一礼した。「あ、待つてくださいー」身を翻そつとした侍女の腕を、ヴェルレーンが取る。

「…ああ、僕としたことが…貴女の名前を教えていただけますか…？」

侍女の顔がハッとした表情に変わる。恥ずかしげに瞳を伏せて…、侍女は名を名乗つた。その様子に満足気に、ヴェルレーンは瞳を細め、頷く。

「ありがとうございます。これで今度から…貴女の名前を呼ぶことができます。…さあ、もう行つてください。仕事の邪魔をして、申し訳なかつたですね。」

ヴェルレーンはぱたぱたと廊下に向ひに消えていく、侍女の可愛い後姿を見送つた。その姿が完全に消えたのを確認すると、そこにある扉を振り向く。

「ノンノン…とノックをする。

「パ、パ、パニーア団長、いらっしゃですか？」

返事が聞こえる前にガターンと大きな音がした。怪訝に思ったヴェ

ルーレーンはもう一度、今度はドンドンと大きくノックをする。

「団長？ 開けますよ？」

「その声、ヴェルーレーンか、いや、ちょっと待て。」

「パヴェニア団長？ 待てとはどういふことですか。」

「いや、のうぴきならない事情があつてだな、とにかく、少し、」

「パヴェニア団長、何事があつたのですね？…申し訳ありませんが開けさせていただきますよ、失礼します…」

ヴェルーレーンがガチャリと扉を開けると、そこには、いつもの厳つい顔を僅かに焦つたように歪ませたパヴェニア。そしてその背に庇われるよう、セピア色の髪にグリーンの瞳の女が居た。グリーンの瞳は不安げに、揺れているように見える。狭い部屋に男と女の焦つた顔の男。これは…。

ふつ…とヴェルーレーンが苦笑した。パヴェニア団長は元来真面目な男だったと思うが、このような一面もあつたとは。クマのような厳つい顔をし、それでいて美しい妻を持つているのに、…また別の華を隠していたとは…。

「そういうことですか…、パヴェニア団長。分かりました。奥方には黙つておきますが、あまり羽目をお外しにならないように。」

ヴェルーレーンの言葉を聞いて、驚いたのはパヴェニアだ。目を丸くして、首を振る。

「な、何を言つてゐるんだヴェルレーン、違つんだ、これは……。」

「いえいえ、いいんです、いいんです。分かつてます分かつてます。
ええ、普通にうつときには『ハイ正解!』とは言いませんよ。……パ
ヴェニーア団長、気にしないでください。私の事にもいつも目を瞑
つていただいているということで、今回は見逃しますよ。……ただ、

ヴェルレーンは、パヴェニーアの肩越しにセピア色の髪の女を伺つた。部屋に一歩入ると、の方に近づく。

「……」のよつた美しい女性がこの王宮に居たとは、私としたことが。
「お前をお伺いしてもよろしいですか……？」

「あ……あの、」

ヴェルレーンが囁く声が妙に色っぽい。パヴェニーアが押さえようとした手よりも先に、女の髪に触れる。女の戸惑つよつた声が耳に心地よく、ヴェルレーンは楽しげな表情を浮かべた。真つ直ぐなセピア色の髪を持ち上げると、そつとそれに口付けを……。

「ふえつぶしょーーー！」

そのときヴェルレーンがくしゃみをした。それは、ヴェルレーンという線の細い洗練された立ち居振る舞いの男には不似合いな、年齢を重ねた中年親父のよつなくしゃみだった。

「ちよ、何か飛んできた……。」

女がぼそりと呟く。だが、ヴェルレーンという男はその程度のことでもげる……ではなかつた、めげるような精神力の男ではないのだ。

「失礼…」淑女の前の騎士らしい、一分の隙も無い笑顔に戻ると、今度は女の手を取つた。女の手がびくりと震えたのが、ヴェルレンの手に伝わり、それをなだめるようにもう片方の手をそつと重ねる。

「ヴェルレン、よさないか。」「

女が咄嗟に手を引いたのと、パヴェニーアが咎めるようにヴェルレンと女の間に入つたのは同時だ。そして、もう一つ。

女の手を掴み、ヴェルレンから引き剥がした手があつた。ヴェルレンとて、白翼騎士団に所属する騎士である。そのヴェルレンに直前まで気配を気付かせることない男。そのような存在がもう1人ここに居たことに、ヴェルレンは眉を潜める。その男に目を向けると、

そこにいたのは、良家の子息が着る様な上質な…だが、シンプルな平服に豪華な兜を被つた男だった。

* * * *

ピウニーさん。

どう見てもそれは怪しいです。

パヴェニーアと話し合つてゐるときに、何の不可抗力でか元に戻つたサティとピウニー卿はあたふたと着替え、やつとパヴェニーアに人としてまともに向かつた。その直後だ。コンコンとノックの音が聞こえ、扉の向こうからヴェルレンと名乗る男の声がしたのは。

ピウニー卿は死んだことになっている。王宮内でこいついた形で顔が見られるのは不味いだろう。咄嗟にピウニー卿を奥の死角に押しやるが、サティは間に合わなかつた。パヴェニーアに庇われるような位置で、扉が開いたのだ。

サティとパヴェニーアの関係を誤解したらしい、ウェルレーンを見て、サティはなんとしてもこの誤解を解かねばならずと思案していたため、髪が触れられたときに反応が遅れた。その後、まさか至近距離でくしゃみをされるとは思わなかつた。完全に言葉を失つたサティの、今度は手を、ウェルレーンは掴む。咄嗟に身を引いた瞬間、サティの身体が別の男に引き寄せられた。後ろから抱え込むように手を引かれ、バランスを崩した背中を逞しい胸が受け止めた。

助けてくれた腕の安心感に見上げた男の顔は、きらつきらした兜を被つていて見えなかつた。

……サティの口が開いた。

……が、かるうじて、「何やつてんのピウニー」と発声しなかつた自分を褒めたい。

確かに、正体がばれないように顔を隠したのは分かる。だが、鎧を着ていない、鎧下でも無い、シャツにズボンというシンプルな平服に兜という「一デイネートは、いくらなんでも怪しい。どう考えてもおかしい。いや、おかしいよね。自分の美的センスがおかしいわけじゃないよね。しかもなんでその豪華な兜チョイス。いや、地味だつたらいいかとかそういう問題でもないが、目立つ。印象抜群すげて、逆に忘れられない。

「……君は、何なんだ……。」

普通はそう来る。誰なんだ、ではなくて、何なんだ。

ヴェルレーンは不愉快そうに眉を潜めてピウニー卿を見ている。パ
ヴュニーアでさえ、どうつオローしていいのか分からぬ顔だ。そ
もそもピウニー卿はどう見ても素人臭さがない。姿勢も体躯も、鍛
えられた男のものだ。発する気配も歴戦の戦士だといつことが、ヴ
エルレーンには伝わってきた。

そのとき、なんとか気持ちを持ち直したサティが口を開いた。

「えーと、あ…あの、私が…」

サティがピウニー卿を庇うように手を伸ばし、グリーンの瞳を潤ませた。ヴェルレーンの視線が、ピウニー卿からサティへ移る。

「私が、この方とここでお会いしていたのです。…そこをパ、ヴュニア様に見つかってしまって…。」

「いやいや、どう考えてもこの服にこの兜つて怪しいじゃないですか。ここで、何を…。」

「ほらやつぱり怪しいではないか！」

サティはピウニー卿の身体を庇つ。それを見たヴェルレーンの瞳が潜められ、サティを伺つた。途端にサティの頬が染まり、羞恥に視線を逸らす。その視線を見れば、2人が一体ここで何をやつていたか…などはすぐに想像がついた。ヴェルレーンがその表情に気付く、こほんと咳払いする。

「なるほど……、リリーで。」

「あの……それは……。」

言い淀んだサティが、身を翻して今度はヴェルーレーンへと近づいた。ふわりとサティの髪が揺れ、ヴェルーレーンの瞳を覗き込む。綺麗で大きなグリーンの瞳、さらさらとした髪の毛。それが視界に入り、ヴェルーレーンは、

「ならばどの所属の、なんといつ人間……くしょー——！」

ヴェルーレーンは再び親父のようなくしゃみをする。再びアタックを受けたサティは、一瞬嫌そうな顔を浮かべそうになつたが、からうじて堪えてもう一步踏み込む。

「騎士様……どうか……。」

「わ、わかった、ちょっと待つて、君、猫か何か……ふえ……ふえくしょん……はくしょん……」

眼前のくしゃみに怯むことなく攻め入るサティ。ヴェルーレーンはじりじりと後退した。

「さ、君猫か何か飼つて……ぼ、僕は猫アレルギーで……へぶしつ、ふえくしつ！」

いよいよヴェルーレーンのくしゃみが止まらなくなつた。ヴェルーレーンという男。実は猫アレルギーなのである。この大陸には、猫の毛を吸い込むとくしゃみが止まらなくなる……という症状があつた。実際に珍しいその症状は「猫アレルギー」と呼ばれている。防ぐには、

猫の毛を吸い込まないようにするほか、今のところは手立てが無い。そんなヴェルレーンとサティの間に、パヴェニアが割って入った。

「あー、ともかく、ヴェルレーン。ここは私がきちんと話を聞いて、始末しておく。お前は早く訓練の元に戻れ。」

「ベクションつ、ふぇくしょつ…、団長、しつ、しかし猫は…」

「お前、猫アレルギーなのに私を探しに来たのか。無謀にもほどがあるだ。猫を探す途中で2人を見つけたのだ、分かるだろう。その調子ではお前にここは無理だ。帰つたら報告してやる。行け、命令だ。」

「だ。だんちよ…。」

バタン。

ヴェルレーンのくしゃみを避けるように、扉は閉ざされた。

* * *

なんとかヴェルレーンを部屋から追い出したパヴェニアは、これからどうすべきか思案した。2人を匿うのに物置部屋では不便すぎる。顔を隠してなんとか移動してもらわなければ。そう思いながら2人を振り返ると、不愉快そうに顔を拭っているサティの様子が視界に入り、パヴェニアははたと気が付く。

忘れかけていた大事なことを、今思い出した。

そういうえば、サティのことをさつき自分は撫でたいとか、言つていなかつたか。

パヴェニーアはピウニー卿をちらりと伺う。既に兜を脱いでいるピウニー卿は、サティのことを心配そうに見つめながら何事かを話しかけていた。袖の端でサティの頬を拭つてやろうとして、「…大丈夫か?」「大丈夫だつてば」などという攻防を繰り返している。漂う雰囲気を見れば、サティという女性を、兄が大切にしていることが一目で分かつた。その女性を、いくら猫の姿だつたからといって「撫でたい」発言…したか? 気のせい?…いや、気のせいではない。そうだ、気のせいではなかつた! 確かにあの猫、あのネズミ…ああ、あの毛皮! お腹のふかふか! …せめて兄のでいい、撫で…

ダメだ。嫌な予感しかしない。

だが今は、ヴェルレーンのざわざに紛れて忘れていくようだ。パヴェニーアは2人から視線を外し、小さく安堵の溜息をついた。ヴェルレーンはあのような男だが、今回は感謝せねばならない。いいところに来てくれた。おかげでなんとか誤魔化せそうだ。

「パヴェニーア。」

ピウニー卿の声が低く響く。びくづく…と、パヴェニーアの身体が上に上がる。

「はつ。はいいつ

「先ほどまで、サティのことを撫でたい…などと言つていたな?」

誤魔化せてなかつた。

恐る恐る振り向くと、今は可愛いネズミの姿ではない、1年ぶりに見る兄の堂々とした姿がそこにあつた。改めてみるその兄は、真顔で自分のことを見つめている。1年ぶりに会つた弟を見る兄の目とはとても思えない。しかも声が低い。兄の声が低くなつたときは大概怖い。恐ろしい。絶対夢に出る。後ろに控えるサティが、「あの、ピウニー、それあんまり蒸し返さないで…」などと言いながらピウニー卿の袖を引っ張つていたが、彼はまったく聞いていなかつた。

白翼騎士団団長パヴローニー・アルザスは、久々に命の危険を感じた。

説教する姿もネズミの姿だつたらよかつたのに…と遠い目をしていたら、さらに説教時間が長くなつたのは言うまでもない。「もう、ピウニーいいからそれ以上撫でるとか肉球触りたいとか言わないで！」…と、サティがピウニー卿の口を塞ぐまでそれは続いた。

「それで…、先ほどの猫がサティ殿で、ネズミが…ピウニー兄だと？」

物置部屋から程近い、今は使われていない侍女部屋にピウニー卿とサティは通された。誰にも見つからずに移動できる距離で、落ち着いて話が出来る場所がここだつたのだ。2人を前にして腕を組んでいるのはペルセニーア。猫を探している途中、兄のパヴェニーアに呼び出された。そこでペルセニーアが見たのは、1年前に死んだと思つていた兄だ。薄い色合いの金髪に精悍な顔。濃いこげ茶の瞳はあの頃と変わらず頑固そうで、一見すると誰も寄せ付けない硬派な雰囲気も相変わらずだった。そして、その兄が底うように身を置く1人の女性。サティと名乗るその人は、魔法使いだという。

パヴェニーアとペルセニーアは、ピウニー卿とサティの事情を聞かされた。なぜ、呪いが解けたのか…という点についてははつきりと教えてくれなかつたが、ともかく2人が人間と獣の姿を行つたりきたりしていることは、本当のようだ。

ピウニー卿と魔竜の戦いはペルセニーアとパヴェニーアの記憶に新しい。何よりも2人がもつとも尊敬していた兄の、最期だつたから。

共に竜を倒しに行き、生きて帰ってきた仲間から話は聞いた。ピウニー卿は竜の呪いを受け止めた後、剣以外の装備を残して消えたといふ。だが、死体の1つも無く塵になつて消えた…などと言われ、誰がその死を信じることが出来るだろう。それでも葬儀を出し、「竜殺しの騎士」という2つ名を冠し、国王からもいくつかの勳章や名誉ある言葉を頂いて、やつと兄は帰つてこないのだという実感が

沸いた。死んだのではない、帰つてこないのだらうといつ奇妙な諦めだつた。

それなのに、今、その兄が田の前に立つ。しかも、しばらくするとネズミに戻つてしまふといふのだ。…そんな話、今すぐに信じじろといつのが無理だつた。兄が生きていることが…ではない、兄がネズミに戻つてしまふことが…だ。

それに気がかりなのはサティのことだつた。話によれば、オリアーブの魔法研究所で、死靈使いがサティに対しても戦いを挑んだといつ。だが、そのような事件は聞いたことが無い。魔法師団とペルセニアの所属する黒翼騎士団は協力関係にある。魔法師団の後衛施設ともいえる魔法研究所でそれだけの事件があれば、騎士団に知られなどといふことはまず無い。そもそも死靈魔法自体が禁じられた、魔法使いにとつても恥じるべき、そして忌むべき魔法なのだ。その死靈魔法が国内で研究されていた…となれば、それは由々しき事態だ。

サティは理の賢者の弟子だといつ。理の賢者は、オリアーブに3人いる賢者の一人。オリアーブ国王とも親密な関係だが、どれほど請われても国のために自らが働くということはなかつた。ただ、魔法師団との関係は悪くなく、研究の要請などがあれば弟子が引き受ける場合もある。サティといふ名前の弟子が、魔法師団に協力したことがあつただろうか。調べてみる必要がある…と、ペルセニアは思つた。

いずれにしても…。

ペルセニアは仲良くサンディッチを食べているピューー卿とサティを見た。

あと数時間もすれば2人は猫とネズミに変わる。時間的には、夜半過ぎだ。ギリギリ日が変わる頃だろう。人間のまま王宮内を歩くわけにもいかないので、ペルセーラーとパヴェーラーは残業と称して王宮に残り、日が変わる前に2人を連れて裏口から帰宅する算段だつた。ただそうすれば、サティを猫をジョシュに会わせることは出来ない。ジョシュにピウニー卿の事情を話すわけにはいかないが、猫が見つからなかつたと報告するのは気が引けた。

「サティ殿」。あと少しすれば、貴方は猫に戻られるのですよね。

「はい。」

「お願いしたい」とが…あるのですが。」

「ジョシュ殿の元に戻れ、といつのですね。」

「…命令ではありません。お願いです。それに、戻るのではなく、少し姿を見せるだけでかまいません。」

サティの言葉にペルセーラーは申し訳無さそうに顔を上げた。

「今の話によればサティ殿は…、セラフィーナ嬢が連れてきたのでしょ?」

サティの表情が、何と言つていいのか分からな「よ」うな表情になる。ペルセーラーは続けた。

「セラフィーナ嬢は責任を感じて、ひどく氣落ちされて帰宅なさいました。ジョシュ殿が必ず見つけるから…とお引き受けになつて。

見つからなかつたとしても咎めはしないでしょ「うが…。」

ペルセニーアはジョシュの護衛騎士だ。ジョシュが懇意にしているヴィルレー公爵令嬢、セラフィーナとも仲がよい。彼女にとつて、セラフィーナは歳の離れた妹のような存在であり、ジョシュの大好きな姫君であり、小さな友達でもあつた。その小さな姫が悲しむのは忍びない。だが、この自分の願いが随分身勝手な我慢であることも分かつてはいた。2人は動物になつてしまえば非力な猫とネズミなのだ。誰の目にも触れないよう、ひつそりと王宮を出るのが一番安全に決まっている。

「わかりました。」

「おい、サティ…！」

断られても当たり前だと思つていたペルセニーアは、あつさりとしたサティの返答に驚いて視線を向けた。ピューイー卿がサティの隣で非難めいた声を上げている。

「本当に構わないのですか？」

「顔を見せるだけならば、大丈夫だと思います。」

「いや、待て、サティ。見つかつたといふことになれば、ヴィルレー公爵のところにも言い訳をせねばなるまい。びつするのだ。」

「でも見つからなかつたって言つたら、セラフィーナが心配すると思つ。王子を通さずに公爵のところに直接話に行くのもおかしいでしょ？」「

ショボンとしたサティに、ピューラー卿が明らかに動搖する。

「いや、それは分かる、分かるが……、ヴィルレー公爵にはどういつつのだ。」

「……それならば私が、お三方に話します。実は元々アルザス家で保護していた猫だとでも言えば……。」

「我らは公爵家の馬車に乗つてきたところを見られている。……そんな言い訳が通用するだらうか。」

3人は考え込んだ。サティがため息をつく。

「……とにかく、王太子様に1回会つてからなら問題ないでしょ、ピューラー。」

「だが……。」

ピューラー卿がサティに向かつて、厳しく眉を潜めた。ペルセニアの眼から見ると、サティとピューラー卿は旅の仲間という以上の、特別な関係に見える。

「……それならば私も……。」

「では兄上も一緒に来てくださいてかまいません。ネズミ一匹ぐらいいならば、隠すことは出来るでしょうから。その代わり姿を現さないようにしてくださいね。」

「うううむ。」

いすれにせよ、ジョシュは猫について何らかの報告があるまで起きている…と言つたのだ。いつもは聞き分けのよいジョシュがこのようないいを言つのは珍しい。よほどセラフィーナの事が心配なのだろつ。

「ピウ、大丈夫だつて。」

サティが若干うんざりと言つた。2人の様子を見て、ペルセニーアとパヴェニーアは眼を丸くする。ピュニーアをピュニー、ピュニー卿と呼ぶ人は多いが、ピウと略すのは初めて見た。少し可笑しい気持ちになる。アルザス家でもっとも強い男、父と唯一互角に剣を合わせる男。優しいけれど、武術に関しては常に厳しかった兄が、サティという女性にこのようにおろおろさせられているのを見るのは、不謹慎ながらも愉快だ。

「サティ殿。」

ペルセニーアはサティに向き直ると、その手を取つて丁寧に騎士の礼を取つた。その凜々しい様子に、サティは少し首を傾げる。気遣わしげにサティを見返す瞳は琥珀色でピュニー卿よりも少し色が薄かつたが、意志の強そうなところは似ているような気がした。

「お心遣い感謝します。」

「いいえ、大丈夫です。」

受け負つたサティの言葉に、まだ申し訳なさそうな表情を浮かべたまま静かに頷いて、ペルセニーアはパヴェニーアを振り返つた。

「兄上は執務室で待つていてください。お2人は私が。」

「ああ。」

本当はパヴェニーアが2人を連れて行きたかったが、絶対に全員に止められるだろう。パヴェニーアは涙を飲んでその役割を自重した。

「貴方方が猫かネズミの姿に戻るであろう時間に、私達は再び来ます。」

「あ、ああ。」

まだ全然納得していないピウニー卿は曖昧に頷いた。パヴェニーアもペルセニーアも騎士としてまだ仕事が残っている。残業するという旨を部下に伝えなければならないし、パヴェニーアはジョシュを伴つはずだった訓練に立ち会つていないので。報告も受けなければならぬ。

「サティ殿、施錠の魔法をお願いできますか？」

「分かりました。開くときは『グレン』で。」

「了解しました。」

「ではまた後で…。」とパヴェニーアとペルセニーアは侍女部屋を辞した。2人が部屋を出ると、ガチャリと音がして施錠されたのが分かつた。

「兄上、よかつたのですか？…2人が戻るまで一緒に居なくとも。」

「何がだ。」

ペルセニーアは少しだけ言葉を濁す。

「その…、私は2人が言葉を解する猫とネズミだつた姿を見たわけではありません。」

「信じられない、と…」

「あれははつきりと、兄上だったではありませんか。」

「ネズミだつた兄上を最初に見せられた、俺の方が信じられんかつたよ。」

「それは…。」

確かにそつかもしれない。ペルセニーアは静かに瞳を伏せる。そんなペルセニーアから視線を外し、パヴェニーアも考え込んだ。

パヴェニーアにとつてピウニーアは乗り越えられない強い兄だ。もちろん、パヴェニーアとてアルザス家の男。若くして白翼騎士団団長という身分を頂き、アルザス家の当主になっている。ピウニー卿という常に比較される「竜殺しの騎士」を兄に持ちながら、アルザス伯爵家といつ武門の名家を支えるのは相当なプレッシャーだ。

ピウニー卿は、魔竜を倒す旅に出る事が決まって、すぐに家督をパヴェニーアに譲る血を父親に申し出た。それは魔竜という敵がいかに強大で、それに立ち向かう兄がどれほどの覚悟を決めていたのかが分かるものだった。その覚悟を受けてパヴェニーアは家督を継ぎ、

それに伴つて父は夫婦で隠居している。もちろん、ひとりアルザス家を支えることになつたパヴェニーアは戸惑つた。だが、それでもパヴェニーアが当主として立つたのは、兄に認められたいがためだつた。いや、違う。兄に認められた証だと考えたからだ。

その兄がネズミになつて帰つてきた。戸惑わないわけがないのだ。
ネズミ。そう…ネズミ。

…パヴェニーアは、再び恋する乙女のような顔になつて、ほう…と溜息をついた。

「まあ、ネズミになつた兄上を見れば分かる…。」

パヴェニーアがぽつりと言つた。

「…何がですか？」

胡散臭そうにペルセニーアがパヴェニーアを伺う。パヴェニーアは厳つい顔に全く似合わない、うつとりとした瞳で言つた。

「あの愛くるしさに。」

ペルセニーアが若干冷たい目でパヴェニーアを見た。

* * *

侍女部屋で特にすることなく、ピウニー卿とサティは寝台の端に2人並んで座つていた。いつも人間から猫やネズミに戻るのは唐突だ。今までの経験から、大人しくしておいたほうがいい…というのは分かつっていた。

「サティ…本当に大丈夫か。すぐにアルザス家に戻れば、王子に会わなくとも済む。」

「何をそんなに心配してんの。」

「ジョシュ殿がサティのこと気に入つて、ずっと側に置くと言つたらどうするのだ。」

「そんな我儘は言つたりに無いでしょ。」

「分からぬだらう。猫になつたサティは…」

「何?」

突然言葉を止めたピウニー卿を、サティはちらりと伺つ。さつきからピウニー卿はずつとこの調子なのだ。それにしても猫になつたサティは、なんだというのだらう。

「猫になつた私は、何?」

言葉に詰まつたピウニー卿に、追い討ちをかけるようにサティは問いを重ねる。今は夜で、念のために明かりの魔法は控えている。明かりといえば、僅かに窓から零れる星明り程度だ。

「猫になつたサティは…その、愛らしげだらう…。」

「…………。」

その言葉を聞いて、サティはなぜか、はあ…とため息をついた。

「ネズミのペルカーダって似たようなもんでしょ?」

「ちうこつ意味ではない!」

「じゃあ、どうこつ意味なの。」

「それは、サティが…。」

ピウニー卿は再び言葉に詰まつた。サティはそれを聞きながら、全く別の話題を口にした。

「ねえ、ピウニー。」

「なんだ。」

「弟さんはまあ…なんかちょっとアレだけど、妹さんとか、いい人ね。」

サティはパヴニー・アとペルセニアの2人を思い出しながら語った。髪の色合にも瞳の色合にも、少しずつ違うがよく似ている。何よりも3人に共通するのは、凜々しい、頑固そうな瞳だ。血縁者というものがいないサティには、それがとても新鮮に見える。

「ん?」

「しかも、ピウニー、『兄上』って呼ばれてた。」

ピウニー卿が「兄上」と呼ばれていたのを思い出すとおかしくなつて小さく笑つた。自分がいつも「ピウニー」と呼んでいる人が、「

兄上」と呼ばれているのを見ると、なんだか自分には馴染みの無い単語でくすぐったい気持ちがしたのだ。

「どうした？」

「なんでもない。兄弟っぽいと羨ましいなって。」

サティは多分22、3歳くらいだ。教会で見つけられたときを1歳と数えて、そのくらい。特に子供という年齢ではない。それなのに、兄弟が羨ましいなどといふ、子供のような言葉を口にしてしまつのは、今が多分夜だからだ。少しだけ物憂い気分になつてしまつ。

「サティは、…兄弟などは居ないのか？」

「あー…、妹みたいなのは居たけど…。」

「妹みたい？」

「妹弟子？…家族とかそういうのは元々居なくて、…その、ずっと師匠と師匠の家族と一緒に過ごしてたから…。」

なんとなく言い難そうな口調で、サティが隣で身じろぎした気配をピカーン一瞬は感じる。

「サティ…。」

「あの、別にやうじいわけじゃなく、ビックリのかなつて思つただけで…。」

「ああ。」

そういえば、ピウニー卿はサティの身の上話を聞いたことが無かつた。理の賢者…という高名な賢者に弟子入りするほどの女性だ。まつたく紆余曲折を経ていないわけではないだろう。深く聞くのは躊躇われたが、今はただ、隣で物思いにふけっているサティの横顔が、僅かに寂しそうで目が離せなかつた。夜目にもそれと分かるほど、2人の距離は近い。ピウニー卿は、思わずサティの頬に触れた。触れた頬はピウニー卿の手にしつとりと優しく、いつまでも触れていたかつた。そして、そう思つてしまふ自分の気持ちを自覚しながら、ピウニー卿は身を寄せる。

「ピウニー？」

「サティ…」こっちを向いてくれ。

「…え。」

急に吐息交じりの低い声が耳元で聞こえ、大きな手が頬に当てられて引き寄せられる。突然の艶めいた雰囲気に、サティの顔が上気したように赤くなる。夜だから赤くなつたなどと分からぬだろうが、熱は伝わるかもしれない。しかも、ピウニー卿の声で（人の姿で）囁かれると、魔力に絡められたようにサティは動けなくなつた。裸で人間に戻つたときですらこんな風に動けなくなることは無いし、悪態だつて付ける。それなのに、服を着ている今、動けなくなる自分の身体は一体どうしてしまつたのだろう。

「ね、待つて、ピウ…ちょっと、と、」

「…サティ、俺は…。」

何故かサティの心臓が跳ね上がり僅かな抵抗も出来なくなつた。ピウニー卿がサティの直ぐ側にもう片方の手を付く。ギシ…と腰掛けている寝台がきしみ、熱い吐息が感じられるほど、ピウニー卿の顔が近付いた。頬を触れていた大きな手が、サティの首筋をなぞるようになじに回される。その感触に思わずサティから溜息が零れ、支えられた手の力で逃げることも敵わない。今にも唇が触れてしまつ。

だがしかし、唇が触れる代わりにピウニー卿の身体はサティの猫の体に沈み込み、サティは自分の身体に覚えのある重みがかかつたのを感じた。2人の上に、着る者を失った洋服がはらりと掛かる。

「くそつ…またか、またこのパターンか！ 全く同じではないか、呪いかこれが！ 呪いでなければ納得できん！」

ピウニー卿が騎士らしからぬ独り言をぶつぶつ言いながら、サティの喉元で悔しげにもぞもぞ動いている。

サティは喉元で動くピウニー卿の体温を感じながら、ホツとしたような切ないような、なんともいえない気分になつた。

ジョシュの元に猫が戻ってきたのは、日が変わる直前だった。侍女や護衛達に窘められたが、ジョシュは起きて待っていた。ペルセニアは見つからず見つからなくても必ず報告に来るはずだ。夜着に着替え、ソファで頬杖を突いて考えるのはセラフイーナのことだつた。

まったく。どうしてあんな無茶をしたのだろう。いくらジョシュが小さい生き物が飼つてみたいと言つていたとしても、セラフイーナらしくない行動だつた。

ジョシュの母は今、懷妊している。ジョシュが生まれてから12年。待望の第2子だ。つまり、弟か妹が生まれるのだ。ジョシュとて12歳で、もう王太子としての教育も始まっており、それがどういうことかは分かつていた。だが、不安も大きい。生まれる子が弟でも妹でも、可愛がりたい。守りたい。でも、12歳で、病気がちで、魔法も剣もほとんど出来ない自分にできるだろうか。それが不安だつた。今の自分が、王として立てるとはとても思えない。周囲の貴族達も、生まれる子がどちらかによって、対応を変えてくるだろう。ジョシュはまだ12歳、だがもう12歳なのだ。それらへの立ち回りも、うまくやらなければならぬといふのに。

ここにこのところ身体の調子が悪かつたのは、不安が蓄積している結果だと自覚している。ジョシュの体調は、なぜか気持ちの昂ぶりや不安に左右される。ジョシュの調子が悪いときはジョシュの気持ちも沈んでいるのだ。セラフイーナはそれに気付いている。だからかもしれない。彼女があんな無茶をして、小さな生き物を連れてきたのは。

：小さい生き物。グレンと名前をつけていたあの猫。ヴィルレー公爵の商隊に紛れ込んでいた、といつ。出来れば、セラフィーナに返してあげたい。そして、グレンの話をセラフィーナからたくさん聞きたい。ジョシュはそう思っていた。

「コンコン…」と、控えめなノックの音が聞こえて、侍女がペルセーラの来訪を告げた。

＊＊＊＊

サティはペルセーラの腕に抱かれ、ピウニー卿はベルトにつけたサイドバッグに入れられている。

その後、2人が変身したであらう時間きつかりに侍女部屋に迎えに行つたペルセーラの目に入つたのは、星明りにうなだれるネズミの姿とそれを見下ろす猫の姿だった。いや…正直ネズミに詳しいわけではないので、あのときのネズミの背中が果たしてどういう感情だったのかは知る由も無いが…あんなに小さな兄の背中を見たのは初めてだった。

ネズミが言葉を話すという事実、さらにはその声が兄のものであることを認めれば…この小さなネズミが兄だと思わせるを得なかつた。ネズミであつても、この雰囲気と声で「ペルセーラ！」と一喝されれば、「はい、兄上」と答えてしまつ。

（なぜか）うなだれている兄をそつと手ですくつて、ベルトに取り付けたサイドバッグに入つてもらつた。手に触れた毛皮はふわふわと纖細で柔らかく、冷静なペルセーラにも心地よさが理解できる。なるほど…これは、パヴェニーアが冷静でいられなくなるはずだ。

あの兄は、小さい頃から可愛らしいものが好きだった。アルザス家は、武術の強さと礼儀にだけは相当厳しかったが、それさえ守れば個人の趣味には決して煩くなく、自由に育てられた。ペルセニーアは女だからと多くのぬいぐるみや人形を持つていたが、それらのうち、可愛らしいぬいぐるみに関しては、パヴェニーアがいつも恐る恐る撫でていたのをよく覚えている。

ピュニー卿は宫廷における武官としての役割に興味は無く、多くの騎士達を育て王宮を守る仕事ではなく、国を飛び回る職務を選んだ。彼の職務は国王の親衛隊としてある程度の自由を与えられ、國中の魔物を調査する…という、最前線の中でも最も未知なる戦いに晒される危険なものだつた。堅実と言われているアルザス家だが、個人の気質についてはそういう自由で奔放な人間が多い。

とはいへ、兄2人はどちらも真面目で堅物だ。ピュニー卿は国を飛び回り、パヴェニーアは男らしからぬ趣味を持つているが、それだけである。

そんな兄2人を見ながら育つたペルセニーアは、なぜか真面目だけが取柄の性格になってしまった。自分でもつまらぬ性格だな…と思う。こういった性格が災いしてか、縁談も無くは無いものの特別感情を許したいと思う男もおらず、いい歳になつた今でもなんとか未婚のままだ。自分は騎士であるし、継ぐ家があるわけでもなし、未婚のままで忠義を守り、国に仕えて生きるのも悪くない…と思っている。そう思つこと 자체が、つまらぬ性格だと自嘲する。

ペルセニーアはサティを「失礼いたします」…と優しく断りを入れて、そつと抱き上げた。両手で抱えると猫だから当たり前だが、軽く温かい。

「疲れませんか？」

「大丈夫です。」

「疲れたら、言ってくださいね。」

腕の中のサティを見下ろして、気遣わしげに首を傾げた。サティが腕の中で自分を見上げ、「大丈夫です。」と答えれば…確かに頭を撫でたくなる。ペルセニーアは小さく笑った。そして思う。

ペルセニーアでさえ頭を撫でたくなる猫のサティ。だが、サティを守りたいと一番思っているであろう兄は、今は非力なネズミだ。正義感が強い騎士が、今は守るべきものを持っていたとして、だがその姿はネズミ。騎士としてその胸中は…。

ペルセニーアは2人に心から元に戻つてほしいと願わずにはいられなかつた。

* * *

「夜分までかかり申し訳ありません、ジョシュ殿下。」

「かまわない。我慢を言ってすまなかつた。見つかつたようだね。」

「はい。」

控えているペルセニーアをソファに座るよう促して、ジョシュも向かいに座つた。ジョシュは真面目なこの護衛騎士が、誰よりも優しく、誰よりも周囲に細やかに気を配つていることを知つていて。その優しさに甘えて、見つかるまで待機する…と言つた自分が少し後

ろめたい。

「ジョシュ殿、その猫のことですが…。」

「ペルセニーア…、この猫は…。」

「はい。セラファイーナ嬢が連れてきたのですね。」

「知っていたの。」

「なんとなく、ですが。」

「そうか…。セラファイーナが次に来るまで、僕が預かっていてもかまわないかな。」

ジョシュがそう言った瞬間、びっくりとサティが震えた。手に伝わってきたその反応に、ジョシュは猫の顔を覗き込む。苦笑して、少し寂しげに指で喉に触れた。

「早く、セラファイーナのところへ帰りたい…？」

「ひづり…。」

ジョシュの指が触れたとき、サティが低く唸った。ペルセニーアはその声色の変化に気付き怪訝そうにサティを見下ろしたが、話しかけるわけにもいかず、ジョシュに視線を移す。

「ジョシュ殿…。この猫ですが、他に飼い主がいるのではないかせんか？」

「ペルセもやつれつ？」

「ええ。… よければ、アルザス家で預かり飼い主を探したいのですが…。」

「それならば、ヴィルレー公爵もそのように手配していると言つていたよ。」

「ヴィルレー公爵にもお話をされたのですか？」

「フイーナがね。」

ジョシュは、正直にヴィルレー公爵に猫を連れてきたことを打ち明けたときの、セラフイーナの様子を思い出しながら小さく笑つた。

「なれば、ヴィルレー公爵にお伺いしてみます。」

「うふ。そうしてくれるかい。… 面倒なことになつてしまつてしまない。」

「とんでもございません。」

内心しまつた…と思つてゐるペルセニアには氣付かず、ジョシュはサティの頭を再び撫でた。

「でも、今日は一晩預かってもいいかな？」

「え？」

「え？」

「「いやーー。」

男の声が聞こえた気がして、ジョシュは顔を上げてきょとんとした
周囲を見渡す。

「今、何か聞こえなかつた？ …ちよつとグレンの鳴き声が邪魔で、
よく聞こえなかつたけど…。」

「い、いえ、聞こえませんでしたが、何か？」

「氣のせいかな…。」

ジョシュは首を捻りながら、話を戻す。

「今日だけでいいんだ。セラフィーナが折角連れて来てくれた猫だ
し。…ダメだろ？ か。」

「それは…。」

「しかしだなー。」

「うにゃあああああー。」

またも男の声が聞こえた。ジョシュは再び首をかしげる。

「…やつぱり何か聞こえなかつた？」

「いえ、氣のせいではありませんか？」

「そうかな。」

ジョシュが首を捻っている間に、サティイがふんふんとペルセニーアの脇腹に顔を突っ込んだ。ピウニー卿を入れてある辺りだ。何事か…とペルセニーアが上着を開けようとしたが、はたと気が付き、上着に包むようにサティイを隠した。ペルセニーアが珍しく声を高くる。

「えーーー、それはですね。ジョシュ殿下。侍女の方々がいい顔をなさらないでしよう。陛下の耳にも入るでしょうから後から知ればなんと言われるか分かりませんし…」

「それは大丈夫。父上には僕からきちんと話すよ。」

「それならば…。」

「にや。」

…相談が終わつたのか、サティイが上着の中から顔を出した。一体どのように話がまとまつたのかペルセニーアにも聞き取れなかつたが、何かしらの結論が出たようだ。問題はそれをペルセニーアにどう伝えてくれるか…だ。ペルセニーアが…そしてジョシュが、サティイをじつと注目している。サティイは「にや」と一声鳴いて、とん…とジョシュの座つているソファの上に飛び乗り丸くなつた。その様子にペルセニーアは一瞬だけ瞑目し、ジョシュに頷く。

「それならば、明朝兄と共に迎えに来ます。」

「パヴェニーア団長と?」

「ええ。実はあの兄が…、あんな厳つい顔をして大層猫好きでして。えー、その、猫を気に入りまして。」

「ああ、だから、アルザス家で面倒を見たいと……？」

くすくすとジョシュが笑った。ペルセニーアは澄ましている。「あんな厳つい顔」というが、ジョシュにとつては頼もしい実直な騎士団長だ。剣術を充分に習うことはできていながら、騎士の心得を教えてもらつたことが幾度かあつた。

「分かつた。パヴェニーア団長が来たら、通すように手配しておくよ。」

「ありがとうございます。」

ペルセニーアがほつとしたようにジョシュに頷いた。…顔を引き締めて敬礼すると、ちらりとサティに眼を向けた。サティはグリーンの瞳でペルセニーアの琥珀色の瞳を見返した。小さく頷き、尻尾をぱたんと揺らす。

* * * *

一晩一緒に居たい…と言つたのは、やはり猫がとても可愛かつたからだ。一度触れた温かい体温は手に心地よく、離れ難かつた。毛が付いてしまうと侍女がいい顔をしないだろうから、ジョシュは室内にいくつか置いてある大き目のタオルを枕元に敷いて、そこに猫を置いた。頭をそつと撫でて、自分も寝台に潜り込む。じつと猫を見つめていると、ぱたんぱたんと尻尾が揺れた。ぽんぽんと自分を寝付かせようとしているかのように、長い尻尾ですぐ近くのシーツを叩いている。思わず笑つて、背中を撫でると、猫は、くか…と欠伸

をした。今度は少し近づいたジョシュの肩を、尻尾で叩き始めた。その尻尾の揺れを見ていると、ジョシュもだんだんと眠くなつてくれる。そして、いつの間にか、眠りてしまったのだ。

ジョシュの皿が覚めたのは、空が少し白み始めたときだった。

「……あー……なんかやつかご」とに元に巻き込まれそうな気がする……。

寝台の下からそんな女の声が聞こえてきたのだ。寝台でビクリと身体が震える。硬直していると、すとんと寝台が揺れた。ジョシュの開いた瞳と、猫の綺麗なグリーンの瞳が…パチリと合づ。途端に猫の頭の毛がふおおおおと逆立ち、瞳孔全開で、ジョシュを見つめていた。

「……今の、君かい……？」

ジョシュの驚いたような声に、猫の耳がぴっとひくつく返った。

「いや……いやーん……。」

「えーっと……君だね？」

ばれた。

* * *

サティがジョシュの下に残つたのは、気になることがあつたからだ。

サティは、ペルセーラーのマントに隠れてピュー卿に「じめん、一晩だけ殿下のところに行く。」…と伝えたのだ。当然、ピュー

卿は猛烈に反対した。だが、「ちょっと気になることがある。」と言つて聞かなかつた。さすがに今回はピウニー卿は一緒に無理だ。姿を現すなとペルセニーアから念を押されていりし、上手く隠れることが出来たとしても、その後気付かれずに脱出できるかどうかは微妙なところだ。

サティは、無理を押しても少し調べてみたいことがあつた。ジョシユが寂しげにサティの喉下に触れたときに、奇妙な魔力の流れを感じたのだ。なぜか、ジョシユから、魔力を無理矢理押し込めて歪めているような…そんな気配がした。もしかしたら、ジョシユの体調が不安定なのはこの力の流れのせいなのではないか…そんな気がしたのだ。

サティは魔法使いだ。こうした魔力の揺れや歪みにはやはり興味があつた。それがジョシユの体調に影響しているとなれば、なおさらだ。だから、ピウニー卿に無理を言つた。からず明日には戻るから…と言つて、半ば無理矢理残つたのだ。

通常、魔力というのはどの人間にも宿つてゐる。だが、その量は人によつて様々だ。もちろん、血統などによつても左右される。量が多ければ魔法使いに向く…と一般的には言われているが、基本的には素質は量だけとは限らない。魔法はさまざまな系統に分かれているが、魔力も系統ごとに得手・不得手がある。たとえば、ピウニー卿は剣を媒体とした破壊魔法は使えるが、他の魔法系統は全く使うことができない。サティは身に宿る魔力が人よりも多く、物理的に使いこなせる系統が多方面に向いている。ただし、本来はサティのように多くの系統に向いた魔力の方が、珍しい。

サティのように魔力を豊富に持つ人間は、バランスを崩しやすい。満ちたコップを揺らせばすぐに水が零れてしまうのと同じで、こう

した魔法使いは、魔力を体内から零さないようにバランスを取りながら生活する必要がある。もちろん小さい頃からそれを訓練し、サティも息を吐くように魔力の均衡を保っている。魔法使いが杖などの安定した魔力の媒体を持つのは、そういう意味でも必須なのだ。

幼い頃に魔力を上手く発動することが出来ず、身の中に無駄に魔力を溜め込んだり、不意に揺らされて壊れたり…ということは多い。もつとも、それほどの魔力の持ち主は滅多に生まれることは無い。それなりの魔法使いの系統に、たまに生まれるかな…という程度だ。だからこそ、ジョシュにサティが感じている魔力の歪な流れは、速く対処しなければならないとサティを焦らせるには充分だった。

ただ、ジョシュの魔力の流れは、どこかおかしい。別のところからコントロールされ、押さえつけられているような感覚だ。どこからか…。サティは、自分の身体に3分の1だけ戻ってきている魔力に集中した。ジョシュの魔力が歪められている圧力…寝台の下。そう感じたサティは、ジョシュを起こさないようにそっと床に下りた。猫の小さな身体で寝台の下に潜り込む。

一番弱い光の呪文を唱えて、寝台の下を覗く。

…サティがそこに見たのは、ジョシュの魔力が出来る限り発動しないように封じ込める複雑な術式だった。

「もしかして、寝台の下を見た?」

ジョシュが身体を起こし、サティに向かって首を傾げた。グリーンの瞳の瞳孔が開き、毛が逆立つ。尻尾が膨らみ、耳が裏返った。その様子を見て、くすくすとジョシュは笑う。ふ…と、ジョシュの瞳に12歳らしからぬ、どこか達観した光が揺らめいた。

「…誰にも言わないで?…グレン。寝台の下を見たのでしょうか。…魔力を封じる、魔法陣。」

「あ、あれは。」

サティが觀念したよつて口を開いた。

「うふ。」

その声を聞いて、ジョシュは満足気に頷く。

「君は、この魔法陣を書いた人?」

ジョシュの瞳が、…悲しそうに沈んだ。その瞳を見て、サティは慌てて頭を振る。

「違います、ジョシュ殿下。」

「本当?」

「本当です。…ジョシュ殿、殿下はあれがどのよつなものか…ご存知なのですか。」

「うん。…少しだけ、こっそり勉強したから。」

ジョシュは知っていた。幼い頃から、自分の身体を巡る特殊な力。自分の体内にある、不思議な力が「魔力」というものであること。その魔力が、魔法使いたちによってどのように使われているかということ。とても幼い頃だったが、理の賢者という人に一度だけ習つたことがあったからだ。理の賢者はすぐに王宮から居なくなってしまったため、その力の使い方まで学ぶことは出来なかつた。…そして、学ぶことも許されなかつた。魔力を扱うという力の流れを認識すると同時に、ジョシュは身体を壊したのだ。6歳の頃、ジョシュは初めて倒れた。その後は、魔力を自分でコントロールしようとすると無理矢理引き剥がされるような感覚に陥るよつになつた。そのせいで、眩暈を覚えたり熱を出したりしたのだ。

魔力を意識できるようになつた人間は、自身の魔力の系統によつては魔力の流れを知ることができる。ジョシュは部屋の1点から自分を押さえる特殊な力の流れに気付き、寝台の下に潜つたのだ。そして気付いた。自分の魔力を抑える為に、記述された魔法陣の存在。最初はもちろんそれがどういったものかは分からなかつた。だが、図書室などで独学で魔法語を勉強をするうちに、なんとなくだが、その内容がどういったものかが分かるよつになつた。あくまでも独学だ。詳細なところまでは分からない。ただ、自分の魔力を封じ込め、時折揺らしている。そういうた内容だつた。

最初は正体の分からぬ魔法陣が怖くて、その効果が分かつたときにはそれが知れたときに宫廷に及ぶ効果を図りかねて、…ジョシュはずつと黙つていた。父にも、母にも、医者にも、誰にも言つたこ

とは無い。王宮の人達は、皆、自分が6歳の頃に体調を壊し、原因不明の熱や眩暈で体が弱いと思っているはずだ。

そんなジョシュの見解にサティは内心舌を巻いた。確かにジョシュの認識している通りだ。あの術式は恐らく術者のオリジナルで、ジョシュのために組んだものだ。サティも一見しただけだったが、ジョシュの魔力に合わせ、ジョシュ自身の魔力を押さえ、揺らすように組まれていることが分かつた。範囲は王宮全体を薄く覆う広いもので、そして、恐らくその目的は。

「ジョシュ殿へ。」

「うん。」

「あの術式の目的はお分かりですか？」

「……いや……何をしているかは分かつたけれど、目的までは分からない。グレン、君には分かるの？」

サティには…分かつた。あの術式の目的は、ジョシュの身体を壊さないようにしているのだ。ジョシュの魔力の発動を抑え、発動を抑えることによって偏つてしまふ魔力を時折揺らして分散させる。その度に体調は悪くなるだろうが、ジョシュは魔力の暴発によって死ぬことは決してないだろ？…恐らくそういう目的だ。サティも幼い頃にそういう類の術を施されていた時期があった。だから分かる。

魔力が強くそれを正常に操ることができなければ、子供の頃は、魔力を暴発させたり、体力ごと一気に枯渇させたりして、命を落としてしまうことがある。だから、命の危険があるほどの魔力の大きな子供が生まれれば、必ず魔法使いの手に預けられ処置が施されるの

だ。小さい頃に一度魔力を抑え、徐々にそれを緩めていくのが定石だ。ジョシュは、魔力の暴発によつて万が一が起こらないように、綿密な魔方陣が練られていた。だが、ずっとこのままでは、ジョシュは魔力の使い方を知ることの無いまま病床で過ぐさなければならぬだろう。一体誰が何の目的で、このような術を施したのか。さまざまな可能性が考えられる。ジョシュに大きな魔力を持つほしくない人、ずっと病気のままにしておきたい人、あるいは、

ジョシュに絶対に、万が一が起こつてほしくない人。

サティは頭を振つた。ジョシュはどこから見ても利発的な王子だ。ちゃんとした教育を施せば、このまま立派な王太子になれるだろう。だが、魔力を抑えられている。放つておいても彼は死ぬことは無い。だが、それは王太子として必要な力と身体を、持てないことを意味していた。

「ジョシュ殿。」

「うん。」

「サティ。」

「私の名前はサティといいます。」

サティ。…ジョシュが、口の中で何度も反芻して、嬉しそうに微笑む。

「そうか、サティ。」

「私は、理の賢者の弟子の、サティです。」

ジョシュの瞳が大きく見開かれた。

＊＊＊＊

翌朝、ジョシュの部屋にペルセニーアとパヴェニーアがやつてきた。サティとすっかり仲良くなつたジョシュが、応対する。

「おはよう。ペルセニーアもパヴェニーア団長も、昨日はありがとうございました。」

ペルセニーアとパヴェニーアが敬礼を施す。その様子にジョシュが頷いて、椅子を勧めた。二人は腰を下ろす。ジョシュはサティの頭を撫でながら、切り出した。

「「」の猫のことなんだけど……。」

「ジョシュ殿、あの。」

「うん。ペルセ、大丈夫。」

何か言いかけたアルザス家の2人を遮つて、ジョシュは頷いた。

「「」の猫は、サティといつて理の賢者のところの猫だそうだ。」

「…は？…。は？」

思わずペルセニーアとパヴェニーアはサティを見た。サティはそ知

らぬ風を装つて、尻尾をぱたぱたと揺らしている。

「理の賢者の使いで杖の賢者のところに出向くはずが、道に迷つてしまつたらしい。」

「…は、あ。」

「僕が王宮の人間を動かすわけにはいかないから、アルザス家で杖の賢者のところまで送り届けてもらえないだろつか。」

「それは、かまいませんが。」

「それから、ペルセニーア、パヴェニーア団長。」

ジョシュが、低い声で2人の忠義な騎士の名前を呼んだ。その声は12歳の少年の声ではなく、威厳の込められた王太子のもので、思わず2人は背筋を伸ばす。

「猫が迷い込んだことは知れているけれど、理の賢者のことについては、君達2人と僕とサティしか知らない。セラフィーナのこともあるからヴィルレー公爵には話すけれど、…それ以外には他言無用だ。いいね。」

「はっ。」

座したままではあるが、騎士の一礼を施した2人に、王太子の態度を崩してジョシュは微笑んだ。

「ありがとう。ヴィルレー公爵には僕から伝えておく。それで…もしよかつたら、送り出す前にセラフィーナのところに寄つてもうえ

ないかな。」

「恐れ入りますが……殿下、その、猫のことをどうで？」

ペルセニーアの疑問には、微笑んだままジョシュは丘田を睨つた。

「それは秘密。」

「秘密……ですか？」

「うん。ね、サティ。」

サティが顔を挙げ、すりと顔をジョシュに擦り寄せた。

「さあ、サティ。理の賢者によろしく伝えておくれ。」

「いやーん。」

ジョシュがサティから手を離すと、サティは両手を広げたパヴェニアを無視してペルセニーアの膝の上に乗つた。パヴェニアは行き場を失つた両手を落とし、がっくりとうなだれる。

「ありがとうございます、ジョシュ殿。今から少しお暇を頂いても？」

「今日は君達は非番と聞いている。アルザス家に戻つてもらつて構わないよ。ヴィルレー公爵は今日も来る予定だから、サティのことはそのときに伝えておく。」

「分かりました。それでは、失礼いたします。」

アルザス兄妹が立ち上がり、ジョシュに再度敬礼を施した。ペルセニアは片方の腕にサティを抱えている。2人の様子を見てジョシュも立ち上がりて頷く。ジョシュは、ペルセニアが抱き寄せるサティの右前足を取った。

「またね、サティ。」

そうして、ちゅ…と、サティの右前足にキスをした。サティは、ジョシュの腕にすり…と擦り寄る。

「サティ！」

「うおおおおおつふおん！」

突然、低く響く声がサティを呼んだような気がしたが、パヴェニアのやたら大きな咳払いが被る。

「…パヴェニア団長？」

「いえつ、なんでも。」

微妙に怪訝そうなジョシュの表情に、ペルセニアが助け舟を出した。

「兄は、サティのあまりの可愛らしさに平静を失っているようですね。」

「ああ、サティはとっても可愛いものね。」

「ペ、ペルセニーア！」

ジョシュはくすくす笑いながら頷いて、ペルセニーアとサティから一步離れた。ダシにされたパヴェニーアは顔を真つ赤にしながら、ペルセニーアに抗議しようとするが、妹は何食わぬ顔をしていた。

それにもしても。

ピウニー卿は12歳の子供が猫のサティ（の前足）にキスしたくらいで動搖するような男だつただどうか。まこと恋とは人を変えるものだな…と、ペルセニーアは思つたが、言葉にすることはせず、己の身の内に止めておいた。

もつともそれが恋なのか何なのかは、本人に聞いたわけではないから知る由も無いが。

* * *

ピウニー卿はサティを連れて、アルザス家に戻ってきた。

無事連れて帰つた後、パヴェニーアが何に触発されたか、「改めまして、アルザス伯爵パヴェニーアと申します。」と、パヴェニーアがサティの右前足を取ろうとしてピウニー卿にみつちり怒られるという出来事があつたが、概ね無事に移動することが出来た。

あらかじめ、執事と侍女頭、そしてパヴェニーアの妻であるセシリにのみ事情を説明しておき、2人は他の家人の目に触れないように、客人として離れで過ごしていた。1年ぶりのピウニー卿の帰郷はネズミの姿だったため容易には信じてもらえなかつたが、人間に戻つて見せればなんとか信じてもらうことが出来た。執事も侍女頭も泣

いて喜び、なぜかサティも「あのピウニーア様が女性と共に！」などというよく分からぬ歓迎を受けて、久々に人間の姿で一休みすることができたのは幸いだつた。

サティはアルザス家ではもちろん、客人として扱われている。正直こういった場所でどのように過ごせばいいのか分からず戸惑つていたが、パヴェニーアの妻セシルやペルセニーアが何かと世話を焼いてくれるので、暇ということはあまり無かつた。

最初にピウニーア卿とサティ、そしてセシルが顔を合わせたとき、2人は猫とネズミの姿だった。セシルは目を丸くして、「まあ…」と感嘆の声を零す。

「あのピウニーア様がこのような可愛らしい姿でこのような可愛いらしい女性を連れて帰つてくるなんて。」

そして恥らいながら、こう言った。

「あの…お2人にその、触れてもかまいません」と…」

ピウニーア卿の髭がピーンと張り、後ずさる。サティの毛皮がぶわわと逆立つた。セシルは期待に満ちた目でこちらを見ている。その表情を受けたピウニーア卿が困ったように咳払いしていると、不意に頭上が陰つた。

「あー…セシル殿？…むほつ…？」

…なんだ…とピウニーア卿が見上げたと同時に、ぱふ…と暖かな毛皮に包まれた。サティがピウニーア卿の上に乗つかつたのだ。お腹の毛がふかふかしていたため、つぶれたりすることは免れたが、微妙に

苦しい。そして暑い。

「ちひ、サティ、何だ。」

「…。」

ピウー卿が毛皮を搔き分けて喉元から這い出ってきた。すると、サティが前足を組んで顎を置く。完全に出でないようにしてこらしい。どういうつもりかとピウー卿がもぞもぞしていると、そんな2人を見てセシルが笑った。

「まあ…。」

セシルが頷き、サティの頭にそっと触れる。

「サティさん、わたくしとしたことが出すました」と申し上げてしましましたわ。」

「あの…。」

そういうて、そつと身体を低くするとサティに田線を舐ませてくれた。

「もしよければ、」一緒にお茶にしましづ。冷たいお茶をお淹れます。…お義兄様はパヴニー亞に任せた。」

「セシルさん…。」

「はー。」

「あの、失礼なことをして…すみません。」

「まあ。いいのですよ。」ちらりと、不躾なことを申し上げてしまいましたもの。本当に、「めんなさいね。」

ちょっとだけ悪戯っぽく笑ったセシルの表情を見て、サティは前足を組んでピュニー卿を閉じ込めたまま、しょんぼりと耳を寝かせた。なんだかすごく子供っぽいことをしてしまった気がする。「いくら毛皮に触れたい」と言つたとしても、自分の実家に帰ってきたピュニー卿を、その家人から隠してしまつなんて大人気ない。パヴェニアの様子とは違つてセシルはとても控えめだ。動物に触りたいと思う人間はサティだってこれまでたくさん見てきているし、それに擦り寄つて餌を貰うという処世術だつて使つてきた。セシルだって悪気が無かつたわけじゃない、思わず言つてしまつたのだろう。すぐに手を引つ込めてくれたし謝つてもくれた。でも。

でも、ピュニー卿の毛皮が他の女人に撫でられるのは…何故か、なんとなく、嫌だったのだ。

そんなサティの気持ちを汲み取つたのか。それからセシルは何かとサティの世話を焼き、短い期間の内にすっかり仲良くなつた。

ちなみにやつとこ這い出てきたピュニー卿が「サティ、どうかしたのか？」と聞いて「別になんでもない。」…と、つーんと顔を逸られ、訳が分からずあたふたしている様子を見て、セシルの顔はさらに綻んだという。

* * *

その夜。

サティがピュニー卿を誰の目にも触れさせないようにお腹に包みこんだあの様子について、「とても可愛かったわ……」と散々、夫パヴェニーアに自慢し、それを聞いたパヴェニーアが「……それはっ、それは可愛かつただろうな！ 分かる！ 分かるぞセシルよ！」……と力強く同意し、「まあ、あなたならきっと分かってくれると思ってたの！」…とセシルが夫の手を取り、うふふあははと、それはご機嫌だったとか。

アルザス伯爵夫妻は、愛らしいものが好きな夫妻であった。

015・髪を剃れといふことか

ピュニー卿は人の姿に戻つてから、パヴニーーアやペルセーーアに請われて地下の訓練場で剣の手合わせをし、馬の手配、荷造りなどの作業をしていて、サティとの時間はほとんど取れていなかつた。一日のうちの3分の1しか人間に戻れない…というのは存外不便だ。人の姿で在るうちにやつておきたいことはたくさんあるが、それらを全てこなせば大体いい具合に8時間が過ぎてしまう。そんな風に2日程過ごして、そして今、やつと2人きりなれた。家人達は2人に変な気を回して、猫とネズミに戻るまでは離れに近づきませんから…とかなんとか言つている。

ピュニー卿はサティが座つている隣に座つた。

少し伸びた薄い色合いの金髪に、時折剃つてはいるものの、再び伸び始めた無精髭はそのままだ。それでも騎士然としているのはさすがだろう。精悍で頑なそうな表情は変わらずである。

サティは人間に戻つてから、ずっとなにやら魔法陣や魔法語のよくなものを書きとめていた。ジョシュの部屋で見た魔法陣を、頭の中で整理していたのである。大方の事情を聞いているピュニー卿はそれを覗き込んだ。

「理の賢者殿には連絡が取れそつか。」

「呼びかけてはいるよ。多分大丈夫だと思つ。」

ピュニー卿は頷く。王太子の事情については、国王にも話さないで欲しいところのがジョシュの意向だった。とはいへ、ずっとこのま

まにしておくわけには当然行かない。サティは理の賢者に話を通すことを約束し、同時に、ジョシュの身体が心配だったサティは、彼に近しいアルザス家の兄弟にのみ話を打ち明けた。

「解けそうか？…私には魔法は詳しくは分からんが…。」

「そうね。…時間をかければ大丈夫だと思つ。問題は…」

問題は、解いた直後だ。何の手も施さずに解除すれば、急に解放された魔力を制御しきれない危険性がある。特に12歳…ということは、成長に伴い魔力が増加している途中の時期のはずだ。それを制御するのは、慣れるまでジョシュにとつてかなりつらいものになるだろう。

「私も小さい頃に魔力抑制されてたから分かるんだけど…。」

「サティも？」

「うん。」

サティは思い出す。魔力を抑制されている状態で魔力を使う訓練。大きすぎる力に振り回されないように、自身の耐性を強くする訓練。手足を鍛える為に重りを付けて生活するようなものだ。小さい頃はそれがつらかった。

「つらかったけど、魔法使いになりたいと言つたのは自分の癖に、訓練がつらいと思つ自分が一番情けなかつたな…。」

そういうて、サティは苦笑した。

それでもなんとか解いてあげたい。自分の力を持て余す不安を、サティは痛いほどよく分かる。ジョシュは体調を犠牲にして、それを押さえ込んでいる。しかも、一人で事態を抱え込んで、不安でつらいに決まっているのだ。

ピウニー卿がそっとサティの横髪を梳いた。

少しだけ不安げなサティの横顔を見て、ピウニー卿は再び自分の心が疼くのを感じていた。人間に戻ることができるようになつてからではない。サティと過ごすようになつてから、ずっと心が落ち着かないのは、予想以上に自分でももてあまし気味の感情だつた。だが、心地よい。悪くは無い。ピウニー卿はセピア色の髪に手を差し入れ、髪を掛けるように耳をなぞつた。その感触にサティの肩が揺れ、驚いたような表情でこちらを見返した。

「ピウニー？」

「サティ、どうかしたのか？」

「なにが？」

「不安そうな顔をしておつたぞ。」

ピウニー卿の言葉に、サティの瞳が大きくなつた。元々大きな綺麗なグリーンの瞳でピウニー卿を見つめ返し、突然ふい…と瞳を逸らす。頬が僅かに染まつているようだ。そんな風に視線を逸らされると追いかけて、触れたくなる。

「サティ。」

小夜へ加瀬を呼んで、伸ばした手で顔を強引に止められる。「ペペー…、じつ…。」

『ふお――――ふおふおふお。おひおひ、久々じゅうくのひ、サティ！呼びかけてくれとひたのに、わざと出でられると悪かった悪かつた。…おひとひと、これはお邪魔じやつたかの？』

サティの困惑うなづな言葉の途中で、理の賢者が長いお髭を撫でながら薄ぼんやりと現れた。今にもサティに顔を寄せんとしていたピュー卿は、サティの顔を引き寄せた姿勢のおま理の賢者と瞳が合ひ。

「じるへ、じるへじるへじるへ理の賢者殿！」

『せうせう。お久しごつじやのへ、ペペー卿。こやせや、もひひし待つたほつがよこかの。』

「せうですね、あとまじめし待つていただきだけれど…」

「ふーーえつ、そんなことないです、今で大丈夫です。」

『これこれサティや。そんな心にも無ことを叫びひきなごだ。』

「じるへ、心にも無ことひじりとひじりとひじりとひじりとひじり…。」

『あと5分待てと顔に書いて…』

「師匠ー。」

なぜか問答無用で迫つてくるペペー卿を押しやりながら、サティ

は賢者に向かひ合つた。

「師匠、何故いままで何回も呼び出したのに呼応してくれだせりなかつたのですか！？」

『だつて。』

理の賢者は相変わらず、ふおふおふおと笑いながら髪を撫でている。

『古の「ことわざ」にあるじやうづ。人のなんとかの邪魔をするものは馬に蹴られると。』

「なんとかー？ なんとかってなんですか師匠つー。」

『なんとかはなんとかじやよ。のう、ピカーニー卿。』

サティに押しやられたピカーニー卿は、「へつ… 一体誰が私の味方なんだ…！」などと呟いていた。

* * * *

『ふむ… ジョシュ殿下がのう。』

「はい。師匠は！」存知でしたか？』

『わしがジョシュ殿下にお会いしたのは7年ほど前じや。そのときはまだ、魔力もそれほど成長しておらなかつたのじやうづ。上質な魔力じやとは思つとつたが。』

理の賢者はふむ…と何事かを思案していたが、不意にピカーニー卿に

田を向けた。

『アルザス伯爵さじのよつてお考えなのか？』

「理の賢者殿に相談し、一任する…とのこと。それ以上のことはせず、他言も致しません。」

理の賢者の言葉にパウニー卿が答えた。パウニーは今この場に居ないが、伯爵家の意図としてはその通りで間違いない。

『ふおふおふお…肝心なところ任せじやのう。』

相変わらず飄々と笑っている理の賢者だが、ふと真顔に戻つて首を傾げた。

『…サテイや。』

「はい。」

『件の魔法陣をまとめたものは、用意できてるか。』

「うわうわ。」

サティは、先ほどまで纏めていた魔法陣の術式と魔法語を記述した紙を自分の前に持ち上げた。それをまじまじと見つめながら、理の賢者は若干厳しめの瞳を見せた。

『ふむ…。よからず。お主らがここへ来るまでの間に、解析をしておいでや。』

「あつがとひじめます。もつともここですか？」

『「つむ。概要は覚えたぞ。…サテイも覚えておるのじゃねいへ。』

「ええ。」

魔法陣や術式を記憶するのは、サテイの得意とするところだ。魔法陣などに限つてだが、大体一度見て内容を掴めば、記憶することができる。これは理の賢者にも、もちろん言えることだ。

「師匠。」

『ふむ。』

「「」の魔力抑制は何のために行われているのでしょうか。」

『ふむ。殿下を魔法使いにしたくない、もしくは、殿下を危険な目に会わせたくないか… のどおりかじやねいへ。』

ピカーニー卿が怪訝そうな顔をする。

「しかし…後者であるならば、サテイのよつて徐々に訓練をするなどの方法があったのでは?」

『それでも絶対に大丈夫じゃとは言つ切れんのじゃよ。ピカーニー卿。サティとて同じじやつた。』

「え?」

理の賢者がさうりつと言つた。思わずピカーニー卿がサティの横顔を見

たが、サティは「そうなんですよね。」と言つただけで、特に何の感慨も浮かべていない。

『さて、ワシはそろそろ戻るとするかのう。』

「…賢者殿…」

ピュニー卿は思わず理の賢者を呼び止めたが、何を聞けばいいのかも分からず、口を開いた。サティが少し首を傾げてピュニー卿を見たが、その視線には気付かず、難しい顔をして黙つたままだ。理の賢者は2人を眩しげに見つめる。

『ピュニー卿、サティをよろしく頼みますぞ。』

「は?…はっ、必ず守ります。」

「はい? 何それ。」

『ふおふおふおふおふお、ではさうばじや。』

慌てて理の賢者の声に答えた騎士と、怪訝そうに首をかしげる弟子を残して、賢者は消えた。

* * *

「一体どういふ意味なのよ師匠。」

「サティ。」

ピュニー卿が少し強めの口調で呼んだ。

「何？」

「その……絶対に大丈夫とは言い切れない……といふのはどうこういと
なのだ。」

「それは……そのままの意味だよ。」

本当に、そのままの意味だ。たとえ魔力を抑制していたとしても、それを徐々に弱める過程で絶対に綻びは生まれる。抑制を弱めた直後は特に顕著だ。急に重りを外せば手も足も勢いよく動き出す。それと同じで、急に緩くなつた枷の反動に戸惑うことも多い。だからジヨシユの魔力抑制も、解除していくときが一番難しいはずだ。絶対に大丈夫だと言い切れないからこそ、心配なのだ。

サティの肩が、突然抱き寄せられた。バランスを崩したサティの身体が、ピウニー卿の腕に包み込まれる。「絶対に大丈夫とは言い切れない」訓練を、小さい頃に施されたというサティの話と、それを淡々と話す表情が、思いのほかピウニー卿を切なくさせたのだ。一瞬、どうしても目を離したくない、どうしても離れたくない……とう思いに囚われる。いつに無い強引な行動に、サティが僅かに焦つたような顔でピウニー卿を見上げた。

「…何、ピウニー？」

「サティ、お前が…。」

「ちょっと、ちょっと待つ……て、……う……」

サティは、きゅ……とピウニー卿に抱き寄せられていた。熱い吐息が

髪の毛に掛かり、じつやう唇が髪の毛越しにサティのこめかみに押し付けられたようだ。サティを求めて徐々にそれが下がつてくる気配と、ごつごつとした大きな男らしい指が髪を搔き分けてくる感触が熱い。触れ合っているのは小さくて柔らかなお腹とふわふわの毛皮ではなく、自分よりもはるかに逞しくて力強い男の身体だというのも落ち着かない。

胸が詰まるような心地をサティは覚えた。最近、人の姿で二人きりになると唐突に色めいた雰囲気になつて、それが心地よいようなむずがゆいような気がするサティは、素直にそれに身を任せることができないのだ。だが、こんな風にピウニー卿に包み込まれていると、「やめてよ」…と退ける一言がどうしても言えない。

サティは逃げることにした。

「あの、ピウニー…」

「なんだ。」

「私、お風呂入りたい。」

「あ?…あ、ああ。」

抱き寄せてサティに触れていると、名前を呼ばれた。ピウニー卿はサティの身体を少し離し、そのグリーンの瞳を見下ろす。するとその口から発せられた、突然の風呂発言。何故かピウニー卿の顔が赤くなつた。えー、あー、この状況で風呂…か…。人間に戻つたあと、すぐに風呂を使っていたと思うが…このタイミングでそれを言い出すということは、つまりどういつ解釈が当てはまるのだろうか。ピウニー卿は腕を緩めて、「あちらだ」と、部屋の奥を指した。汗を

流す程度の簡単なものならば、部屋に付いていく。

「ありがとう。」

ピウニー卿の腕を抜けると、サティはそそくさと立ち上がり部屋の奥へと駆けでいった。ああ、そんなに慌てると転ぶぞ。セピア色の揺れる髪を瞳を細めて見送りながら、何故かピウニー卿も立ち上がる。今はサティとこの小さな離れに2人きり。ピウニー卿は無意味に部屋をうひうひした。

少しばかり待つと、本当に汗を流しただけなのだろう、サティが風呂から出てきた。セピア色の濡れ髪をタオルで拭きながら、先ほどまで着ていた服を着崩している（よう見える）。妙に色っぽいサティの腕を強引に引くと、湯で上気した肌がほんのり温かくピウニー卿の腕に伝わってきた。もう片方の腕を背に回し、腰まで這わせる。その感触がサティの身体をぞくりと揺らしたのが、ピウニー卿にも分かり、こうしていると自分の息が上がる。ピウニー卿はそつとサティの名前を呼んだ。

「サティ…？」

「あああ、あのっ…。」

サティが腕を突つ張つて身体を離してきた。妙に緊張している様子が可愛らしく、ピウニー卿も思わず腕を緩める。

「…ピウニーも入つとく?」

「え?」

「ルカも、お風呂に入つとく？」

「ええ？」

「入らないの？」

「こわ、あ、ああ…。」

一緒に？…いや、ない。既に入っている現状から分析してそれはない。…ということは、暗に風呂に入れといわれている…？しかし自分はそんなに汗だくだつただろうか？汗臭かつただろうか？ピウニー卿はいささかショックを受けたが、腕の中で上目遣いに言われたら流石に嫌とは言えなかつた。騎士たるもの、淑女をその腕に抱くのに、汗だくではいかんだろう。…いや、もう一度聞くがそんなに汗だくだつただろうか。待てよ、これか！髭か！髭を剃れといふことか！…旅立つ前に一度くらいは剃つておかないといくまにな。浮上してくる様々な思いを口にすることはなかつたが、ピウニー卿は顎を撫で「じやあ、入るか」などと言いつつ、風呂に向かつた。

ピウーネ 様が浴室に入つた直後。

男の悲痛な叫び声が聞こえる。

時間切れだつた。

サティは扉を押して浴室に入り、水浸しの床に転がっているピューニー卿を口で咥えて救い上げてやった。ふかふかタオルを用意して、

その中でピウニー卿を落とすと、前足でひょこひょこと転がしながら拭いてやる。

「「めん、あの……どうしてお風呂入っておきたくて……ピウニー大丈夫？」

獣になる前に人の姿で風呂に入つておきたい……といつのま、わざわざな女心だ。

「いや……この程度。」

わざとか？ わざとなのか！？ ……ピウニー卿は動搖を悟られないように髪を撫でて平静を装つた。

もううん風呂だけではない。

女心といつのはもつと複雑でもつと可愛らしこものだ。

ただ残念なことに、ピウニー卿は剣の筋は分かつても女心には疎かだった。

サティはため息をついた。

自分がどうしても、いつした雰囲気を誤魔化したくなるのは……。

ヴィルレー公爵の屋敷で、ペルセニーアとヴィルレー公爵は向き合つていた。ヴィルレー公爵の隣にはセラフィーナが座り、その膝の上ではサティが喉をじろじろと鳴らしている。セラフィーナはどことなく、寂しそうだ。

ペルセニーアは理の賢者と猫の関係のみをヴィルレー公爵に打ち明け、ジョシュが魔力抑制を受けていることについては秘しておいた。信用が置けない…という問題ではなく、まずは理の賢者に相談したい…という、それはジョシュの意向だとサティから聞かされた。サティはあの夜、ジョシュに魔法の内容の概要を伝え「必ずなんとかする」と約束したそうだ。ジョシュ自身がどう考えているかは、ペルセニーアは伺い知ることは出来なかつたが、サティの話が本当であれば、ジョシュは将来有望な魔法使いになる可能性がある。ジョシュに掛けられている魔力抑制が、それを阻止しているのか、それとも純粹にジョシュのために施されているのか、目的が異なれば、術を施した人間も異なるだろう。…可能性としては、ジョシュの身体を守るために、国王自身がそれを行つてはいるかもしれないのだ。サティからその可能性を示唆されたときに、まさかとは思つたが、それほど、ジョシュの魔力というのは大きく不安定なのかも知れない。

そのような事情もあつたし、何よりサティがアルザス家を信用してくれたからこそ、こうした秘密を共有しているのだ。その信用を裏切るわけにはいかない。ジョシュの魔力抑制については、いくらヴィルレー公爵であつても秘密を貫き、より一層、かの王子の身を守ろうとペルセニーアは誓つている。

「じゃあ、グレン……んーん……サティは、家では飼えないのね。」

セラフィーナの寂しげな声が聞こえた。その声を受けた、ヴィルレー公爵がゆっくりと娘の頭を撫でる。

「探している人がいるのならば仕方がない。きっとその人もサティに会いたがっているよ。」

「そうね……。」

ヴィルレー公爵は、ペルセニーアから事情を聞く前に、あらかじめジョシュから話を聞いていて大方の事情は知らされていた。ジョシュははつきりと「猫が話す」とは言わなかつたが、理の賢者の話が出てきたということは、そういうこともあるのかもしれない。ジョシュはそのような嘘をつく人間ではない。いずれにせよ、人語を解する猫が王宮に紛れ込んだとなれば、どこぞの誰の間者かと騒ぎだてるものも居るだろうし、知っている人間がごく限られた……しかも、ヴィルレー公爵も信用できる人物であったことには安心していた。

アルザス伯爵家は、堅実な武門の名家として知られている。国王の覚えもめでたく、次男のパヴェニーアは若くして白翼騎士団の団長に、長女のペルセニーアはジョシュの護衛騎士となつてている。長男ピウニーア…ピウニー卿はほとんど宮廷に関わっては居ないが、それというのも、国王の命によつて、国の要所に出没する魔物を討伐・調査する任に着いていたからだ。籍は国王の親衛隊。國中を動いていたため意図して役職を与えられてはいなかつたが、国王の信頼厚い騎士として宮廷では有名だった。そのピウニー卿も1年と少し前、魔竜の討伐に出向いて亡くなつてゐる。

もともと文官の出だつたヴィルレー公爵とアルザス家は交流がある

わけではなかつたが、ペルセニーアがジョシュの護衛騎士になり、王宮でよく顔を合わせるようになると、言葉を交わすようになった。ジョシュやセラフィーナがよく懷いているペルセニーアも、その関連で顔を出すパヴェニーアも、人柄もよく野心も無く、武人らしい率直な態度をヴィルレー公爵は快く思つてゐる。

「もとよつこちちらで保護した猫です。…ヴィルレー家でも何かさせてもらえないでじょうか。」

「いえ…そこまでしていただきわけには、お気持ちだけで結構です。」

「しかし…。」

サティを撫でていたセラフィーナが顔を上げた。

「ねえ、お父様。私、いつかまたサティに会いたいわ。」

「ああ。…それならば…。」

ヴィルレー公爵は優しげな眼差しで、セラフィーナに抱かれているサティの頭を撫でた。セラフィーナに全ての事情は話していない。ただ「飼い主が見つかって、寂しがつてゐる」と言つただけだ。

「サティ、いつか君の主と共に、セラフィーナに会いに来てくれるかい？」

人語を解するならば、自分達の会話を聞こえているのだろうか。

「にゃあ。」

サティの返事に、セラフィーナの顔が綻んだ。

* * * *

「猫が迷い込んだ？」

「はい。ヴィルレー公爵とそのご息女がご訪問されたときには、迷い込んだ…と。早々に捕獲し、ジョシュ殿下の下で一晩過ごした後にアルザス伯爵が引き取つたそうです。」

「ジョシュが、一晩預かった…と。」

「ええ。ヴィルレー公爵と殿下のお2人からお伺いしましたので、間違いありません。侍女や護衛の者達も、そのように申しております。」

「ジョシュに変わりは？」

「特に問題は無いようです。本日、お伺いしてみましたが、お顔の色も優れており、いつになくお声もしっかりとなさつておられました。」

「そうか。」

オリアーブ国王の執務室で、国王は宰相バジリウスから報告を聞いていた。

穏やかな、落ち着きのある声は、そのバジリウスのものだ。先王の下では魔法使いとして名を馳せていましたが、その手腕は政治にも発揮され、現国王が即位したときから宰相を務めている有能な男である。

今では魔法使いとしては現役を退いている。しかし、その経験から魔法师职业団と騎士団の協力の必要性を訴え、実証してきた。彼のおかげで、国内で勃発する魔物の討伐が迅速、かつ最小限の被害でとどまっているといつてもいい。内政手腕においては国王の意図をよく汲み、騒がしい宫廷からも一目置かれている。

それにもしても、猫：か。

国王の1人息子のジョシュは、12歳になるというのに勉学以外の…剣や魔法などについては、ほとんど基礎しか教えることが出来ていない。いずれ王太子として国王を補佐する身でありながら、そのような事態に陥っているのは、父王たる自分の責任でもあった。あれは聰明だ。今からでも強く鍛えることができれば、立派に王太子を勤めるだろう。だが、今のままで到底、無理だった。

それに、長く次の子が出来なかつた王妃が、やつと第2子を懷妊したこと、喜ばしいことではあるが、恐らく悩みの種なのだろう。聰いジョシュのことである、宫廷の力の均衡にまで気を配り、どういう立ち位置に立つべきかを思案しているに違いない。…そしてそれらは、アルザス伯爵やヴィルレー公爵には相談しても、恐らく、父王の自分には、一言も相談することは無いだらう。ふ…と、国王は苦笑した。

「ジョシュの件は承知した。不問とせよ。もう下がつてよい。」

「はつ。」

バジリウスは深く一礼して、執務室を辞した。入れ替わりに、1人の騎士が入ってくる。

その騎士の姿を認めた国王は、「ああ、ここにも懸念事項があつたか」とため息をついた。

騎士から提出された報告書に一通り目を通し、国王は瞳を上げた。

「IJの報告書の内容はどうぞ信頼できる。」

「半々…と叫つたといひでしょつか。」

「お前自身が作ったものだらう。」

「私とて半信半疑です。…陛下、調査の続行を許可いただけるでしょうか。」

蜂蜜色の髪に尻尾が下がり氣味の、甘い面差しの騎士だ。彼は少しばかり口元を緩めた。騎士としての礼節は保っているが、漂う氣配がどこなく軽薄になってしまつのは彼の性分なのだらう。そうした雰囲気を特に気に留めることなく、国王は頷いた。

「許す。」

「もう言つていただくと甲斐があります。」

「これは余の個人的で、面倒な仕事だらう。それでも、続けたいか。」

「もちろん。…こんな面白ことはありません。」

「さうか。」

「もし王都を離れることになつても、パヴェニアーラ団長こゝ、融通を?」

「お前が余の使いで出向する… どこへ通達しておいで。」

「お願い致します。」

騎士が一礼して立ち去ったのを見届けると、国王は執務机から立ち上り、窓の外を見た。ジョシュの件にしろ、この件にしろ… 自分という男は国王でありながら、頼りないことよと思わざるを得ない。

待つとか、見守るとか… そういうことしかできぬ自分が恨めしかつた。

「ピウ、よかつたの？」

「何がだ。」

「もう少し実家にいても、よかつたんじゃない？」

「かまわんぞ。またいつでも戻ればよい。」

顔を隠すほどマントを田深に被つたピウー卿に、サティは話しかけた。2人が騎乗しているのは、青毛の馬シャドウメア。今はゆっくつと歩かせているため、かほかほと一定の足音を刻んでいる。

シャドウメアはピウー卿の愛馬だ。魔竜討伐のときにも連れて行った彼は、ピウー卿のことはもちろん覚えていたが、それ以上にサティに懐いた。驚いたことに、シャドウメアはネズミや猫になつた2人の言つこともきちんと聞いた。

サティがヴィルレー公爵家から帰ると、2人はすぐに出発した。ジヨシュの魔力抑制についてはひとまず理の賢者に任せ、当初の目的であつた杖の賢者の下へと向かつ。理の賢者の杖を引き取り、サティの杖を新しく作つてもらうためだ。

昼間は人間に戻りシャドウメアで駆け、必要があれば街で買い物をする。夜間は鞍に乗つたまま、街道から外れたところを歩いた。足が強く賢いシャドウメアだからこそ可能な旅路だ。魔物が出そうなところは避けて通つており、今のところ特に問題は無い。

ピュー卿は後ろからサティを抱き寄せるように、馬に乗つている。

「それに、とりあえず早く呪いを解きたいからな。」

「あのせ、ピュー」

「サティは、そつ思わないか?」

「うん、それは思つんだけど。」

「呪いを解いたら…。」

「あの、」

「サティ…。」

サティを抱き寄せる腕に力が込められ、不謹慎な色を帯びた声がサティの耳元で囁かれた。そのとき、シャドウメアがいなないた。かぽかぽと街道から離れていく。

「む？ シャドウメア？ ビーフしたのだ。」

「あのね、だから。」

たつたつたつたつと、シャドウメアが駆け足になつた。

「ああ……。」

「ね。」

ピウニー卿は深く溜息をついた。いつもサティと話していると時間を忘れる……などとこゝのは陳腐な言い訳であると分かっている。そうか。時間か……。早くサティをこの腕で思つ存分……。ピウニー卿が騎士らしからぬ不埒なことを考えていると、シャドウメアの足が一層速くなり、森に飛び込んだ……と、同時。

シャドウメアの足が止まり、その背中から人が消え、ふわりと2人分の旅装が鞍の上に落ちた。

シャドウメアはとも賢い馬だった。

「……かげん、覚えたほうがいいよね……。」

「やうだな……。」

鞍の上で、サティはピウニー卿のマントに頭を突っ込んだ。ぶるぶるとシャドウメアが鼻を鳴らしてくる。マントの中ではサティはピウニー卿を見つけて、その毛皮をぺろりと舐めた。

〔小説〕 戦え！ペリー卿（前書き）

あまり詳細な描写はしていませんが、虫注意。
ダメな方は、「* * * *」まで飛ばしてお読みください。

ペリー卿とサティが、最初の宿場町に着くまでの小説。

〔小話〕 戦えーピューー卿！

「いやああああ、無理、もう無理……あああああ」

「サテイ、私を降ろせ！」

「だつてやだ止まるの無理……」

「サテイ、私が必ずお前を守るから！」

「……ピューー、ほ、本当に？」

「大丈夫だ。必ず守る。」

「ハハ……。」

頭の上から聞こえるピューー卿の声に恐る恐るサテイは止まると、そっと頭を降ろした。背後から迫る足音に、震えながら振り向く。ピューー卿はサテイを小さな背に庇い、金属の擦れる音を響かせて剣を抜いた。

近づいてくる敵。

ありえぬほど成長したそれは、まさに悪魔。黒い悪魔の「」とき落。

眼前に現れたのは、人の世の台所でよく見かける黒い艶光する羽を

持つ、アレだつた。

それはおよそ見たことの無い大きさだつた。恐らく大将級であろう大きな悪魔と、両脇に従える少し茶色に近い脂ぎった小さな悪魔。おぞましい。こんなおぞましい姿、サティは見たことが無かつた。否。

見たことはある。そして、その姿に對峙するのをいつも怖れていた。それが現れると、隠れ、震え、嵐が去るのを待つていたのだ。だが、今は、ピウニー卿がいる。頬もしいふわふわの毛皮の背中。彼は竜殺しの騎士なのだ。

ゆうじ。

両脇の小さな茶色い悪魔が中に浮く。それを睨みつけながらじり…とピウニー卿が殺氣を濃くする。背にひらめく薄い羽を動かし、こちらを伺つてはいるが、あれが恐ろしい機敏さで動くのをピウニー卿は知つている。しかもなぜかあの動きは…予測不能だ。いや、違う。予測不能ではない。あれは、人のおびえる心を…負の心を嗅ぎつけて、もつとも人の恐怖心を煽る行動に出るのだ。女子供を嘲笑うかのように…。それならば、次の動きは。

ぴ…っと茶色い悪魔が動いた。

「サティ、怖いなら目を閉じている。」

トン…ヒュウニー卿は後ろ足で床を蹴つた。狙うのは…動かなかつ

たほうの悪魔だ。一歩詰めて一気に距離を縮め、剣を横に薙ぐ。剣が触れる瞬間、ぐと魔力を放出すると、ジュウッ…と焼け焦げるような音が聞こえ、眼前の悪魔は胸から2つに分かれた。

しぶとく断末魔の動きを見せる切つて捨てたほうの悪魔は無視し、すともう一匹の茶色い悪魔に視線を移す。思った通り、もう一匹は壁際に貼り付き、サティの頭上を狙っていた。ピウニー卿の髪が戦いの緊張感でぴりぴりと張り、真っ直ぐになつた。

「サティ、頭を借りるぞ…」

いまだ目を開じて、ふるふるしているサティの頭に駆け寄ると、それを足場にジャンプする。壁に張り付く悪魔に剣を向けると、それはヴ…と羽を震わせて、一度ピウニー卿の身体の上へと逃れる。だが、その動きは予測していた通りだ。ピウニー卿は自分の頭上を通りすぎる瞬間、その腹に向かつて剣を突き通す。獲物を剣に刺したまま、すとん…とサティの毛皮の上に降りると、ていつ…!と剣を振つて悪魔の身体を投げ飛ばした。悪魔が剣を抜ける一瞬に魔力を込める。バシュウ…と身体から煙を吹きながら、悪魔は地面に叩きつけられ、動かなくなつた。

…最後は、大将級…一匹である。

ピウニー卿はサティの頭から降りると、ずっとおとなしくしていた…いや、こちらの動きを伺つていた黒い悪魔の前に立ちふさがつた。

じつとじとした重い空氣。張り詰めた緊張感が2者の間に落ちりる。

均衡を破つたのは黒い悪魔だ。ピウニー卿の耳がぴくりと動き、悪魔の動きに合わせて身を翻す。

黒い塊がふつ…と宙を舞った瞬間、ピウー！卿の視界に茶色い悪魔の下半分がうごめいたのが見えた。そちらに一瞬だけ、本当に一瞬だけ、気を取られた。その隙に…！

۱۷

「しまつ」

あらうことかサティの方向に、黒い悪魔が飛んできたのだ。サティの頭を黒い悪魔が掠める。目を閉じていっても分かる、その風圧のなんというおぞましさ。サティの毛皮がこれまでにない勢いで膨らみ、四肢を突つ張り垂直に跳んだ。その動きにたじろいだのか、黒い悪魔はサティを避けるように地面に降り立ち、ピウニー卿の方に力サカサと近づいてくる。いまだ！…ピウニー卿が前足の剣を構え直し、敵へ跳躍した。

ベータ・ヴィ・ラーマークへ（雷撃の鞭！）

「えええ」

バチーン！

黒い悪魔と云ふ一郎の間に、小さな雷撃が落ちた。

＜――タ・ヴィ・オーン！＞（炎の鞭！）

「あの、サテイ」

ジユウ!

黒い悪魔に赤い熱線が走り、ピウニー卿の足元が焦げた。慌ててピウニー卿はサティの足元に駆け寄る。

「オーン・エ・カシユリク！」（炎の刃！）

「サティ、ま」

「オーン・エ・ラコカ・セオーム！」（炎よ燃えさかれ！）

「お、サ、」

「ラニマーク！ラニマーク！オーン・ラニマーク！」
(雷とか雷とか炎とか雷とか……)

「あぶな、」

雷撃やら炎やら、小むこながら、すこし数の魔法弾が打ち込まれて黒い悪魔は跡形も無く消え去つた。ようやく静かになり、サティはぜえはあと息をつく。

「サ……サティ……？」

ピウニー卿の呼びかけに、ぎょ……と首を傾けたサティが、半眼でこちらを見ている。ピウニー卿の髭が再びピーンと緊張し、ふかふかの毛皮がぐるりに膨れた。怒られる。一匹サティのところに逃した罪で確実に怒られる。ピウニー卿は覚悟を決めた。この女魔法使いに、逆らっては、いけない。

だが、サティの行動はピウニー卿の予測を超えた。

かぶつ。

サティイはピウニー卿の身体を咥えると、一寸散に走ったのだ。

「な、待て、サティイ、サティイ-----！」

バシャバシャバシャ…。

小さなセピア色の猫が、せせりగに顔を突っ込んでいる。

「ひひひひ…」

「あの…サティイ、もう多分綺麗になつたと…淨化の魔法も使つたん
だろ？？」

「やうだけど、やうだけど違つて… そつこつ問題じやないの！
ピウ…頭もちよもちよして…」

「もちよもちよ？…あ、ああ。」

サティイはずすこと濡らした頭をピウニー卿に差し出す。差し出されたピウニー卿は、人間の髪を洗つように、そのセピア色の毛を前足でもちよもちよと撫でてやつた。ピウニー卿の身体は小さいので、前足が毛に埋まる。もちよもちよが終わると、サティイは再び頭をざぶんとせせりగに突っ込み、ふるふると振る。

「ピウ…」

「お、おひ。」

再び、ピウーー卿はサティの頭をもちょもひょと撫でた。終わると、再び頭をぞざんとせせらぎに突つ込み、顔を上げるとふるふると頭を振つて水を飛ばす。

「…もう、大丈夫か？」

恐る恐るピウーー卿がサティを覗き込むと、明らかに耳をしょぼんとれせて、せせらぎから少し離れたところに丸まつた。

「あんな…あんな、もひお嫁にいけない…。」

「よ、嫁つ？」

すんすんと涙声のサティ。サティは虫が嫌いなのか…。まあ、あの悪魔は虫の中でも魔王もかくやと謳われた嫌われ者だから仕方がない。とはいえ、こんなに弱つたサティを見るのは初めてで、ピウーー卿はサティの頭に近寄ると、よしよしと頭を撫でてやつた。ピウーー卿は前足を口元にあてて、「ホンと咳払いをする。

「あー、サティ？ 嫁なら私が…。」

がばつ…とサティが起き上がる。

「ふ、ふおおおーー。」

勢いあまつじピウーー卿が後ろに転がつた。

「古の」とねざで、1匹見たら30匹つて言つたのよ確か。」

「あ？…あ、ああ。だがアレだけ走れば大丈夫だろ？…それよりも嫁の話だが、」

サティは、ピュー卿の言葉は聞かず、その小さな身体をパクリと咥えた。

「サ、サティ？ サティー——！ 落ち着け————！」

サティは猛烈なスピードで駆け出した。
ピュー卿は風を切りながら決意する。

サティに虫ダメ、絶対。

〔小説〕 戦え！ペガー卿！（後書き）

もうちょいもうちょいする。

…つて、何…？

とこいつ質問は受け付けておりません！

街道から大きく外れた荒野を一匹の猫が駆けていた。四肢を懸命に伸ばし、何かに追われるよう走っている。頭の上には金色の毛並みのネズミが振り落とされないように捕まっていた。

「サティ、一瞬身を翻せるか？」

「どうする？」「

「私があれの後ろに飛び移る。」

「…危ないよ！…私の魔法で何とか…。」

「サティの魔法の威力だけでは無理だろ？…サティ…！」

「…分かつた。掴まつて！」

サティは、ずさ…と身を翻してターンし、眼前の敵を睨んだ。迫り来る敵…、人間の膝くらいの高さがあるだろうか。巨大なネズミともモグラともいえぬ、醜悪な動物が不恰好にこちらに迫っていた。ぶよぶよとした皺のよった皮にはまばらに毛が生え、瞳は退化してしまっている。…魔物化した凶暴なモグラネズミ。普段は地下で大人しくしている彼らは、時に魔と化して、こうして地上に出て、見えない瞳で無差別に生き物に牙を向くことがある。

口からは大きな長い牙が2本飛び出していく、飛び掛られれば人であっても脅威だろうが、自分達が人の姿であれば、歴戦の騎士であるピウニー卿や、古魔法に精通しているサティならば、ものの数秒

で蹴散らすだろ？ だが、なにせ今2人は小さな猫とネズミの力で、使うことの出来る能力にも限りがあった。…そして、シャドウメアとも、はぐれていた。

「卿達は、その日河原で野宿をしていた。そして朝出発しようとしたときに、モグラネズミの集団に襲われたのだ。シャドウメアが一声甲高く嘶き、モグラネズミの集団の真ん中へと躍り出てそのまま走り始める。一瞬追いかけるべきかと思つたサティに、ピウーネ卿は「逆に走れ！」と言つたのだ。サティはピウーネ卿を乗せて、シヤドウメアが走つた方向とは逆に走り始めた。大半は大きな足音を立てるシャドウメアを追いかけたが、一匹だけ、2人を追いかけてきたモグラネズミが居た。

「サテイ、今だ！」

ピウーネ卿の声に弾かれるよつにサティの身体が跳躍した。モグラネズミは眼はほとんど見えず、気配と音だけでこちらを追いかけてくる。身を翻したサティの動きに咄嗟に反応できず一瞬出し遅れた牙が、交差するサティの身体を掠めた。ピウーネ卿が、サティの頭の上からモグラネズミの上に飛び移る。

モグラネズミは背を這う奇妙な感覚に、ギャツギャツと小刻みな鳴き声を上げながらロデオのように体をくねらせ始めた。ピウニー卿は落ちないように、皺になつた皮膚を掴み、モグラネズミの尻に剣をちくんと突き刺す。

— ۱۷ —

不愉快な声を上げてモグラネズミが走り始めた。ピウーネ 指は身体

身体の少し左に剣をちくり。
を反転させ、モグラネズミの寄つた皺にしつかりと掴まる。今度は

モグラネズミのスピードが上がり、走る方向を少し右に修正する。その眼前には、白い岩がすぐ側に迫ってきていた。

ドゴン!

眼の見えないモグラネズミは、思い切りその岩にぶつかつた。ぶつかつた振動でピウニー卿は振り落とされそうになるが、なんとか剣を刺して支え、やり過ごす。ドサリとモグラネズミの身体が地面に横たわり、あたりは静かになつた。

ふ…と安堵のため息をつく。サティイがこちらに向かってきてているのを確認して、剣を抜こうと柄を握り直した。そのときだ。

動かなくなつたと思ったモグラネズミが、突然声を上げた。ピウニ一卿は剣を抜いて頭へと駆け上がる。両手で持ち直し、渾身の力を込めてモグラネズミの眉間に剣を突き刺した。思い切り魔力を込める。…ギャッ！…と短い断末魔の声を上げ、今度こそモグラネズミは動かなくなつたようだ。…ピウニ一卿は剣を抜くと腰に納め、サティを振り返つた。

「サテイ、足は大丈夫か？」

「ピューー、大丈夫？ 怪我は無い？」

2人が同時に聞いて、顔を見合させた。どうやら大丈夫そうな互いの様子を見て、ほつとため息をつく。サティが地面に降りてきたピュー卿に顔を寄せると、ピュー卿はその頭をそっと撫でた。

「しばらくどこかに身を隠して、人間に戻つたらシャドウメアを呼ぼう。」

「分かった。じゃあ、ピュー、乗つ

乗つて……とサティが頭を低くした。そのときだ。

サティとピュー卿の耳がぴくりと動いた。

“ガ”“ガ”“ガ”“ガ”“ガ”“ガ”。

…地鳴りのような音が聞こえる。地面も僅かに振動し、明らかに様子がおかしい。サティがピュー卿を乗せて立ち上がり、頭を上げた。荒野の向こうに見えるのは…。

「なにあれ…。」

荒野の向こうが黒く染まっている。何か獣の集団が、こちらに迫つてきてているようだ。…迫つて、きている？ 地面の高低差によって、その獣の集団に気付いたのは、かなり距離が迫つてからだった。

「…」れ、不味くない？

「不味い…な。」

「ピウニー、しつかり掴まつて……。」

「つむ。サティ……」

「逃げるー……ピウニー卿の声が聞こえると同時にサティは走り出した。

後ろから聞こえてくる地鳴りから逃れるようにサティは駆けた。轟音は少しづつ、近づいてくる。ピウニー卿はサティに掴まりながらそつと後ろを伺つてみた。そこには、先ほど自分達が対面していたモグラネズミが集団となつて、こちら田掛けて突進してきている。朝、シャドウメアが蹴散らした数とは比べ物にならない。そして、その集団の前に、2頭の馬が居た。

1頭はシャドウメア、もう1頭の馬上には何者が乗つている。

「シャドウメアか。……もう1頭は、何者だ。」

サティも大分疲れてきたのだろう。段々、足が重くなってきた。ピウニー卿は、今ほど自分のネズミの姿が忌まわしいと思ったことは無かつた。自分はこれほどにも小さく、移動も戦闘もサティがいなければ何も出来ないではないか……！自身の無力さに歯噛みしながらも、ピウニー卿は剣を抜いて、それを掲げた。

「イラキユヒ・エーク・オ・ピウニーアー！
(ピウニーアの剣よ発光せよ！)

ひら……と小さな光がピウニー卿の剣に灯つた。

「サティ、少しスピードを落とせ。」

「でも、」

「シャドウメアが来る。大丈夫だ。」

ピウニー卿の落ち着いた声はサティを少し安心させた。それを聞いて、サティは少しずつスピードを落す。ピウニー卿が剣を掲げたまま後ろを振り向くと、大分距離を詰めてシャドウメアがピウニー卿の剣の光を目指して駆けてくるのが見えた。もう1騎も軌道をこちらに向かっているようだ。

スピードを緩めた猫の足にシャドウメアが追いつくのはすぐだ。徐々に歩を緩めてくるシャドウメアが、サティの身体をつづくように鼻面を下げた。サティが思い切ってそこに身体を乗せると、シャドウメアは、ぐ…と頭を起こして2人の身体をたてがみに落とす。するとするとシャドウメアの首に沿つてサティ達の身体は落ちていくが、さほゞスピードが出ていなかつたので、上手く鞍にたどり着くことができた。

再び馬のスピードが上がつた。だが、獸姿のピウニー卿とサティにシャドウメアの速さはかなり不安定だ。手綱は人間サイズのもので、サティは必死でそれを口に咥え、ピウニー卿も小さな前足でそれを抱えているが、今にも振り落とされそうだ。

「ハハハハ。」

隣で走らせている1騎から男の声が聞こえた。ピウニー卿がそちらに視線を移すと、目の細い大柄な男がシャドウメアに並ぶように馬

を走らせている。大きな手がこちらに伸ばされた。何者が、ピウニー卿の全く見たことの無い顔だ。だが、迷っている暇は無い。

「シャドウメア、身体を寄せせるんだ。」

ピウニー卿の声に呼応するよつこ、シャドウメアが少しづつ鱗の馬と距離を詰める。その間にも、後ろからモグラネズミの集団は迫ってきている。

「三つ数えたら飛べ、サティ！」

そんなこと出来るわけがない！…サティは一生懸命ふるふると頭を振る。しかし、

「…そのまま鞍を蹴つて手綱を放せ。受け止める。」

もう一人の男の声だ。片腕で手綱を握り、シャドウメアに触れそうなほど、もう片方の腕を伸ばしている。

ピウニー卿がサティの首元にしつかりと掴まった。

「…サティ、何が起つても私は一緒にいる…！」

小さな自分に出来ることはそれくらいだ。失敗しても成功しても私がいる。そう言つたピウニー卿の言葉に後押しされるように、サティは意を決した。

「3…2…1…！」

ピウニー卿の声に合わせて、サティが手綱から身体を外して鞍を蹴る。カクン…と、馬から身体が離れる感覚は一瞬だ。次の瞬間には、

何者かの手にピューイー卿」とサティの身体がすくい上げられた。そのまま男の腹に抱えられ、マントがふわりとかけられた。

2頭の馬はスピードを上げ、荒野を斜めに走り抜けた。森に飛び込み荒野から逃れるとモグラネズミの集団の軌道からも外れ、やつと助かつたと認識したときには、人も馬もネズミも猫も、疲労困憊だつた。

＊＊＊＊

男はモグラネズミの集団が通り過ぎたのを確認すると、ピューイー卿とサティを抱えたまま馬からそつと降りた。手近な木の根元に胡坐を組んで座ると、マントを広げる。

自分を見下ろす細い目をピューイー卿は改めて見上げた。そして、もぞりと腹を曲げた。首と胸の境目があまり無いので、お辞儀も分かりにくい。

「かたじけない。貴殿のおかげで助かつた。感謝する。」

男はピューイー卿を見下ろすと、ゆつくりと頷いた。彼はピューイー卿が話すことを、別段不思議にも思っていないようだ。ピューイー卿も、話すことが出来る。…といつて事實を、この男に隠すのは礼に反すると思つたのだ。だからこそ、自然と騎士の一礼を取つた。

やがて男の視線がサティに移つた。それにつられて、ピューイー卿もサティに視線を傾ける。

サティのグリーンの瞳が今にも零れそうなほど、大きく見開かれていた。

「サティ？」

ピウニー卿が首を傾げた。…サティの尻尾の先がトントンと動く。

「…つ、杖の賢者？」

「え…？」

ピウニー卿は、サティと男の顔を見比べる。

「杖の賢者…？」

ピウニー卿が確認するように、こげ茶の瞳を向けた。それを見下ろしながら、細目の男は頷いた。

「…ということで、師匠の杖を引き取りに来たのと、私の杖が壊れたので新しいのを作つてもらいたいのです。」

思いがけず、旅の道中で杖の賢者と出会つた2人は早速事情を話した。呪いがどのように解けたか…という点については、うやむやに誤魔化しておく。杖の賢者と呼ばれている男は、杖の魔術を極めているという割りに戦士のような体格で、人間に戻つたピューネ卿よりも少し背が高いくらいだつた。ひどく無口でほとんど話さないため、こちらの事情を信じているのかは分からなかつたが、少なくとも、サティの正体については疑つてないようだ。

サティは杖の賢者に幾度か会つた事がある。理の賢者の杖は、杖の賢者が作つていて、その関係で、よく理の賢者の元に来訪していたのだ。自分が魔法使いになつたころにも、杖を作つてもらつた。杖を作つてもらうのは初めてで、どういう注文をつければいいのか良く分からず、材質だけ伝えた覚えがある。どちらかと云うと内弁慶だつたサティは、無口な杖の賢者は苦手だつた。ちなみに、杖を作つてもらつとき以外で言葉を交わしたことはほとんど無い。

杖の賢者に出会つた荒野から1日ほど進むと、杖の賢者の館にたどり着いた。

杖の賢者の館は2つほどの工房が連結したかなりの規模の館だつたが、杖の賢者のほかに人はいないようだ。いくつかの部屋があり狭くはなく、その部屋のどこにも、1m~1.5mほどの様々な木の棒、なぜか剣や槍などの多くの武器が置かれていた。

そして現在。ピウー卿とサティは、猫とネズミの姿のまま杖の賢者に對峙している。テーブルの上に案内され、お行儀がいいとは言えないが、案内されるまま座った。

杖の賢者は、サティの話を聞くと大きく頷いて、席を立つた。部屋の片隅に置いてある1・5mほどの木の棒を手に取り、2人が座っているテーブルの上に置く。サティはふんふんと鼻を寄せ、前足でちょいとつづいた。

「ナナカマドに赤い絹の飾り紐。黒水晶の根付。：確かに師匠のものです。受け取りました。」

サティが何事か呪文を唱えると、理の賢者の杖が、ふ…と消えて、一瞬だけサティの首に下がつて、グリーンの石が小さく光った。サティはその様子に一息つくと、再び杖の賢者を見上げる。

「…それで、私の杖なんですが。」

サティの言葉が言い終わる前に、杖の賢者は腕を組んで首を振った。それを見たサティの毛皮がぶわと逆立ち、一瞬で退く。その様子を見たピウー卿が、抗議の表情をネズミの顔に浮かべ、サティを庇うように立つ。

「杖の賢者殿、サティの杖は…。」

ピウー卿の眼前で、杖の賢者が指でトン…とテーブルを弾いて鳴らした。

「休め。」

杖の賢者の細い目は相変わらず無表情だったが、その声は落ち着いていて、穏やかだった。ピウニー卿は、「ああ……」とこげ茶色の瞳で杖の賢者を見上げた。その表情を束の間見据えて、溜息を吐くようになにかを語る。ピウニー卿は頷いて、サティを振り向いた。

「…でも！」

一 サテイ、落ち着け。」

ピウーニー卿は、思わず声をあげたサティの前足をそつとさすった。そうだった。サティはモグラネズミの集団から逃げた後、耳も尻尾もしょんぼりと萎れ、元気が無かつた。毛皮だけは浄化の魔法で綺麗にしていても、疲労を拭いることは出来ない。サティの疲れた身体を抱き上げて運ぶことの出来ない非力なネズミの心苦しさに、ピウーニー卿の胸が痛んだ。

「ここは賢者殿の言う通りだ。……いずれにしても、杖はすぐに出来るものではないだう。」

サティががつかりと頭を落とし髪が下に向いてしまったが、それ以上強情を張るつもりはないようだつた。サティは起こした身体を、お座りの格好に戻して大人しくなつた。

* * *

サティとピウニー卿は、杖の賢者の家で2日ほど滞在して身体を休めていた。出来る限り人間の姿に戻り、戻ったときには賢者の家の用事を済ませる。サティは家事を、ピウニー卿は馬の世話や剣の手入れなどをしていた。杖の賢者自身は、作業場に潜つて食事の時間しか出てこない。弟子もいないようだし、1人の時は一体どうして

いるんだろうと、ピューー卿は首を捻った。

そんなピューー卿の疑問に、サティがさりと答える。

「杖の賢者、奥方がいるから。」

「ええっ」

あの無口な杖の賢者に奥方がいるといつのは衝撃だった。だが、居るとしたら、一体どこにいるのだろう。再び首を捻る。ただ、サティは杖の賢者の奥方には会つた事が無かつた。その話は師匠である理の賢者から、イヤといつほど聞かされていたが。

「知らない？ 杖の賢者の奥方は……。」

サティのその言葉が言い終わる前に作業場の扉がバタンと開いた。細い目の男は、サティの方を向いて口を開く。

「材質を。」

今は猫のサティの尻尾がピン…と立つた。耳が杖の賢者の方を向く。杖の賢者の言う一言は短く、しかも返答のチャンスを逃すと次の機会がいつ来るかは分からぬといったスリリングさがあった。サティは、即答する。

「トネリコで。」

それを聞いた杖の賢者の細目がクワツ…と見開いた。サティとピューー卿の毛が一気に逆立つ。部屋に一気に落ちた謎の緊張感に、歴戦の戦士であるピューー卿もさすがに動搖した。杖の賢者と見え

たことがあるだろ？ サティも、毛皮が膨らんだまま。サティは思わず尻尾でピュー！ 岡の身体に触れた。

「雷に打たれて折れたトネリコで。」

杖の賢者が目を見開いたまま、サティをじっと見つめている。…サティも毛を逆立てまま、杖の賢者に瞳を合わせる。別に取つて食われるわけではないのだろうが、取つて食われそうな雰囲気が部屋の中を支配している。重苦しい。杖の材質についてピュー！ 岡は詳しいわけではないが、ここまで緊張感を演出する必要があるのだろうか。得体の知れない敵と対峙しているような強張りは、杖の賢者の瞳が細目に戻ったところで解かれた。

「無い。」

「え。」

「森へ。」

「…取りに行けば作つていただけますか。」

杖の賢者はゆつくりと頷いた。

「サティ、トネリコでなければならぬのか？」

「ピュー！ …」

「え？」

ぱっ…！ とサティがピュー！ 岡を振り向いた。サティの瞳が輝き、

ピウニー卿に触れていた尻尾が、ぱたんと元気よく動く。

「うん！ 以前はアオダモだつたんだけど、折れた感触だと私の魔力の負荷に耐えられないみたいだつた。トネリコはアオダモに近いし魔力の蓄蔵がより強いから、一度作つてみたかつたんだよね。」

サティがうつとうつと話し始める。杖の賢者がなぜか、ふむふむと頷いている。

「それにね、ピウニー、雷で分たれたトネリコの木は、それだけで高い魔力の媒体になると言われているの。私が作つたら芯になる魔法の属性は全種類網羅くらいはいつときたいし、100種類くらいは古魔法の基礎入れたいでしょ？」

「あ、ああ。なるほど……？」

「分かる？ やつぱり？ ……でね、あと、元々入れてたやつには自家製魔法陣がやつぱり150種類くらいは入つてたんだけど、今度はもうちょっと魔法陣を頼るんじゃないくて、イメージを元に魔法が形成されるような術を形成してみたいのよ！」

「あの、サティ」

サティの熱弁にピウニー卿は後ずさつた。ビニカいいといひでとめないと、いつまでも続きそうだ。

「そうなると、魔力の負荷がかなり杖にかかるてくるの！ だから、アオダモだと若干耐えられないかなつて思うのよね…。それにやつぱり、しなり具合もトネリコの方が高いし、何より柔軟なのね。柔軟っていうことは、術者のイメージに対する対応力も高いつてこと

で…。」

「サティ、分かつた。分かつたから。…そのトネリコの木材を取りに行くのだな、私も行こう。」

「本当に？ ピウニーも一緒に来てくれる？」

「当たり前だ。サティ一人で行かせるわけにも行かないだろ？」

「ありがとう、ピウ大好き！」

サティの言葉に、收まりかけていたピウニー卿の毛皮がぼふん…と膨れた。杖の賢者はそれに気付いたが、眉を少し動かしただけである。“じるじる”と喉を鳴らしながら、サティはピウニー卿の丸い身体に顔を摺り寄せる。トネリコの木の話に夢中になつたテンショーンそのままにさらりと言つたが、サティは自分の言葉がもたらす効果は全く考えていなかつた。ただただ、なんてピウニー卿は優しいんだろ？…と、サティはご機嫌だ。残念なことにピウニー卿が期待しているような意図はその声色には無く、それが一瞬で知れてピウニー卿は複雑な気分だつた。

「よし、それなら行こう。今すぐ行こう。黒の森に確かありましたよね？」

サティは瞳を輝かせながら、トン…とテーブルを降りた。タタタと床を駆けて、扉の前で振り向く。

「おい待て、サティ。」

準備があるだろ準備が…と言いかけて、止まる。大柄な杖の賢者が

黙つてサティの身体をすくい上げたのだ。杖の賢者は片方の手でやすやすとサティを持ち上げ、すとんとピウニー卿の隣に運んだ。それを見ていたピウニー卿の胸が再び騒ぐ。…自分の身体が呪いによつてネズミになり、満足にサティを守ることが出来ていかない現状は、常に棘のように心の奥に刺さっていた。小さなネズミの身体は、しなやかなサティの猫の身体に比べてとても小さく非力に思える。ああやつてサティを止めたり守つたりする手が、なぜ自分ではないのだろう。

早く呪いを解いて元の姿に戻らなければ。…ピウニー卿は髪を落しかけたが、ふる…と頭を振つて、己を叱咤した。

「杖の賢者殿。…準備が出来たら、サティと共に黒の森に行つきます。…それから、サティの杖を作つてもらつても？」

ピウニー卿の問いに杖の賢者は再びゆつくつと頷いた。そして、黙つて部屋を出ていった。

サティの耳が落ち込む。ピウニー卿はそんなサティの前足を撫でた。

「部屋に戻るか。準備は明日にしよう。」

「うん…。」

…ピウニー卿がそう言つとサティは渋々返事をして、頭を低くした。だが、ピウニー卿は一瞬そこに乗るのを躊躇つた。

「…」

「いや…。」

こんなところでつまらない意地を張つても仕方が無いと分かつてはいる。ピウニー卿はサティの頭の上に乗つた。自分の思いがどうあれ、乗り馴れたサティの頭の上は温かく、毛皮はふわふわとしていて柔らかい。

サティはピウニー卿が乗つたのを確認すると、トントン…とテーブルを降りて、寝床をしつらえている部屋へと戻つた。

* * * *

サティは籠にクッショוןを敷いている寝床に入つてからも、ずっと身体を起こして窓の外を見ている。よほど杖の材料を取りに行きたいのか…と、ピウニー卿は苦笑した。

「よほど、トネリコの素材がよいのだな、サティ。」

「トネリコじやなきやダメ…つていうわけじゃないんだけど、どうせ作るならいい材料で作つてみたいの。…我侭かな。」

「いや、我侭ではなかろう。私も剣を作るときには、随分と我侭を言つた覚えがある。杖の賢者殿もかまわないと言つてはいるのだ。どうせなら思つままの杖を作つたほうがよかるう?」

「うん。ありがと、ピウニー。」

礼を言われて、ピウニー卿はむずがゆい気持ちになつた。人間であれば照れた表情がバレたかもしれない。ピウニー卿はサティの前足に触れたまま、身体を丸くする。

「サティに杖か…。」

「何?」

「いいや。一層、サティの魔法に磨きがかかりそうだと思つただけだ。」

「…な…、そりゃ、杖があつたら元通りの魔法が使えるもの。今なんて、ちょっとしか魔法使えないし。」

「そうか?」

サティの声にピカ一郎が首をかしげる。

「ピカは、剣があるじゃない。人間になつてもネズミになつても使えるなんて、正直すゞ」と思つ。」

「そうなのか?」

「そりゃ、わづよ、質量を変えてるのよ~、どつこいつ仕組みになつてるのか、お~く気になる。」

言われてみればその通りだ。自分の大きさに形を変えるこの剣は、確かに特殊な出自の剣ではあつたが、身体の大きさに合わせて質量を変える…などという効果があるとは聞いたことが無い。だが、ピカ一郎は魔法にはあまり詳しくは無い。何故なのか…などは、あまり気にしたことが無かつた。

「お前もきちんと魔法を使えているだろ?」

「でも、致命傷を与えてるのはピウの剣だよ。…私、虫見るとダメだし、大きな魔物になつたら私の魔法じゃ、変に魔物を刺激するだけだわ。」

それは確かにそうだった。そう幾度も無い襲撃で、大体止めを刺すか、追い払う一撃になるのはピウニー卿の剣だった。やはり、剣を刺し込み魔力を通す効果が高いのだろう。また、ネズミのサイズであつても、急所に剣を刺せば敵を動けなくすることは出来る。一方、サティの魔法は見た目は派手だが、ほとんど敵に致命傷を与えることは無い。一度、虫相手に効果的面だったことはあるが、それが精一杯。このため、サティは自分の魔法が浄化の魔法くらいしか役に立つていないと、いつも引け目を感じていたのだ。

ピウニー卿はサティの前足を撫でてやつた。

「それを言つなら、私は身体も小さいし、いつもサティに乗せて運んでもらつているではないか。」

サティは寝床に丸くなると、自分の足元に来ているピウニー卿が首元の毛皮に埋まる。ピウニー卿を前足で囲い込むと、その毛皮のふわふわを堪能した。

「でも私がもう少し小さかつたらピウの毛皮堪能できるのに…。」

「サティが小さかつたら？」

「さうよ。ピウニー卿と同じくじつだつたら。」

ぶつぶつとサティが何事かを言い始めた。…ピウニー卿が大きかつたら、ではなく、同じくじつだつたら。ピウニー卿はこそばゆい気

持ちになつた。

「ピウ…ひげ、ひげ揺らがないでくすぐつたい。」

「勝手に揺れるんだ、仕方が無いだろ?」

「いい歳なんだから落ち着きなさいよ。」

「落ち着いておる。」

「ふーん。」

「サテイ。」

「ん…?」

「人間に戻つたら…、俺はサテイと…。」

…言い掛けて、ピウー卿は気付いた。

「サテイ?」

「ん…。」

サテイの声はとどろきとまどろんでいる。ピウー卿が喉元にいる体温に安心しているのか、喉がごくごくと鳴っていた。

「いや、なんでもない。おやすみサテイ。」

そう言つて、ピウー卿はサテイの毛皮をふかふかと撫でた。

018 ·いや、なんでもない（後書き）

アオダモ、トネリコ。

：元ネタが分かる方はいるでしょうか。

「大丈夫か、サティ。」

「うん。」

杖の賢者の屋敷から、1時間ほど馬を走らせたところに目的地の黒の森は存在する。

だが、黒の森には多くは無いが人を襲う魔物が生育する森でも有名だ。

魔物は討伐の対象とされているが、全てが悪…というわけではない。動物と同じで、基本的に普段は人間に危害を加えることなく大人しくしている。だが、魔物は動物とは異なり、多くの魔力を有している。そのため魔力のバランスに影響を受けやすい。人の子が魔力のバランスを崩して身体を壊したり、魔力を暴発したりすると同じように、魔物は魔力のバランスを崩すと凶暴化してしまうのだ。魔竜のように人間を越えるほどの知性を持つ者も確認されていて、そういう存在が魔物にさらに影響を与えて別の魔物を生み出す…という事もあった。

黒の森には、杖に素材に向く植物が通常の森よりも多く、それを求めて魔法使いが出入りするため魔力がより蓄積されている。杖の賢者が出入りするたびに、その魔力を沈静化するように術を施しているらしいが、それでもさまざまな系統の魔力を持った魔法使いや冒険者が立ち入れば、それだけ魔力のバランスは崩れる。この森で魔物が凶暴化するのは仕方がないことでもあった。

先ほどピウニー卿が切つて捨てた魔物も、そういうた類の者だろう。今は人間になつている2人の足元には、猿の体に鳥のくちばしのような口を持つた魔物が息絶えている。襲撃はそれほど多くは無いが凶悪なものが多く、ネズミと猫では苦しい戦いになつただろう。今はシャドウメアも連れてきてはいけない。

ピウニー卿が足場の悪いところを通すために、サティに手を伸ばした。こういう場所を行き来するのは慣れないサティは、その手に大人しく掴まる。足場が悪く、バランスを崩しかけたが、ピウニー卿はその身体を軽々と抱き止めた。

「あ、ありがとう。」

「ああ。」

サティは、すぐさまピウニー卿から離れた。猫の時にネズミのピウニー卿を抱えるのも擦り寄るのもなんとも思わないが、こうして人間に戻つたピウニー卿に抱えられるのはこゝそばやく頬の温度が上がる。

最近、人間に戻つたピウニー卿を見ているとサティの心は落ち着かない。普段は歴戦の騎士らしく（サティの目には）落ち着いている（よう見える）ピウニー卿が、時々、自分を熱っぽく見つめてくる視線も、隙あらば距離を詰めてこようとする態度も流石に気付いている。…だが、その視線の意味を計りかねて、サティ自身にそれを受け止める素直な勇気は無かつた。

サティは、人の姿に戻つた瞬間ピウニー卿の厚い胸板に自分の身体が落ちるのも、その身体が落ちないように逞しい腕に身体を支えられるのにも、いまだに慣れないと。ピウニー卿は、最近では落ち着いて

たものだ。きちんと猫の身体をシーツでゆるく巻いて人の姿に戻し、ぐるぐる巻きの状態で人に戻ったサティを支えながら身体を起こして頭を撫で、もうひとつシーツを引き寄せて自分を隠し、最後によいしょと隣にサティを降ろす。最後のよいしょ…の時など、軽々と自分の身体を横抱きに抱えるのだ。そして、早く着替える…と後ろを向く。一連の動作には、当初はよく見られた慌てふためいた様子など微塵も無く、一部の隙も無い。…落ち着かないのはサティだけのようで、それが悔しくもあつた。ああもう、ほんつと、自分だって猫の毛皮にネズミが落ちてくるのは全然気にならないのに！

「サティ、手を。」

「え？」

「足場が悪い。」

「大丈夫よ。」

「大丈夫ではない。早く貸すんだ。」

サティは少し躊躇してみた。だが、ピウニー卿は問答無用でサティの右手を取る。その強引さにサティが、思わず身を引いたときだ。

「サティ。」

ピウニー卿が再びサティを呼び、手を掴んだまま自分の背に隠した。すぐさまサティはピウニー卿から意識を離し、周囲へと氣を向ける。ピウニー卿は既に周囲の気配に耳を澄ませていた。サティを庇つたまま、剣の柄に手を掛ける。

ガサガサ…！

遠くから素早く茂みを搔き分ける音が聞こえ、それが徐々に近づいてきた。魔法の気配を感じ取ったサティは、怪訝そうに眉を潜める。魔物にも魔力の気配は感じられるが、この気配は魔物ではない。力チャリ…と、ピウニー卿が剣の柄を持ち上げた。

気配がすぐ側に迫り、茂みの揺れが田に見えるほどになつた。何者の影が見える…、そう認識した瞬間。

「悪く思つな――――！」

ドーン！

轟音と共に足元に転がってきたのは、先ほどピウニー卿が倒した魔物と同じ種類の魔物だつた。その魔物を転がしたらしき人が、同じ方角に立つている。

なびく髪は亞麻色で、片方の手にはピウニー卿が持つているものよりも一回りは大きいだらう剣を持ち、背には数本の剣を背負つていた。攻撃直後のポーズだつたのだろうか。膝を曲げたままの状態で片方の足を前に突き出し、足の裏を見せたまま、顔をこちらに向けた。

「ああん？」

声は、女性の声。

ピウニー卿は剣から手を離し、まじまじと女性を見ている。サティは事態がよく飲み込めず、首をかしげていた。恐る恐る…と言つた風に、ピウニー卿を口を開く。

「……貴女は、……まさか、剣の賢者?」

剣の賢者…と呼ばれた女性は秀麗な眉を潜め、切れ長の瞳でピューー卿に視線を向ける。たちまちその表情が、驚きの色に変わった。

「わ、わ、あなたは…おこおこ、もしかして…ピューーアかい…?」

「え?」

今度はサティが驚いた。剣の賢者…?

剣の賢者つて…。

サティには、彼女が剣ではなくてキックで魔物倒してたように見えたが、とりあえず突っ込まないでおいた。

* * * *

「いやー、まつさかあのピューーが生きているとはね。死んだつ話しか聞かなかつたからや。」

「はあ。」

「まあ、塵になつて消えた? とか言われても…信じられるわけないよ、あのピューーが。」

「…あのピューー?」

あつはつは…と豪快に笑つてこるのはピューー卿が「剣の賢者」と

呼んだ女性だ。ぐるりと豪奢に巻いた亞麻色の髪に、切れ長の瞳。少し大きく魅力的な脣。引き締まつた肢体の美しい女性だった。サティはとても小さい頃に先代の剣の賢者に会つたことはある。だが、今代の剣の賢者には会つた事が無い。今代の剣の賢者が女性だとうことは知つていたが、まさかピウ一一卿とも知り合つたとは意外だつた。

「そりゃ。もうこっちが恥ずかしくなるくらい熱い坊主でね。……どうしても、あたしに剣を作つてほしつてごねたさ。」

「う……」

「うねてたさ。あたしは、そのときまだ剣の賢者を襲名してまだ2年で、変な矜持つていうかねえ……自分の作る剣は屈強な歴戦の戦士に…ほら、どうせならアルザスの先代当主とかさ、そういうのを持つてもらいたかったの。それなのに、王都の伯爵家の若いペーペーの長男様に譲れなんて、笑つちまうだろ。だから断つたんだよ。」

「若い？」

サティが興味津々な顔で瞳を輝かせた。

「ああ。もう15年くらい前になるかね、なあ、ピウ一一？」

「剣の賢者殿…もう、そのへんで…。」

「だけどさ、『自分は絶対にアルザスの名に恥じない騎士になる男です。ですから、貴女作つた剣で魔法剣を極めたい』って、そういうから、根負けさね。」

あのピウーネ卿にそんな熱血な時代があつたのか。サティが楽しげに剣の賢者の話を聞いていると、その瞳を見て、ニッ…と笑った。

「そのピウーネが、ネズミ?しかも、愛玩系の?…やだーもー、すつじに見たいわー。」

「かわいいですよ。金色の毛がふわふわしてて。」

「おー、サティ!」

ピウーネ卿の顔が若干赤くなっている。普段は落ち着き払っているピウーネ卿の慌てた姿を見るのは、なんとなく面白い。そんなサティを見つめていた剣の賢者は、瞳を細める。

「あんたもね、サティ?…理の賢者んといひの弟子だらう?…」一
んなちっしゃかつたのに、いつのまに大きくなつたのや!。

「え?」

「覚えていないかい? あたしが、剣の賢者を襲名するときに、理のじーさんに連れてこられたことがあつたろう。」

「ええ?」

あはははつ…と、剣の賢者は再び笑つた。サティには全然記憶に無い。…多分、4・5歳の時だつたのだろう。正直、その頃は完全に封じた魔力を少しずつ解放する訓練をしていて、身体も心もつらかつた頃だ。つらい修行を強いられているように思えて、当時の自分は大層無口で無愛想だった記憶しか無い。今にして思えば、可愛くない子供だったに違いない。何か粗相でもしたのかと、心配になつ

た。そんなサティの表情を汲んだのか、剣の賢者は優しい微笑みになつて、大きな手でサティの頭を撫でた。

「あんときもたいした子供だつたけれど、立派になつたじゃないか。理のじーさんもさぞ鼻が高いだろ？」

「そ、そんな」とありません、私なんてまだまだで。」

「そんなことはない。」

ピウーー卿が被せるよに即答した。

「サティは、古の魔法にも通じてゐるし、魔法陣も術式も多く生み出せるのだらう。」

「でもう」

「まあまあ、あまり見せ付けないでくれよ。」

なんですかそれどうこいつ意味ですか！？…とサティが反論する前に、ニヤニヤ笑っていた剣の賢者は表情を引き締めた。

「…で、2人はトネリコの木を見つけたのかい？…確かにこの奥に、トネリコが余つていたと聞くが…」

「あ。」

「ああ。」

ピウーー卿とサティは顔を見合せた。…2人には時間制限がある

のだった。急いで立ち上がる。

「…ひつしている時間は無いのでした。…剣の賢者殿、恐れ入ります
が私達は…」

…ピウニー卿が一礼する。その慇懃な態度に、苦笑しながら剣の賢
者は言った。

「いや、それは構わない。…あたしも一緒にいくよ。」

「え？」

「なんだい、文句あるのかい？」

「…い、いえ。」

文句などはあるはずが無い。心強い味方だった。…ただ、若干その
迫力に押され気味のピウニー卿と、なぜか剣の賢者を憧れの瞳で見
つめるサティとは、少しばかりテンションの温度差があったのは、
否めない。

* * *

「…ふむ…それで、ネズミになってしまった後も、剣が使えている
…となあ。むづ…。」

剣の賢者と共に森の中を進みながら、話はピウニー卿の剣が、体の
サイズに合わせて伸び縮みする…といつ話題になつた。やはり剣の
賢者は自分の作った剣が気になるのだろう。だが、そういう事象
は聞いたことが無い…と首を捻る。

「剣を構成する物質の網目の中に魔力が入り込んで、それらが作用しているのではないかと踏んでいるんですけど。」

サティの言葉に、うーん…と唸つた。

「確かに、魔法剣の場合はそういうこともありまするがなあ…。だが、あれは私が最初に作った魔法剣用の剣だ。ネズミど人間くらいのサイズに伸縮するとなると、素材の比率を極限まで抑えた上で、残りは自身の魔力を最初に投入して…できるかどうか。…そもそもあの剣は、そんな風に作ってはいけない。使いこなしている内にピュニーの魔力が素材に浸透した…としても、ピュニー自身の魔力はそれほど多いわけではないしな。…うーん」

「…ということは、別の魔力が介在している、ということですか？」

魔法剣というのは、その名の通り、剣に魔力を帯びさせる魔法だ。込める魔力によって、耐久力を高めたり、殺傷能力を上げたり、属性を付けたりする。ピュニー卿の場合は、呪文不要で魔力を剣に通し、殺傷能力を上げるという戦法を得意としていた。

魔法は、通常、金属との相性が悪い。魔法や魔力という柔軟な力に対応するには、頑なで頑固な素材だからだ。魔法使いが金属製の鎧を身に付けないのは、そういう理由もある。そういう相性の悪い金属を魔法の媒体にしよう、というのが、魔法剣という研究だ。魔力の鎖によって素材同士を結合させることによつて、その網目にさらに魔力を注ぎ込むのが基本だ。金属を打つときに特殊な魔力を注ぎ込んだり、あるいは、比較的柔軟性の高い素材で作った剣に魔力を少しづつ込めたり、手つ取り早く魔力をチャージした魔法石を柄に埋め込んだり、様々な手法がある。注ぎ込む魔力は、金属を媒体としやすい属性が必要だから、個人の資質も重要だった。物質の隙間

に魔力が介在しているから、その比率によつては大きさが伸縮することも可能性としてはある。武器の形状を変える魔法も存在する。

ピウニー卿が手にしている剣は、剣を打つ段階で剣の賢者の魔力を注ぎ込んでい。それをピウニー卿が使い込む内に、魔力が入れ替わっていく計算だ。だが、それと言つても、騎士剣から針までのサイズに変わる柔軟性を帯びるなど、聞いたことがない。剣の賢者は立ち止まり、一番後ろを歩くピウニー卿を振り返つた。

「おー、ピウニー、ちょっと剣を見せてくれないか?」

「分かりますか?」

「さあなあ。…私としても、そういう話はあまり聞かない。…だが、手にとれば、作つたときと今の剣と、違いは分かるさ。」

ピウニー卿は頷いて、剣を抜いて柄を渡した。剣の賢者はそれを受け取り、まじまじと見つめる。

そして、見つめる表情が徐々に険しくなつてきた。

「ああん…?」

物騒な声を上げる。

「どうしました?」

何かあつたのかと、ピウニー卿が眉を潛めた。

「どうしたも、何もないよ、これ。…あんた、この剣で何をやつた

「…んだい。」

「…どうこう意味ですか。」

「この剣に込められた魔力は、ピューーのもんじやないね。そつくりそのまま、別の存在に入れ替わってるよ。」

「別の、存在?」

「別の魔力」…とは言わずに「別の存在」…と剣の賢者は言った。
…全員の足が止まり、その言動に注視する。サワ…と風が吹いて、
周囲の気配が変わったような気がした。その雰囲気にピューー卿が
びくりと眉を動かすものの、魔物の気配は無い。それでも自然、サ
ティの背中を包み込むよつな位置に立つ。

「やうだ。別の存在…心当たりがあるんじゃないか?…ピューー。」

ピューー卿の表情が硬くなつた。サティにも分かる。ピューー卿の
剣がこいついた状況になつたきっかけ。いや、そもそもピューー卿
の身体をネズミに変える大きな呪いをかけた、あの存在。

「ウイロー・ナ・ムラン・イアティ=マハ・マハジユーレ…?」

…サティが思わずその名を口にした、瞬間。

グオオオオオオオオオオン…!-

「くつ…-」

剣の賢者が持つピューー卿の剣が咆哮し、その手を離れた。咄嗟に

ピウニー卿がサティの身体を抱き寄せ、セピア色の髪を抱える。剣の賢者の手を離れた剣は、地面に勢いよく突き刺さり、その剣を中心で今まで感じたことの無い魔力が渦巻いた。

「いや、ただ1人、ピウニー卿は感じたことのある魔力だった。これは……」

「……魔、竜か……？」

『いかにも。』

『グルル……と唸り声にも似た、重々しい声が響く。』

『いかにも、我はグラネク山の魔の竜。ウイロー・ナ・ムラン・イアディ＝マハ・マハジュー＝レ！』

バキバキと周囲の木をなぎ倒し、再び大きな咆哮が轟く。
3人の眼前に現れたのは、

狼くらいの大きさの竜？…だつた。

020・魂が抜けかかった

『いかにも、我はグラネク山の魔の竜。ウイロー・ナ・ムラン・イ
アティ＝マハ・マハジュー！』

現れたのは、狼ほどの大きさの竜？だった。その竜？の身体は、黒光りする鱗に覆われ翼は厚い。前足には鉤のように鋭く曲がった爪が五爪。足はどうしおりと地面を踏みしめ、ふしゅう…と吐く息は焦げ臭く、魔力が満ちていた。だが、竜としては…なんというか、ピューネ卿の記憶にあるそれよりも遥かに小さい。全員がその存在を見下ろせる位に小さい。

竜？は、微妙な空氣を読まず、むふうーと鼻から息を吐いた。魔力はとても濃く、油断なら無い脅威なのは分かる。だが恐ろしい雰囲気はなぜか感じられない。本当に、これがオリアーブ国の国王を立ち上がらせ、ピューネ卿の身体を呪つた竜なのだろうか。

『ふつふつふつ…驚いて声も出せぬか。…さもありなん。ピューネよ、そなたのことはずつと見ておつたぞ。妙ちくりんな虫を斬つたあの剣筋は見事であつたな。しかし、人参のグラッセは半分に分けるべきであった！』

「え…あの。」

もはや記憶の彼方にあつた人参のグラッセのことを蒸し返され、ピューネ卿の表情がますます微妙なものになつた。

『そしてサティよ。』

「あ、え、は、はい。」

『そなたは、よくぞ我の名を呼んだ。さすが古の魔法に精通しておる、食えぬ魔法使いよの。』

「はあ。まあ。」

『確かに、サティはオリアーブ王国に古くから住まう魔物の名や、固有名詞、伝説なども研究の一環に取り入れている。魔竜の名前もそういう伝承によつて伝え聞いたものだ。』

『そなたが魔力を込めて名を呼んでくれたおかげで、我は剣の形から自分を解放し、こうして元の姿に戻ることが出来たのじや。礼を言つや。』

「元の姿…？」

怪訝そうな声を上げたのは、剣の賢者だ。元の姿…といつのはありえない。せめて、この50倍くらいは大きくなれば、元の姿とはいえないことくらい誰にでも分かる。だが、そんなことはお構いなしに、竜？はふんぞり返つた。

『そして、そなたは剣の賢者じゃな？ 先ほどから聞いておつたわ。そなたが作った剣は我的魔力にも耐えうるほど筋のよい剣であつた。だからこそ、我は剣が吸つた血と魔力に己を閉じ込め、こうして再び大地と森と空の下に、復活することができたのじや…。』

グオオオオオン！！

竜？は雄たけびを上げた。天に向かって息を吐けば、それは青い炎

のブレスとなつて辺りの温度を上昇させた。咄嗟にピウニー卿がサティを背に庇い、剣の賢者が身を低くして、背に負つた武器に手を掛けた。その様子を見て、むふん…と竜?は笑つた。

『心配せぬともよい。… 我は、そなたらに害を為そつとは思わぬ。』

サティは瞳を凝らした。… 自らの内にある魔力に集中し、目の前の竜?の魔力を読んでみようと試みる。竜?の言つとおり、禍々しいものは感じられない。とても猛々しい濃い魔力だが、言い換えれば清浄で力強い。それに…。

「剣に己を閉じ込め… つて、どういふこと?」

我に返つたサティの、至極まつとうな質問に、竜?はグオオオオンと再び咆哮を上げた。

そして、呆気に取られている3人に、己の身の上を話し始めたのである。

* * *

グラネク山に住まう魔竜はもともと、知性の高い存在だつた。オリアーブ王国の建国と同じくらい、古くからグラネク山に住まい、大人しく、人に危害を加える事は無かつた…といつ。そもそも魔物という生き物は、一部にはもともと凶暴なものもいるが、動物と同じで、魔力のバランスを崩しさえしなければ、他の生き物になりふり構わぬ害を加えるようなものではない。魔竜ももちろん例外ではない。そして、知性が高いゆえに、魔力のバランスを崩さぬように生きる術も心得ていた。グラネク山の山頂で、静かに鉱石を食べて生きていたのだ。

だが、ある日、そこに1人の魔法使いが訪ねてきた。

その魔法使いは魔竜が大人しいのをいいことに、この竜に呪いをかけようとした。もちろん魔竜も果敢に応戦し、呪いに抵抗した。だが、最終的には魔法使いが勝利したのだ。なぜならば……。

『彼奴は、我の愛しい眷属達を人質にしたのじゃ……。』

『眷属?』

『いかにも。グラネク山に住まうワイバーンや蛇たち。我が魔力を調べ、人に害を為さぬよう、グラネク山の魔力の均衡を守るようにしてやつたものどもよ。哀れなその子らは、あの魔法使いによって魔力を乱され人を襲うようになった。人であれ何であれ、襲われて戦うのは撲殺じや。我も文句は言わぬ。だがな……、それがあの魔法使いによって歪められた撲殺だと思うと口惜しううて……。』

サティがピウニー卿の服の裾をぎゅ……と掴む。複雑な思いを抱えたピウニー卿は、声を低くした。

『その、呪いとはどういうもののなのだ。』

魔竜の話によるとその呪いは、魔力の流れを止めることにより、己の身の魔力の全てを魔竜の意識から切り離す呪いだった。このため、魔竜は自身の魔力を自身で操ることが出来なくなつた。

魔竜は「魔」の「竜」だ。魔力と肉体のバランスによつて知性を保つ。他の魔物が凶暴化する程度の魔力の乱れならばどうということもないが、魔力そのものの流れが止まれば流石の魔竜の理性も狂つた。

魔力のバランスを失つた魔物は人を襲う。竜とて、それは同じだ。理性という咎を奪われた魔竜はそれでも、人を襲わぬように己の内で荒れ狂う破壊衝動と戦つた。その苦しみは、近隣の村を焼き、旅人を追い払つた。最小限の被害に食い止められたのは、魔竜が最後の一線まで己の衝動と戦つていたからだろう。…だが、徐々に疲弊してきた。もう少しで自分の理性は完全に瓦解し、問答無用で国を焼き尽くす竜に成り果てる。そんなときに、ピウニー卿一行がやってきたのだ。

魔竜は歓喜した。

己の苦しみを断ち切る勇敢な人間達がやつてきたのだ。これ以上の喜びはなかつた。

だが、破壊衝動が収まつたわけではない。魔竜とピウニー卿らとの戦いは熾烈を極め、人間の剣は魔竜の血を吸い、人間の身体は魔竜の吐く息で焦げて牙に傷ついた。それでも、最後の決着の付く時が来た。ピウニー卿の剣が魔竜の喉笛を捕らえ、切り裂いたのだ。これで終わる。それぞれの思惑が全く別のものとしても、戦いに終止符が打たれる。魔竜は安堵して、地面に倒れる。

…しかし、それだけでは終わらなかつた。

魔竜の断末魔の咆哮の凄まじさは、己を蝕む呪いを吐き出した。

死の瞬間、その咆哮によつてその呪いの楔が吐き出され、周辺の生ける者全てに降りかかるとしたのだ。

いち早くその気配に気付いたのは、ピウニー卿だつた。彼は、死の咆哮を上げる魔竜の眼前に剣を構え、竜にも負けぬ雄たけびを上げてその呪いを全て受け止めたのだ。魔竜は死に行く中で、ピウニー

卿の意志に気付いた。この男は、他の人間に…生き物に、自分の上げる咆哮が届かぬように受け止めている。ならば…と、魔竜は、自らの血を吸つたピウニー卿の剣へと己の魔力を全て注ぎ込んだ。己の肉体の一部と魔力さえあれば生き残ることができる。この勇敢な騎士を死なせるには忍びない。魔竜は最低限の力で生き残り、この哀れな騎士を助けようと心に決めた。

耐え切れぬかと思ったその剣は、魔竜の魔力に耐えた。こうして、魔竜はピウニー卿の剣が吸い込んだ血を自分の肉として、…つまり、ピウニー卿の剣を構成する魔力そのものとなつて生き延びたのである。

たつた一つだけ、予想外のことを残して。

呪いを全て受け止め死んでしまつたかと思つたピウニー卿は生きていた。死なば、己と同じように剣に取り込み何らかの機会を『』えてやろうと思つたのだが、予想外に、元気に生きていた。

…ネズミの姿で。

『そじど、我は己の姿をネズミの姿に呑みついに変化をせし、この男の側におつたのじや。』

「え。」

魔竜はピウニー卿の剣に浸み込んだ血に姿を変えた。そしてその血は剣を構成する素材そのものに溶け込んでいく。血を使って己の姿を戻すには、己の名を知つてゐる人間に呼び戻される必要がある。魔竜の名前は古の魔法語だ。名前そのものが魔竜を留める力で、術式となる。

『剣が無いと困るだろ？と思つてな。…サティよ、お主に出会い、その呪いが中途半端に解けたのには驚いたぞ？…おかげで、剣の大きさを調整するのが大変だつたが、なかなかに上手くできつただろ？』

「中途半端…？」…と剣の賢者が表情を動かした。サティは久々に呪いを解いたきっかけを思い出して、いたたまれない気分になる。

1人、心が落ち着かない人間が居た。

くかか…と笑う魔竜の言葉に、ピウニー卿は愕然としていた。側に居た…というのはどういうことなのか。この話が本当であれば、今までずっとサティと2人で会話してきた…というより、独り言とも全部筒抜けだつた…ということか。ああ、そういえば人参のグラッセのことを知っていたし、そうなれば、あんなことやこんなことまで知つて…いるのか…！？

ピウニー卿の魂が抜けかかつた。

『安心せい、ピウニー。そなたのプライベート的などいは、私は見ておらぬ。』

「プライベート的な？」

サティがすぐ隣のピウニー卿を見上げる。

ピウニー卿の魂は抜けていた。

『だから見ておらんといつのこと。』

* * * *

「それにしても……私は一体何といつことを……。」

魔竜の性格はともかくとして、邪悪な存在ではない竜を討伐してしまった……というのは、ピウニー卿に衝撃を与えたようだつた。確かに、国の凶悪化した魔物を討伐する任に着いてはいたが、元来正義感の強い男である。害為す魔物は倒してきたが、そうではない魔物には手を出さないように徹底していた。魔竜が呪いによって暴れていたとはいえ、邪悪な存在ではなかつたことに強い罪悪感を覚える。魔竜はそんなピウニー卿に、グルル…と吐息を吐いた。

『気に病むな。ピウニー。そなたは我を救ってくれたのじや。そなたが我を倒さなければ、我は人であろうと眷属であろうと、命果てるまで見境無く襲い、燃やし尽くしておつたじやろつ。』

「しかし……私のせいで、そのような姿になってしまったのではないのか？」

『身体が小さっことか?』

魔竜の金色の瞳が細まった。

『ピウニーに相見えたのが我的本性だが、我は魔力を取り戻しさえすれば大きさはいくらでも変えられるわ。幾ばくかの休息は必要だが、剣より復活した今ならばそれほど経たぬ内に戻れる。そなたとて、姿かたちが変わつてしまつておるのじや。ピウニーよ、もし我に赦しを請いたいというのならば、我らをこのようにした魔法使いを探せ。恨みを晴らし、この炎で骨まで焼き尽くしてくれようぞ!』

魔竜はそういうて、グオオオオオオオオオ！…と一際大きな咆哮を上げた。

「魔竜に呪いをかけた魔法使い…。一体誰が何の目的でそのようなことを。それに魔竜の言つことが本当であれば、魔竜の魔力を断絶させた呪いが、ピウニー卿の姿を変えた…といつことになる。魔物の理性を狂わせて、人間の姿形を獣に変える呪い。魔力というのは感情や自分の力に密接に関係していく、その関係性はいまだに完全に解けてはいない。…魔力の流れを止めるだけでなく、人としての意識下から切り離す…。人の姿を維持できなくなる…？」これは自分達の呪いを解く鍵になるかもしれない。悶々とサティイが考え込んでいたが、それを払拭するように剣の賢者が口を挟んだ。

「ああん？…てえことは、魔竜とピウニーは和解した、つてことになるのかい？」

『それもよからう。人の子の友ができるとこ「のも、悪くない。』

まんざらでもなさそうな魔竜はふしゅうと息を吐いた。やがて魔竜を囲む魔力が濃くなり始める。魔竜はバサリと翼を広げて宙に浮いた。巻き起こる風に、その場の3人が眩しげな表情になる。

『ではさらばじゃ、ピウニー卿、サティイ、剣の賢者よ。我的炎が必要であれば、この名を唱えよ。』

『ウイロー・ナ・ムラン・イアティ』 フロット・フォン・ド・ラーゲ・ベネカ・イエズ・マーレ・マハ・マハジューク

『オウイクーブ・オーン・アナクーヴ』

魔竜は自らの魔力を呼ぶ名と、その吐息を召喚するための魔法語を唱え、大空へと飛び去つて行つた。

天を仰いだ剣の賢者が言つた。

「いつ

021・プライベート的なって何？（前書き）

戦闘シーンがあります。

021・プライベート的なって何？

ひとしきり語つたあと、天へと飛び去ってしまった魔竜を見送りながら、ピウニー卿はため息をついた。あのようすに言われても、やはり心中では割り切れないのだろう。魔竜の飛び去った方向を見つめるピウニー卿の横顔を、サティはそっと伺つた。ふわふわの小さなネズミの時は違ひ全く可愛くないが、整つた横顔は力強くて凜々しい。無造作な無精髭も、硬そうな首筋も、この人が自分とは全く異なる男という生き物なのだとこうことを思い知らされる。

そんな横顔を見ながらサティは考える。…ピウニー卿と魔竜との戦いの様子を、初めて聞いた。魔竜の最後の咆哮を防ぐ為に、自分を犠牲にしようとした正義感の強い騎士。それがピウニー卿。よく考えてみれば、「竜殺しの騎士」という二つ名で国王の信頼も厚い、武家の名門の長子なのだ。…この旅が終われば、この人も再びそいつた戦いに戻るのだろうか。そうなれば私も元通り理の賢者の元で弟子生活に戻るし…、そうか、離れることになるのか。一緒にいて当たり前みたいになつてたから、そんな事態など考えたことも無かつた。…それに、何よりも…。また、己の正義感に従つてこの人は戦いの最中に危険な真似をするのではないかだろうか。自分のいいところで…複雑に絡み合う思いがサティの胸に一気に降りてきて、思わずピウニー卿の腕を掴んだ。

「サティ？」

腕を掴まれたピウニー卿が、我に返つたようにサティを見下ろした。「どうした？」と首を傾げる。どうした…と言われても、上手く言葉に出来るはずがない。困ったようにつづつむけたサティは、誤魔化すように全く別のこと答えた。

「……ト、つて。」

「ん?」

「プライベートって何?」

「え。」

「魔竜の言ったプライベート的なって何?」

一瞬、魂がさよならしかけたが、そこはすぐがに騎士たるペツカ
ー卿。我に返つて首を振る。

「何も無い。そこを蒸し返すな。」

「蒸し返してはいなこよ。」

「氣にするな。」

「氣になる。」

ねえねえと腕を引いて首を傾げてみせる。精悍な顔が慌てふためき、
上目遣いのサティに気圧されるように仰け反っている。そんな2人
に、じほんと咳払いが聞こえた。

「なあ、あんたら、こんな」としている場合かい? もうちょっと
進めば森の端だ。崖がある。トネリコが生えてるのはその手前くら
いだり。氣をつけて行くよ。」

剣の賢者の声に、ピウニー卿とサティは顔を見合せた。

「やうだ！…早くトネリコの木を見つけるぞ、サティ！」

キイイイイイキイイイ…。

話題が逸れることに安心してピウニー卿がサティを振り返ったそのとき、奇妙な声が聞こえた。ザア…ッ…と再び森の木々が震え、魔竜の魔力とは別種の…今度こそ、明らかに攻撃の意志を持った特殊な魔力の気配がする。ピウニー卿はサティを背に庇い、剣の賢者は自分の愛剣の柄を握る。

茶色の毛皮に虎のような太い足、顔は醜悪な猿で、揺れる尾は蛇…放つ力はどうみても魔物であろう生き物が、3人の眼前に姿を現した。

「…ヌエ、か。手強いな。」

放つ魔力は雷を呼ぶ…といわれている、珍しい魔物ヌエ。普段は滅多に人の前に姿を現すことの無いその魔物は、いざその魔力が攻撃に回れば脅威だ。そして、どう見ても、眼前の魔物が大人しいとは思えなかつた。大きさは馬より一回り大きいほどはあるうか。

「来るぞ…。サティ下がれ。」

「でも、ピウニー…。」

「いいから！」

キイイイイイ…。

ピウーニー卿がサティを一步下がらせたと同時に、鳴き声を上げてヌエが跳躍した。ピウーニー卿は腰の剣の柄を握った。

剣が無い（まさかの）

「…………くそつ、魔竜か！あの魔竜か！私の剣が…………」

ピウーニー卿の咆哮が森の中に響いた。魔竜が復活したことによつて、ピウーニー卿の剣は跡形も無く、消え失せたのだった。

* * * *

ピウーニー卿はサティの腕を引っ張り身体を木に押し付けるように庇う体勢を深くすると、腰の後ろに装備していた短剣を抜いた。魔力を送れば折れてしまうだろうが、一撃分くらいは保つだろう。一気に引き抜き、眼前に構える。

大きいために動きの鈍いヌエの一発目は逸れる。だが、2発目を狙うヌエは真っ直ぐピウーニー卿を見ていて、キキイ…と小さな鳴き声を上げている。ヌエの頭が下がり、蛇の尾がこちらを向く。

キキッ… キイイイイイアアアアアア…！

跳躍！

…ピウーニー卿が一步踏み出し、ほとんど体当たりの体勢でヌエの前に踊り出る。

「悪く思つな――――――！」

ドーン！

ピウニー卿の短剣が届くよりも前に、ヌ工の横腹が衝撃を受けて胴体が吹っ飛んだ。衝撃の源には、登場したときと同じ蹴りの構えを取りつた、剣の賢者。

「剣無しで何やうひてんだい。ピウニー、これを使いな！ 魔法も使える。」

「かたじけない！ サティ、お前は向こうへ。」

剣の賢者は背負った剣の一本を鞘」とピウニー卿に向かつて投げた。それを受け取ると短剣を元に戻し、ピウニー卿はサティを剣の賢者の方へと押しやる。すぐさま鞘から剣を抜いた。

「ピウニー！」

剣の賢者もピウニー卿の側に来て、サティを背に構える。杖の無い自分がもどかしく、サティは唇を噛んだ。だが、サティは思い当たつて顔を上げる。杖、あるわ。一本、世界で一番扱いにくいヤツが。自分の魔力に適合させていない他人の杖を使うのは、基本的に過剰なバランスを生むか、まったく力が足りないかのどちらかだ。そもそも、杖に封じているオリジナルの魔法は呪文が分からなければ使えない。が、サティが思いついた杖には、サティも知っている呪文も込められているはずだった。魔力のバランスが心配だが、贅沢は言つていられない。

<アーヴィング・オ・イラウォート・オ・イエート>

(理を司る賢者の杖よ)

その魔法語を理解した剣の賢者が、ハツと顔を上げてサティを振り返る。

「おいおい、サティ、それは…。」

「…サティ？」

怪訝そうなピウニー卿と、剣の賢者、2人の言葉を無視して、サティは呪文の続きを唱えた。

〈イハシュ・オ・ト・グレン…〉

(縁石より出力せよ!)

サティが首から掛けているグリーンの石が光り、その眼前に現れたのは、ナナカマドの木で出来た理の賢者の杖だ。サティが杖を掴むと、バチ…と小さな魔力が弾ける音がした。チクリと手のひらに痛みが走るが、掴めないほどではない。

「うつわ、師匠の杖、バランスわる。」

「サティ、下がつていろと…。」

「ピウ、私も一応魔法使いの端くれなんだから、バカにしないで。」

…ビンかで聞いたことのあるよつた台詞に、ピウニー卿は眉を潜める。

「…バカになどしておらん。だが、」

「来るよー…サティ、あんたその杖使う意味、分かつてるんだろうね。」

「すみません、2撃目のチャンスを無駄にして…援護に徹します。

」

「聞いてるのかい！」

剣の賢者が構える…ピウニー卿は、相変わらずサティの様子が気になるようだ。だが、腹を蹴られたヌエが起き上がり、頭を振つてこちらを見つめて、意識をそちらに向ける。

「分かつてます。」

剣の賢者の言葉に、サティは頷いた。師匠の杖のバランスが悪いのは…

キイイイイイイイイ…！

起き上がったヌエが跳躍する…と思つた瞬間、天に向かつて吼えた。剣の賢者とピウニー卿が地面を蹴り、それに重なるようにサティが呪文を唱える。

〈オグウィーブ・ネツィアナク・オ・アーラク・ウォハーマ…〉

(魔力が生み出す力より完全なる防御…)

バチバチ…と、指が焼け付く。唱えたのは魔力に対する完全防御だ。座標はピウニー卿と剣の賢者、そして自分。サティは自分の身体から魔力が吸い取られるように一気に無くなるのを感じる…不味いな、

と思った瞬間、ものすごい脱力感が身体を襲つた。師匠の杖のバランスが悪いのは、サティの魔力を超える…国でも最も上質の魔力に適合した杖だからだ。下手に使つたら魔力が一気に放出されて、さらに体力が魔力に置換される。自分の魔力が完全に戻っているならまだしも、3分の1しか使えないサティにとって、この杖を使うといふことは確実に体力を削ることを意味する。だが、それを悟られないように、サティは杖で身体を支えた。

ヌエの咆哮は、魔力の雷を呼んだ。細かい雷の矢が無差別に降り注ぎ、周辺のいくつかの木が音を立てて割れる。だが、3人の身体は無傷だ。魔法の効果を受け、剣を構えた2人は雷を無視して一気にヌエに距離を詰めた。剣の賢者は前足の付け根を、ピウニー卿は身体を低くし喉下を狙う。ヌエは身体をよじり、ピウニー卿の斬撃をかわしたが、剣の賢者の一撃が腹を掠め、ピウニー卿は避けたヌエの動きに合わせてさらに斜めに踏み込んで身体ごと剣を押し付けた。

ギイイイイイアアアアアア！

耳を塞ぎたくなるような鳴き声。ヌエは自分の身体にピウニー卿の剣を刺したまま、頭を振り上げた。ピウニー卿は剣から手を離さない。振上げられるままに身体を翻し、ヌエの背に掴まると、刺さった剣に魔力を込める。剣の賢者はヌエの後ろ足を斬り付けると、再び剣を構え直した。

後ろ足と肩を傷めてガクンと揺れたヌエは、キキイイイ…と涎を垂らしながら…、

…サティを見た。

再び跳躍！

「サティ！」

「…きや…！」

急に大きく揺れたヌエの背で、突きたてたままの剣を握つてピューニー卿は身体を支える。思い切り剣を引いてダメージを与え、ヌエの突進のスピードが落ちたことが幸いした。バランスを崩して後ろに倒れたサティは、襲い掛かってくるヌエに向かつて杖を横に倒して突き出し、防御の構えを取る。〈オグウィーブ！〉（防御を！）：必死に放つた呪文は短いが、杖の方針によつて、込められる魔力と威力は最大級だ。防御の魔力に弾かれて、ヌエが後ろに大きく弾き跳ばされる。

「ピューニー、耳の後ろが急所だ、そこを狙いな！」

剣の賢者は叫びながら倒れたサティの下に駆け寄り、その身体を庇つた。剣に掴まり揺れを堪えたピューニー卿はもう片方の手で短剣を抜き、…ヌエの耳元に向かつてそれを突き立て…短剣が崩れ去るほどの魔力をそこに込めた。

022・頬に触れた優しい温もり

キイイイキイツイイー！

ヌエの放つ鳴き声の様相が変わった。恐らく最期の叫び声を上げながら、ヌエは走り始めた。

「やつたか…ピカーネ？…おい、ピカーネ？ ビジだ…待て、そつちは…」

剣の賢者の表情が曇る。ヌエの背にさきほどまで見えていたピカーネ卿が…居ない。それに気付いた瞬間、剣の賢者の脇を小さな生き物が飛び出した。

「ピウーーー

「サテイ、ダメだ、来るな！」

来るなって言われて誰が躊躇うか、バカピウーー！
サテイは、トン…と杖を踏むと、呪文を唱えた。魔力の枯渇など、かまつていられない。

↙エポートトウ・イラウーフ・オ・アダアーラ・サテイ！>
(サテイの身体よ、重力から離れ跳躍せよー)

猫の小さな身体がさらに軽くなり、まっすぐに目的の方向へと跳躍する。目指す方向には、ヌエの身体から落下するピウーー卿だ。

ぱくー！

跳躍したサティは、小さなネズミの身体を見事キャッチする。眼下には落下していくヌエの身体。重いヌエの身体は刺さった剣と共にすじこスピードで落下してこそ、あつといつまに崖下へと見えなくなった。

崖下。

崖下？

「サ…サテイ…！」

」。」

落ちる…。完全に落ちる。いや、もう落ちてる。ゆっくり落ちてる。魔法の力で軽くなっているため、ゆっくり…だけど確実に落ちてる。やばいやばいやばいやばいやばい、岸に！ 岸に到達しなければ…サティがピューイー卿を咥えたまま、じたばたと（猫だが）犬かきに挑戦した。だが、とても岸には到達できない程度に…落ちていく。ああ、これは…落ちる。全員が認識した、そのときだった。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

巻き起こる突風、満ちた魔力。

比喩表現ではなく地形的な意味で、崖下ふちの剣の賢者の眼前を何かが横切つた。この咆哮、この魔力は。

がしつ！

「…魔竜か？」

剣の賢者が眩しげに瞳を細めて、その魔力の源を見定める。剣の賢者の側に降り立つたそれは、前足で掘んだ何かを、よいしょ・と地面に置いてこう言い放つた。

『いかにも、我はグラネク山の魔の竜。ウイロー・ナ・ムラン・イアディ＝マハ・マハジューレ!』

先ほど聞いたばかりのぐだりが再び繰り返される中、足元では、金色のネズミとセピア色の猫が毛皮を膨らませてゼエハアと息をしていた。

それを見ながら剣の賢者が思わず言つた。

「戻つてくるの早つ！」

…いや、ありがたいけど！

* * * *

「…魔、魔竜、助かつた。礼を言つ。」

魔竜はやはり狼程度の大きさだった。魔竜はふしゅうと鼻息を吐く。二マリと瞳を細くした。

『礼には及ばぬ。山へ帰ろうかと思ったのじゃが、伝え忘れたことがあつてな。サティは大丈夫か?』

「サテイ！」

ふんぞり返った魔竜の言葉はほほ聞かず、ピウニー卿はぐつたりとしているサテイの側に駆け寄った。その顔の毛皮にそっと手を埋めて撫でてやる。

「サテイ、大丈夫か？」

「う、ん…大丈夫。」

「…理のじーさんの杖みたいな、変態杖使うからだよ、つたく…。それにしても、あー…本当に猫とネズミになるんだね。可愛いもんだ。」

弱々しく返事をしたサテイの背を、剣の賢者が撫でる。じげ茶色の丸い瞳で剣の賢者を見上げるピウニー卿に、剣の賢者は頷いた。

「魔力使いすぎたんだよ。家で少し休んで行きな。ピウニー、あんたの剣もどうにかしないとね。」

「しかし、杖の賢者のところに行かねば。」

「ああ、それなら…。」

「ピウ…？」

剣の賢者が何かを言いかけたが、自分を呼ぶ弱々しい切なげな声にピウニー卿は顔を摺り寄せた。

「どうしたサテイ。」

「…を。」

「なんだ？」

「ヌエが雷落としたときによトネリコ割れたからそれを…。」

「ああ、分かつた…おい、サティ、大丈夫か？ サティ？」

グリーンの瞳を閉じて、耳がしょんぼりと寝てしまったサティをそつと揺する。氣を失つてしまつたようだ。ピウニー卿はサティの口元をぽんぽん…と小ちく叩いて、剣の賢者を振り返つた。

「剣の賢者殿…。」

「ああ、心得た。ちょっと待つてな。」

剣の賢者は立ち上がり、先ほどまで自分達が戦つていたところへと去つていつた。それを見送りながら、ピウニー卿はサティの喉元のふわふわした毛皮を撫でている。

『ところで、我的話をしてもよいか？』

魔竜は竜ゆえに、空氣が読めなかつた。

「あんた…今帰つたよー。」

「…。」

サティの身体を抱え、ピウニー卿を肩に乗せた剣の賢者は真っ直ぐに杖の賢者の館に帰つていった。途中、シャドウメアを捨い、魔竜を連れての登場にも相変わらず杖の賢者は無表情だ。剣の賢者は魔竜の前足にサティを預け、肩のピウニー卿を摘んでその上に置くと、杖の賢者へと抱きついた。杖の賢者は剣の賢者を抱き寄せ、くるくる巻いた亞麻色の髪を愛しげに撫でている。

「…え？」

その様子にピウニー卿の髭がピーンと張つた。確かに、サティが「杖の賢者は奥方がいる」と言つていなかつただろうか。…ということは、

「もう知つてると思つうけど、あたしの旦那の杖の賢者だよ。」

剣の賢者は、幸せそうに笑つた。

* * *

シーツを掛けられてすこやかに眠つている猫の口元に、ネズミが顔を寄せている。

次の瞬間、ピウニー卿の目の前に、人の姿に戻り、長い睫を伏せて眠るサティの顔があつた。

あれからサティはずつと眠つている。体力が落ちているだけだ、少し眠ればすぐに回復する、心配ないと剣の賢者は言つていたが、それでもピウニー卿は心配で目が離せずにいた。どのみちネズミの姿で出来ることは少ない。人間に戻ることが出来るまで側に居ていいくと言われたので、遠慮なくサティの側に居た。眠っているサティの

顔を見ているのは猫であっても飽きなかつたし、柔らかな毛皮に触れていれば、生きていることを実感できて安心する。

そして、今、ピウニー卿は眠っているサティを人の姿に戻した。

人の姿に戻った瞬間は唇が触れ合つほど近い。今はピウニー卿も人の姿を為している。少し顔をずらせば、恐らくそのまま触れることが出来るだろう。今ならば、手を伸ばせば肩を包み込むこともできる。髪を梳くことも、その細い身体を自分の胸に抱き寄せることも。

ピウニー卿はとうの昔から、自分の気持ちを自覚していた。

彼とて年端もいかぬ若者…というわけではないのだ。何も身に着けていない女が現れても、激しく欲情することなどは無い。最初から自分の心がこつも浮つくのは、この小柄で、生意氣で、そのくせ無防備な表情を見せる情の厚い可愛い猫が相手だからだ。サティと共に過ごすようになつてから、その肌に口付けたいと思つたことは一度や2度では無い。幾度か抱き寄せたことがあるが、戸惑つたような付かず離れずの態度を取るサティがもどかしく、騎士としての矜持と男の理性がその先に進むことを戒めた。

だが、ピウニー卿とて男だ。愛しい女が裸で抱きついてくればどうなるか。他の男に触れられれば嫉妬もする。その頬を撫でたい、唇に触れたい、抱き寄せたい…と思うのは当たり前のことだった。だからこそ、ピウニー卿は人の姿に戻るときはいつもサティに、シーツで身体を巻いてからにするよつ念を押していった。布越しに伝わる身体の曲線だけでも危ういのに、ああ何度も裸で抱きついてこられるど、いつ自分の理性が飛ぶか分からない。

サティが過剰な魔力を使って無茶をしたのはピウニー卿のためだ。ヌエから振り落とされた小さなネズミを助けるため。ピウニー卿は

心底、早く人間の姿に戻りたかった。戻ればサティを守つてやれる。サティを抱き寄せて、この腕で運ぶことができるの……もとも、サティは守られるだけでよしとする女性ではないだろう。だが、そういうことじゅもピュニー卿を惹きつけて止まない。サティを守りたいと思う反面、彼女の魔法を信頼して共に行動することに喜びを感じていた。

「サティ。」

小さく名前を呼んでみる。ピュニー卿はサティの傍らに肘を付き、セピア色の髪をそつと梳いた。しばらくそうしていたが、やがて軽く息を吐いて身体を起こした。サティの身体に体重を掛けないようになぞと近づき、遠慮がちに頬に口付けを落とす。口付けた箇所を指で撫ぜると肩まで落ちていたシーツを掛けてやり、寝台から降りた。杖の賢者に借り受けた服を着て身を調えると、静かに部屋を後にする。

……。

パタン……と閉じた扉の音を確認して、サティはそっと瞳を開いた。

自分はどうやら体力を使いすぎて、眠っていたようだ。自分の魔力を大幅に超過して体力を使い、そのまま倒れてしまつことは、魔法を使い始めた頃によくあつた。

気が付くと……自分は人間に戻つてゐるようだつた。意識はあるが身体の自由が利かないのは、恐らく体力がまだ完全に戻つていなからだう。

先ほど、ピュニー卿の低い声が耳をくすぐつたのを思い出した。名

前を呼ばれたときから、…サティは起きていたのだ。ピウニー卿の、小さいけれど熱い声になんとなく瞼を開くことができず、眠ったフリをしてしまった。

ピウニー卿の手が髪を一筋梳くたびに指が耳と首筋を心地よく滑つていく感触と、髪を梳く手が止まつてサティの頬に無精髭と熱い唇が触れた温度。たつたそれだけのことなのに胸が疼く。

サティは枕に顔を埋めた。

自分はきっと体力が落ちて弱気になつてているのだ。
そうでなければ、頬に触れた優しい温もりが名残惜しくて切なくて、涙が出そうな理由が分からぬ。

* * * *

ピウニー卿が居間に戻ると、魔竜の身体を検分していた剣の賢者が振り向いた。

杖の賢者と剣の賢者が夫婦だつたというのを知つたのは、こちらに戻つてきてからだ。理の賢者は当然知つているだろうから、サティも同様だろう。剣の賢者には確か弟子があつたはずだ。弟子には、以前の剣の賢者の館を守らせ、自分は杖の賢者の館で暮らしているということだつた。こちらの館にも自分専用の鍛冶場を作つてゐる。

「やあピウニー、休めたかい？」

「何もせずに、申し訳ない。それに、借り受けた剣はヌエと共に塵に落ちてしましました…。」

剣の賢者はピウー卿の神妙な言葉を聞いて、大きく笑つた。

「なに、あれはいいんだよ。そんなことよりも、あんたらが無事でよかつた。ああ…それにしても、ネズミの姿も可愛かつたのに残念さね。…サテイは？」

「まだ眠っています。剣の賢者殿。頼みがあります。」

ピウー卿は剣の賢者の側に来ると、深く、騎士の一礼を取る。剣の賢者は心得たように、頷いた。

「…剣を作つて欲しい、つてなんだろ？」

「ええ。」

「顔をあげな。心配しなくつてもかまわない。…あたしが作る剣は、生涯保証付きなんだよ。あんたに頼まれなくとも、ちゃんと作つてやるぞ。」

「かたじけない…。」

「その代わりや、今度はち一つと実験させてもらひつかと思つてね。」

「実験？」

『我的鱗で刀身を造り、我的炎で鍛えるのじゃ。』

ピウー卿の一言には、魔竜が答えた。魔竜が戻ってきた用件…といつのは、ピウー卿の剣を紛失してしまったことだという。剣の

賢者に、自分の鱗を使ってピウー卿の剣を作つてみよ…』といふ提案をするために戻ってきたのだ。もちろん断る理由など無い剣の賢者はそれを受け、魔竜の鱗を調べていた。

『や。…ついでに、魔竜の牙で柄を作り、その血を魔力として注ぐ…マハ・マハジューレの剣が出来るつてわけさ。』

魔竜の鱗で剣を作る…？そんなことが出来るのだろうか。
その疑問をピウー卿が口にすると、魔竜はふふん…と息を吐いた。

『我の鱗の一部はグラネク山の黒鋼石を取り込んで出来ておるのじや。だから黒光しておるだらう。合金を作るには申し分ない素材ぞ？』

「それはありがたい…が、牙は？ 血は？…口を傷つけるような真似をするな。」

ピウー卿のその言葉に、魔竜は再びふしゅふしゅ…と息を吐いた。
どうやら笑つたようだ。

『問題ないぞ。…それにほれ、もう抜いてある。』

魔竜は何故か自慢げにテーブルの上を顎で指した。そこには竜の牙と瓶に入った数滴の血が置かれている。すぐ側には綺麗な黒い艶の丸い板のようなものがあり、これが竜の鱗であることはすぐ知れた。鱗はどうやって剥いだのだろうか。痛くは無かったのだろうか。ピウー卿が魔竜にちらりと視線を向けると、その顔は竜であるために読めないが、得意げに鼻息を吐いた。

『抜いたのは親不知じゃから心配ないわ。…ま、さつき外に転がつ

ている石を喰らつたときに折れただけじゃがな。』

ああ、竜にも親不知があるのか…。どこで役に立つか分からぬ豆知識をピューニー卿は得た。

* * *

杖と剣の2人の賢者が住まう館を伺う、1人の騎士がいた。すこし垂れ目氣味の甘い瞳。蜂蜜色の髪の毛。軽薄そうなその顔には、目的のものを見つけた喜びに小さく笑みを刷いていた。今まで不確定だったものが、確定に変わる喜び。自らの予測は外れていなかつた。むしろ、正しかつたのだろう。

「思つたとおりです。きっと本物でしょうね。」

騎士は1人、にっこりと笑つた。

「竜殺しの騎士、ピューニーア・アルザス殿。」

【小話】 ヴィルレー公爵の場合

「やあ、ヴィルレー公爵。今日は授業が無かつたはずだけれど?」

「ジョシュ殿。お体の調子はよいのですか?」

「うん。今日は随分いいんだ。」

ヴィルレー公爵。アンヘル・ヴィルレーは、国王の用で王宮に出向いていた。王宮まで来たのなら、ついでに王子のところにも寄つてやつてくれと国王に請われ、ジョシュの部屋へと向かう途中、中庭に面した渡り廊下で本人と鉢合わせたのだ。ジョシュの後ろには、ペルセニーアが控えている。

「陛下のところに寄つておりました。殿下にお会いできる許可を得まして、じわじわして。」

「許可? 父上?」

…ジョシュは苦笑して、困ったように頷いた。

国王はあまりジョシュに会おうとはしない。この身体の弱い王子をどう扱つていいのか、分からぬのだろう。有能であるのに身体が弱いため重用することもできず、剣や魔法を持たせてやることもできない。国王という人間が王太子という人間に「える」との出来る何もかもを、ジョシュに与えることができない。それを国王は苦悩しているようだった。それならば、ただ親の愛情を与えればいいものを…。アンヘルは、国王がこの聰明な王太子を誰よりも大切に思つていることを知つてゐるが、ジョシュは国王と会えないことを誤

解しているようだつた。王族という家族に、愛情の行き違いやすれ違いが起こるのはよくある話だ。

ジョシュは苦笑を、穏やかな微笑みに変えてアンヘルを見上げた。

「よければお茶にしよう。セラフィーナは元気?」

「ええ。また連れてきましょう。」

「是非そうして。ペルセ、君も一緒に休憩しよう。」

主の邪魔をしないように静かに控えていたペルセニーアをジョシュは振り返り、一緒に来るよう促した。ジョシュの笑顔を受けて、ペルセニーアは一礼した。

* * *

「サティは元気だろうか。」

ジョシュの部屋で軽く話をしたあと、アンヘルは部屋を辞してペルセニーアと共に廊下を歩いていた。丁度、ペルセニーアの交代の時間に当たつたので、アンヘルが誘つて並んで王宮を歩いていたのだ。

「セラフィーナが寂しがっている。」

アンヘルは小さく笑つて、ペルセニーアを伺つた。アンヘルの笑顔に答えるよつて、ペルセニーアも頷いた。

「先日、杖の賢者殿から連絡が。」

「ほひ、それは本当かい？」

「ええ。サティが到着した、と。」

「そうか。それはよかつた。」

ペルセニーアの実家であるアルザス家に、先日手紙が届いたという。差し出し人は、剣の賢者と杖の賢者の連名。サティは賢者に無事に会つことが出来たようだつた。

それを聞いたアンヘルは端整な顔を嬉しそうに崩し、何度も頷く。

ヴィルレー公爵家で一晩預かった猫のサティは、あれからアルザス家の保護の下、無事に旅に出たようだつた。理の賢者の弟子であるという猫に、どのような旅路を用意したのか…とか、なぜ頑なにアルザス家がサティの世話をしようとしているか…など、聞いてみたことは多くあつたが、アンヘルはその事情をほとんど聞かなかつた。ペルセニーアは何かを伏せているようであり、アンヘル自身もそれを察したが、それは恐らくペルセニーアの個人的なところにも抵触するだらうと思つたからだ。いつか話して欲しいと思いながらも、今はまだ、踏み込めるほどの仲ではない。

ただ、ペルセニーアはセラフィーナが寂しがつてゐる…という話を聞いて、氣を使つたようだ。確かに、サティは無事だと知れば、自分の娘は喜ぶに違いない。

「セラフィーナ嬢に、サティは無事です…と、お伝えください。」

「ああ。…きっと喜ぶだろ?。…あ。」

アンヘルが突然何かを思い出したように、コホンと咳払いした。足を止める。すると、ペルセニーアもつらった様に足を止めた。

「もしよかつたら、…その、貴女から話して聞かせてやつてくれないだろうか。」

「え？」

思いがけない言葉を聞いたよう、ペルセニーアが首をかしげた。

「…セラファイーナのことなんだが。」

「セラファイーナ嬢が何か？」

「もうすぐその…、あの子の誕生日ですね。」

「まあ、おめでとうございます。」

「ああ、ありがとうございます。…それで、毎年家人だけで祝いをしていたのだが。」

「ええ。」

「その…。」

いつも落ち着いているアンヘルだったが、今は照れたような表情を浮かべてペルセニーアに向き合った。

「今年は…貴女にも来てもらいたいのだが。」

「私に…ですか？」

「ああ。ダメだろうか。」

ペルセニーアが、アンヘルのことを見つめている。
濃紺の騎士服に、黒い飾り紐は黒翼騎士団の証だ。金茶色の髪は緩くまとめて前に垂らしていた。

少しの間、2人の視線が絡んだ。それほど間を置かず、ペルセニーアの顔が綻ぶ。普段は凜々しい振る舞いと表情で、女性ながら侍女達にもひそかな人気のペルセニーアだが、このように笑うと、女性らしいとても柔らかな雰囲気になる。凜々しい表情からこの笑顔に移り変わる瞬間を見るのが、アンヘルはとても好きだった。

妻に先立たれて6年になる。公爵家の長子として決められた婚約者、定められた相手ではあった。燃えるように求める感情は無かつたが、妻として誠実に愛して子を生した人だ。その妻に死なれてからというもの、いまだ若く紳士的な容姿も手伝つて、ヴィルレー公アンヘルの元にはひつきりなしに縁談の話が沸いている。だが、そのどちらがアンヘルにとつてはわずらわしいだけだった。どの縁談も、アンヘルの公爵という地位だけを求めている人間達にほかならない。それは貴族の社会における振る舞いとして、間違つてはいるわけではないだろう。…だが、公爵だというだけで、望まない婚姻を押し付けられるくらいならこのまま独身でいたほうが気が休まる。

誰か特別に思いを寄せた相手がいるかというと、それも無かつた。互いに定められた相手を愛することしか許されなかつた妻を差し置いて、妻が死んだからといって、自由に誰かを求めることが後ろめたいという気持ちもあつたのだ。誰かを愛するなどという感情は諦めるべきなのだろう、そう思つていた。

だが。

「喜んで、お伺いします。」

ペルセニーアが、アンヘルに向けた柔らかな笑顔をいつもの慎ましい遠慮がちな表情に戻して、礼儀正しく頷いた。それがアンヘルには名残惜しい。

「ありがとう、フィーナも喜ぶ。」

彼女と親しく言葉を交わすようになつてから、アンヘルの心に暖かく灯る小さな光。それはまだ、誰にも言えぬほどの小さなものだつた。遠く若い時分に公爵家の長子として諦めていた感情、後ろめたさから仕舞い込んでいた気持ちの類だ。アンヘルには想像できる。そう遠くない未来、この暖かさはやがて大きく心を満たすようになるだろう。今はまだ、その笑顔が自分ではなくセラフィーナに向けられるものだとしても構わない。いつか、その笑顔が自分にも…、向けられるようになつてくれるだろうか。そして、自分はそれを求めてよいだろうか。

騎士団の詰め所に足を向けるペルセニーアと、王宮の正面へと向かうアンヘルはここでお別れだ。

「ペルセ、貴女が来てくれると、私も嬉しい。」

「え？」

「ではここで、ペルセニーア。」

アンヘルは見事な一礼を施した。慌てたようにペルセニーアも騎士の礼を取る。

王宮の門へと歩みを進めながら、さりげなく、ペルセニーアを愛称で呼ぶことに成功したアンヘルは自分の顔が緩むのを自覚した。ペルセニーアが来ると知れば娘は喜ぶだろう。だがそれ以上に、アンヘル自身も楽しみなのだ。

そんなアンヘルの後姿をしばらく見送っていたペルセニーアが、ほんの僅かに頬を染めてうつむいた。

「小話」 ヴィルレー公爵の場合（後書き）

次も小話になります。

「小話」 アルザス家の場合

その日、白翼騎士団団長アルザス伯爵パヴェニーアは久々の休日だった。妻のセシルに請われ、市街を買い物に付き合っている。従者などはつけず、2人きりだった。パヴェニーアの妻セシルは、緩やかにウエーブした綺麗な栗色の髪をした、細身の可愛らしい女性だ。厳ついクマのようなパヴェニーアと並ぶとまさに美女と野獣で、その組み合わせは目立っていた。目立つていたが、腕を組み、仲睦まじく歩いている様子は誰も口を挟めない。

「あなた？ 行きたいお店があるの。」

「…む、珍しいなお前が。」

普段は決して我慢をいわないセシルは、贅沢もほとんどしない。伯爵夫人として必要な程度に身の回りを調べているが、よく聞くよくな、貴族の妻だからといって增長して贅沢三昧をするような女ではないのだ。パヴェニーアの腕に自分の腕を絡め、まるで若い恋人達の街歩きのような感覚が楽しいらしく、セシルは上機嫌だった。

「あのお店よ。」

「…あ、…あの店か…！」

パヴェニーアの顔が赤くなる。そんなパヴェニーアを見て、セシルは嬉しそうに夫の太い二の腕に体重を預けた。

「…」(ソリお願いしてたものがあつて…。)

「お願いしてたもの?」

「アハ。」

「なんだ?」

「秘密よ。」

うふふ…と笑う、愛らしい妻の笑顔にパ、ヴュニーアの顔も笑顔になる。クマの顔が笑顔になると、楽しいから人一人狩ります…くらいな怖さだったが、セシルから見たら魅力的な夫の笑顔だ。2人がそんな風に笑いあいながら歩いていると、やがて目的の店にたどり着いた。

「いらっしゃいませー…」これは、アルザス伯爵、いつもありがとうございます。」

「つむ。気にするな…。」

幸いなことに店内にはパ、ヴュニーア達以外はおりず、顔なじみらしい店主はカウンターから何かを取り出した。

「奥様、お伺いしていた品物…このようなものならありましたがないかがでしようか。」

「まあ…ねえ、あなた、見て!」

「…おお…これは…。」

店主が取り出したのは、綺麗な金色ネズミのふわふわしたぬいぐる

みだつた。

* * * *

セシルは「ひとつ」としながら、そつとネズミのぬいぐるみを両手ですくつた。実物大で、しかもふわふわのさわり心地。きゅ…と両手のひらに包み込むと、柔らかくてセシルは「ひとつ」とりある。

「きんくまはむすたー」という愛玩用のネズミのぬいぐるみです。どうです、リアルなにこの愛くるしさ!」

「… や、セシル!」

金色の毛皮は、パグローーーアにの人を連想させた。

死んだと思っていた兄が帰ってきたのが、つい先日のような心地がする。ただし、その兄は金色の毛皮の愛くるしいネズミになり、セピア色の綺麗な毛皮の猫を連れていたのだった。…ああ、あのふわふわの細やかな毛皮…。兄を運ぶためにそつと手の上に乗せたときのあの感触は忘れられない。自分の上着のポケットに入れてそこから小さく顔を出したとき、両前足でポケットの端を掴み、Yの字の口元を忙しく動かしながら顔をきょろきょろさせていた、あの愛くるしさといったら悶死するかと思った。しかし、残念なことに兄は何度頼み込んで、腹のふかふかを触らせてはくれなかつたのだ。

…そして今。

なんとその兄にそつくりのぬいぐるみが、妻の手で抱きしめられているではないか! …なんということだ。正直に言おう。可愛いネズミを抱きしめている妻が可愛い。こつも可愛いがさりと割増し

だ。パヴェーラは可愛いもの、愛らしいものが好きな男なのだ。

「まあ、あなたったら、ぬいぐるみに嫉妬しているの？」

「ちがい。〔ネズミを抱きしめて〕お前が可愛い。」「

「…やだ、貴方ったら。もう、しょうがないわね。」

セシルは頬を赤らめながら、はいぢりや、と、ネズミのぬいぐるみをパヴェーラの大きな手にちょこんと乗せた。

つぶらな瞳、Yの字の口元、ふわふわの毛皮、小さな前足、今にも動き出しそうな髪…くそつ、なんという愛くるしさ…。パヴェーラは指でそつと、ぬいぐるみの頭を撫でてみた。撫でている夫の手をそつと包み込み、セシルが見上げる。

「あんまり撫でていると、お義兄様もサティさんも怒るかしら?..」

サティはピウニー卿の毛皮をセシルから守るため、彼を自分の毛皮の中に隠したことがあつたのだ。前足で小さなネズミを抱え込む猫の姿の可愛らしさは、かなりの破壊力だった。2人はしばしの間、その姿を妄想する。

「セシル!…ああ、あの姿は俺も見たかった…。けれど、兄上がサティ殿を庇つて剣を振るう姿もまた…」

「…私も、そんなお義兄様の勇姿を見たかったわ。」

「お前なら分かると思ひやー。」

「貴方!..」

店の主人は夫婦の性格を心得ている。はむすたーのぬいぐるみを撫で撫でうつとりしている2人のやり取りに、穏やかに瞳を細めた。やがてカウンターの下からもう一つの品物を取り出す。それを見た夫婦は、驚嘆の声を上げた。

「……なつ……！」、これは……！」

「まあ……！」

店主が取り出したのは、セピア色の短い毛並みがシルクのような手触りで、大きな瞳はグリーンの、少し小柄な猫のぬいぐるみだった。くつたり感がある作りで、抱き心地がなんとも絶妙で素晴らしい。

「どうです。しんがふーらという種類の猫のぬいぐるみです。くつたり感と手触りが堪らない逸品でしょう。」

パヴェニーアは猫のぬいぐるみをそつと撫でてみる。

「いひー！撫でるなー！」

妻の声真似に、びぐー！と、パヴェニーアの手が止まったのは、ほとんど条件反射だ。夫が猫のサティに触れようとすると、ピウーネ卿はいつもそんな風に怒っていた。その怒る様子がこれまた可愛らしいのだ。髭がピーンと緊張して、毛皮が膨らむあの表情！　若干瞳が細まって釣り上がったりなんかして。

セシルは、悪戯っぽくくすぐると笑うと、夫の横から猫のぬいぐるみをさらって抱きしめた。小さなネズミと違つて大きさが一度よく、極上の抱き心地だ。

「ねえ、あなた、いいでしょ？」「

「く…俺にも、その…。」

あの（ネズミの）兄の毛皮をいともたやすく可愛らしく膨らませる、罪深い猫…綺麗な毛皮と、猫特有の油断ならない瞳が可愛らしいのだが…その猫そっくりのぬいぐるみが、妻の手で抱きしめられているではないか！…なんということだ。正直に言おつ。可愛い猫を抱きしめている妻を抱きしめたい。いつも抱きしめたいが、せりひで抱きしめたい。5割り増しで抱きしめたい。

「まあ、あなたったら、猫はダメよ？ 私がお義兄様に怒られてしまうわ。」「

「ちがい。」（猫のぬいぐるみを抱きしめている）お前を抱きしめたい。

「…やだ、あなたったら…」

本来ならいきなり抱きしめたいところだが、ここはさすがに公共の場だ。パウニーは妻の肩を遠慮がちに抱へて留めて、ぐっと拳を握った。

「飾のときのレイアワームアマニアは…綿密に練りねば…。」

「家に帰つたら楽しみね！ あなた！」

夫婦は手を取り、うふふあははと機嫌だった。

こうして、アルザス家のぬいぐるみコレクションに、猫とネズミのぬいぐるみが増えることになつたのだが、その事実をピュニー卿が確認して驚愕するのは、もう少し先の話だ。

* * * *

「…くしゅん！」

「サティ、どうした、風邪か？」

杖の賢者の館のピュニー卿とサティに宛がわれた部屋で、サティはいいようの無い寒気を感じてくしゃみをした。

「ん…大丈夫。急に寒気が。」

「寒氣…？…っ…はくしょん！」

歴戦の騎士であるはずのピュニー卿の背も、奇妙な寒気に襲われて震えた。

「なに、ピウも風邪なの？」

「いや…それとはまた、別種の寒氣が…。」

2人はいぶかしげな顔を浮かべ、お互いの体温を毛皮越しに感じながら丸まつたのだった。ふー、なんだろうこの寒気。

* * * *

ちなみに、アルザス伯爵家の男達は代々愛妻家が多いことでも有名

である。

「小話」 アルザス家の場合（後書き）

当初の予定以上にアレな夫婦に…。

次話からまた本編に戻ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9584w/>

ピウニー卿の冒険！

2011年10月14日20時05分発行